

豊 後 府 内 17

中世大友府内町跡第11・72・76・80次調査

一般国道10号古国府拡幅事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(8)

(第1分冊)

2013

大分県教育庁埋蔵文化財センター



中世大友府内町跡第11次調査（北方上空から）



中世大友府内町跡第11次調査 完掘状況全景（上が北）



大友11次 SD044出土 金箔土師器皿・真鍮製杓子と鍵



大友11次 SD011出土 鬼瓦（眼球部に金箔）



中世大友府内町跡第80次調査空中写真 (上) 16世紀後葉までの遺構面 (下) 完掘後



第2南北街路と町屋段階の礎石建物（島津侵攻以降 1587～1600年代頃）



第2南北街路と側溝（島津侵攻直前 天正14年〔1586〕頃）



第2南北街路と堀（1570～1580年代頃）



完堀状況（街路下から検出された柱穴列1が見える）

卷頭図版6



1020



1021



1022



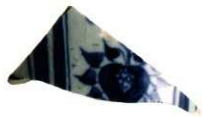
1023



1024



1025



1026



1025

中世大友府内町跡第72・80次調査出土元青花梅瓶

序 文

本書は、大分県教育委員会が国土交通省九州地方整備局大分河川国道事務所の依頼を受けて実施した一般国道10号古国府拡幅事業に伴う中世大友府内町跡の発掘調査報告書です。

遺跡の所在する大分市は、奈良時代に国府が置かれて以来、豊後国や大分県の政治・経済の中心地としての役割を果たしてきました。特に、「府内」と呼ばれ、豊後国の領主であった大友氏の本拠地であった戦国時代には南蛮貿易やキリスト教布教の国内拠点となるなど、日本の中世都市の中でも特異な存在でした。

本書は、大友氏館跡の北東に位置する時宗寺院「称名寺」の発掘調査成果を収録しました。称名寺は14世紀中頃に創建され、豊後府内では万寿寺に次ぐ規模をもつ寺院でした。

大友宗麟の時代である16世紀後葉になると、称名寺は豊後府内の外港があった沖の浜に移転し、その跡地を拡張する形で大規模な堀が造られていたことが、今回の発掘調査により判明しました。この堀の中からは、多量の土器・陶磁器や動物の骨などとともに、ヨーロッパで作られた可能性が高いガラス器や中国明時代に作られた漆製の枕（鎗金唐枕）、豊後府内で作られた金箔貼りの土師質土器皿などの貴重な遺物が出土しました。これらの遺構や遺物は戦国時代における豊後府内の繁栄を物語る重要な発見といえます。

本書が埋蔵文化財に対する保護・啓発、さらには学術研究の一助として活用されれば幸いです。

最後に、この発掘調査に多大な御支援と御協力をいただきました関係各位に対し衷心から感謝申し上げます。

平成25年3月29日

大分県教育庁埋蔵文化財センター

所長 山口博文

例 言

1. 本書は、大分市錦町に所在する中世大友府内町跡第11・72・76・80・88・95次調査の発掘調査報告書で、2分冊の内の第1冊目である（第88・95次は第2分冊に掲載）。
2. 発掘調査は一般国道10号古国府拡幅事業の実施に伴い、国土交通省九州地方整備局大分河川国道事務所の委託を受けて、大分県教育委員会が実施した。
3. 本書には中世大友府内町跡第11・72・76・80次調査の成果を掲載している。
4. 中世大友府内町跡第11次調査は韓国際航業、第72・76次調査は有限会社九州総合文化財研究所、第80次調査は株式会社大成エンジニアリングに、遺構実測の支援委託や発掘調査の支援委託を行った。
5. 遺物実測・トレースなど報告書作成に伴う諸作業については、埋蔵文化財センター職員が担当したほか、有限会社九州総合文化財研究所・株式会社ピノクに整理作業を委託した。
6. 出土遺物ならびに図面・写真等は、大分県教育庁埋蔵文化財センター（大分市大字中判田ビワノ門1977）において保管している。
7. 本書で使用する方位はいずれも座標北である。測地基準には、中世大友府内町跡における過去の資料との連続性を考慮して日本測地系を使用している。
8. 本書で使用する遺構略号は、以下の通りとする。
SD：溝 SK：土坑 SE：井戸 SF：街路 SP：柱穴および小穴
SX：その他の遺構（不明遺構・集石遺構・整地層など）
9. 本書で使用した出土遺物の分類については、以下の文献による。
青花 小野正敏「15～16世紀の染付繪・皿の分類と年代」（『貿易陶磁研究』No.2 1982年）
青磁 上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」（『貿易陶磁研究』No.2 1982年）
白磁 森田 勉「14～16世紀の白磁の分類について」（『貿易陶磁研究』No.2 1982年）
備前焼
栗岡 実「中世備前焼甕（壺）の編年案」・「備前焼播鉢の編年案」（『第3回中近世備前焼研究会資料付第1回・第2回研究資料』所収 2000年）
中国南部産焼締陶器鉢
吉田 寛「中世大友府内町跡出土の産地不明焼締陶器について」（『貿易陶磁研究』No.28 2003年）
京都系土師器および土師質土器
塩地酒一「九州出土の京都系土師器皿」（『中近世土師の基礎研究』XIV 1999年）
坂本嘉弘「中世大友府内町跡出土の土師質土器編年」（『豊後府内2』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第2集 2005年）
10. 第11次調査区から第95次調査区において連続する同一遺構は調査ごと異なる遺構番号のため、次頁にその対応関係を示しておく。
11. 本書の執筆は、以下のとおり担当した。
坂本嘉弘 第1章・第2章・第3章
吉田 寛 第4章・第5章
12. 本書の編集は、吉田寛・坂本嘉弘が行った。

各調査区遺構対照表

	第11次	第72次	第80次	第88次	第95次
溝				SD004	SD270
溝	SD048			SD071	
土坑				SK100	SK060
堀	SD044	SD025	SD100(上層) SD101(下層)	SD120	
街路側溝				SD142	
堀	SD051		SD200	SD160	
溝	SD043			SD173	
溝				SD185	SD049
溝	SD142		SD201	SD223	
溝	SD075		SD095	SD225	
溝				SD253	
井戸	SR152			SE441	
第2南北街路	SF140		SF006 SF094	第2南北街路	

目 次

巻頭図版 序文 例言

第1章 はじめに（坂本）

第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の経過	1
第3節 調査組織の構成	2
第4節 報告書作成にあたって	
1 本書の調査区位置	3
2 府内古岡と街路の名称	5

第2章 遺跡の立地と環境（坂本）

第1節 地理的環境	8
第2節 歴史的環境	9

第3章 中世大友府内町跡第11・76次調査（坂本）

第1節 調査の概要	11
第2節 遺構と遺物	
1 遺構の概要と基本層序	12
2 第11次調査の遺構と遺物	
(1) 土坑	19
(2) 溝・堀	42
(3) 井戸92	92
(4) 街路・側溝	103
(5) 土坑墓	112
(6) 柱穴状遺構	113
(7) 各地区出土遺物	115
3 第76次調査の遺構と遺物	
(1) 調査の概要	118
(2) 土坑	118
(3) 表土・包含層川土遺物	120
第3節 小結	122

第4章 中世大友府内町跡第72次調査（吉田）

第1節 調査の概要	123
第2節 遺構と遺物	
1 遺構の概要と基本層序	124
2 第72次調査の遺構・遺物	
(1) 街路・街路側溝・石列	131
(2) 堀	135

(3) 掘立柱建物・柱穴	201
(4) 土坑・瓦溜め	202
(5) 井戸	209
(6) 包含層・整地層の出土遺物	212
第3節 小結	214
第5章 中世大友府内町跡第80次調査（吉田）	
第1節 調査の概要	217
第2節 遺構と遺物	
1 遺構の概要と基本層序	218
2 「町屋」段階（1587年～1600年代）の遺構	
(1) 街路・街路側溝	227
(2) 礎石建物と関連遺構・柱六列・柱穴	240
(3) 土坑・遺物集中部	246
(4) 集石遺構・石積み遺構	261
(5) 井戸	266
(6) 包含層・整地層	277
3 「大規模施設」段階（1570年代～1586年）の遺構	
(1) 街路・街路側溝・暗渠	307
(2) 木戸（釘貫）遺構	319
(3) 堀	323
(4) 土坑	397
(5) 柱六列・柱穴	399
4 「寺院」段階（14世紀前葉～16世紀後葉）の遺構	
(1) 溝・堀	401
(2) 土坑	407
(3) 井戸	411
(4) 柱六列・柱穴	413
(5) その他の遺構	415
5 古代（奈良・平安時代）の遺構	420
第3節 小結	423
遺物一覧表	433
写真図版	487
報告書抄録	569
（以下、第2分冊）	
第6章 中世大友府内町跡第88次調査（小柳）	
第7章 中世大友府内町跡第95次調査（染矢）	
第8章 自然科学的分析	
第9章 総括（小柳・吉田）	

挿図目次

第1章 はじめに

第1図	中世大友府内町跡のJ R日豊・豊肥線	3
	以北の調査区位置図	
第2図	中世大友府内町跡発掘調査状況	4
第3図	府内古図と街路名称の設定	5

第2章 遺跡の立地と環境

第4図	中世大友府内町跡と周辺の戦国時代遺跡	8
第5図	中世大友府内町跡と周辺の遺跡	9

第3章 中世大友府内町跡第11・76次調査

第6図	中世大友府内町跡第11・76次調査及び河 辺調査位置図	11
第7図	中世大友府内町跡第11・76次調査 遺構配置図(1/100)	13~14
第8図	第11・76次調査区土層図	15~16
第9図	SK001実測図(1/30)	19
第10図	SK001出土遺物(1/3, 1/5)	20
第11図	SK012実測図(1/30)	21
第12図	SK001出土遺物(1/3)	21
第13図	SK021実測図(1/30)	22
第14図	SK021出土遺物(1/3)	22
第15図	SK040-080-081-082実測図(1/30)	23
第16図	SK040出土遺物(1/3)	24
第17図	SK045実測図(1/30)	24
第18図	SK045出土遺物(1/3)	24
第19図	SK049実測図(1/40)	25
第20図	SK049出土遺物①(1/3)	26
第21図	SK049出土遺物②(1/3, 1/1)	27
第22図	SK049出土遺物③(1/5)	28
第23図	SK052実測図(1/30)	29
第24図	SK052出土遺物(1/3)	30
第25図	SK054実測図(1/30)	31
第26図	SK058出土遺物(1/30)	31
第27図	SK054実測図(1/3)	31
第28図	SK066実測図(1/30)	32
第29図	SK068出土遺物①(1/3)	32
第30図	SK068実測図(1/30)	32
第31図	SK068出土遺物②(1/5)	33
第32図	SK073実測図(1/30)	33
第33図	SK073-081-082出土遺物(1/3)	33
第34図	SK087出土遺物(1/3)	34
第35図	SK087実測図(1/30)	34

第36図	SK101実測図(1/30)	34
第37図	SK101出土遺物(1/3)	34
第38図	SK116実測図(1/30)	35
第39図	SK116出土遺物実測図(1/3, 1/1)	36
第40図	SK123実測図(1/30)	37
第41図	SK123出土遺物(1/3)	37
第42図	SK138実測図(1/3)	38
第43図	SK138出土遺物実測図(1/30)	38
第44図	SK150実測図(1/30)	38
第45図	SK150出土遺物(1/3)	38
第46図	SK159実測図(1/30)	39
第47図	SK159出土遺物①(1/3)	40
第48図	SK159出土遺物②(1/3)	41
第49図	SD043-053実測図(1/80)	42
第50図	SD043出土遺物①(1/3)	43
第51図	SD043出土遺物②(1/3, 1/5)	44
第52図	SD044-048-051実測図(1/80)	45
第53図	SD044出土遺物①(1/3)	46
第54図	SD044出土遺物②(1/3)	47
第55図	SD044出土遺物③(1/3)	48
第56図	SD044出土遺物④(1/3)	51
第57図	SD044出土遺物⑤(1/3)	52
第58図	SD044出土遺物⑥(1/3)	53
第59図	SD044出土遺物⑦(1/3)	54
第60図	SD044出土遺物⑧(1/3)	56
第61図	SD044出土遺物⑨(1/3)	57
第62図	SD044出土遺物⑩(1/3)	58
第63図	SD044出土遺物⑪(1/3)	61
第64図	SD044出土遺物⑫(1/3)	62
第65図	SD044出土遺物⑬(1/3)	63
第66図	SD044出土遺物⑭(1/3)	64
第67図	SD044出土遺物⑮(1/3)	67
第68図	SD044出土遺物⑯(1/3)	68
第69図	SD044出土遺物⑰(1/3)	69
第70図	SD044出土遺物⑱(1/3)	70
第71図	SD044出土遺物⑲(1/3)	71
第72図	SD044出土遺物⑳(1/3)	72
第73図	SD044出土遺物㉑(1/3)	73
第74図	SD044出土遺物㉒(1/3)	74
第75図	SD044出土遺物㉓(1/3, 1/2)	75
第76図	SD044出土遺物㉔(1/5)	76

第77回	SD044出土遺物②(1/3, 1/2, 1/1) ·····	77
第78回	SD044出土遺物③(1/5) ·····	78
第79回	SD044出土遺物④(1/5) ·····	79
第80回	SD044出土遺物⑤(1/5) ·····	80
第81回	SD044出土遺物⑥(1/1) ·····	81
第82回	SD048実測図 ·····	82
第83回	SD048出土遺物①(1/3) ·····	83
第84回	SD048出土遺物②(1/3) ·····	84
第85回	SD048出土遺物③(1/3, 1/2) ·····	85
第86回	SD048出土遺物④(1/5) ·····	86
第87回	SD051出土遺物①(1/3, 1/6) ·····	87
第88回	SD051出土遺物②(1/3, 1/1) ·····	88
第89回	SD053出土遺物(1/3, 1/1) ·····	89
第90回	SD142実測図(1/40) ·····	90
第91回	SD142出土遺物(1/3) ·····	90
第92回	SE011実測図(1/40) ·····	91
第93回	SE011土層断面実測図(1/40) ·····	92
第94回	SE011出土遺物(1/3, 1/6) ·····	93
第95回	SE071実測図(1/40) ·····	94
第96回	SE071-086土層実測図(1/40) ·····	95
第97回	SE071出土遺物(1/3) ·····	96
第98回	SE086実測図(1/40) ·····	97
第99回	SE086出土遺物①(1/3) ·····	98
第100回	SE086出土遺物②(1/3, 1/5) ·····	99
第101回	SE086出土遺物③(1/2) ·····	100
第102回	SE086出土遺物④(1/1) ·····	100
第103回	SE133実測図(1/40) ·····	101
第104回	SE133出土遺物(1/3) ·····	102
第105回	SF140 1面実測図(1/100) ·····	103
第106回	SF140 2面実測図(1/100) ·····	103
第107回	SF140 上面出土遺物(1/3) ·····	103
第108回	SF145出土遺物(1/2) ·····	104
第109回	SF140 3面実測図(1/100) ·····	104
第110回	SF140 4面実測図(1/100) ·····	104
第111回	SD134出土遺物①(1/3) ·····	105
第112回	SF140 5面実測図(1/100) ·····	105
第113回	SF140 6面実測図(1/100) ·····	105
第114回	SD134出土遺物(1/3, 1/1) ·····	106
第115回	SF140 7面実測図(1/100) ·····	106
第116回	SF140 8面実測図(1/100) ·····	106
第117回	SF140 9面実測図(1/100) ·····	107
第118回	SF140 10面実測図(1/100) ·····	107
第119回	SF140 11面実測図(1/100) ·····	107

第120回	SD134出土遺物(1/5) ·····	108
第121回	SF140出土遺物①(1/3) ·····	109
第122回	SF140出土遺物②(1/3, 1/2, 1/1) ·····	110
第123回	SX083実測図(1/20) ·····	112
第124回	SX083出土遺物(1/1) ·····	112
第125回	SP028実測図 ·····	113
第126回	SP028出土遺物(1/1) ·····	113
第127回	SP060-061実測図(1/20) ·····	113
第128回	SP060-061出土遺物(1/3) ·····	113
第129回	SP094-099出土遺物(1/3) ·····	114
第130回	SP099実測図(1/20) ·····	114
第131回	柱穴実測図(1/80) ·····	115
第132回	地区出土遺物①(1/3, 1/2, 1/5) ·····	116
第133回	各地区出土遺物(1/1) ·····	117
第134回	SK001実測図(1/30) ·····	118
第135回	SK002実測図(1/30) ·····	119
第136回	SK005実測図(1/30) ·····	119
第137回	SK007実測図(1/30) ·····	120
第138回	SK010実測図(1/30) ·····	120
第139回	SK052実測図(1/30) ·····	120
第140回	第76次調査区出土遺物(1/3, 1/4, 1/2, 1/1) ·····	121

第4章 中世大友府内町跡第72次調査

第141回	調査区位置図(1/160) ·····	123
第142回	中世大友府内町跡第72次調査遺構配置図①(1/100) ·····	126
第143回	中世大友府内町跡第72次調査遺構配置図②(1/100) ·····	127
第144回	調査区土層実測図 ·····	129~130
第145回	SD030出土遺物(1/3) ·····	131
第146回	SF001実測図(1/30) ·····	132
第147回	SF001・SF008出土遺物(1/3) ·····	132
第148回	SD031実測図(1/40) ·····	133
第149回	SF031出土遺物(1/3) ·····	134
第150回	SX014出土遺物(1/3) ·····	135
第151回	SD025土層図の位置(1/200) ·····	136
第152回	SD025土層図(1/60) ·····	137
第153回	SD025遺物出土状況土層図①(1/100) ·····	138
第154回	SD025遺物出土状況土層図②(1/100) ·····	139
第155回	SD025出土遺物①(1/3) ·····	141
第156回	SD025出土遺物②(1/3) ·····	142
第157回	SD025出土遺物③(1/3) ·····	143
第158回	SD025出土遺物④(1/3) ·····	144
第159回	SD025出土遺物⑤(1/3) ·····	145

第160図	SD025出土遺物㊸(1/3)	147
第161図	SD025出土遺物㊹(1/3)	148
第162図	SD025出土遺物㊺(1/3)	149
第163図	SD025出土遺物㊻(1/3)	150
第164図	SD025出土遺物㊼(1/3)	151
第165図	SD025出土遺物㊽(1/3)	152
第166図	SD025出土遺物㊾(1/3)	153
第167図	SD025出土遺物㊿(1/3)	154
第168図	SD025出土遺物Ⓚ(1/3)	155
第169図	SD025出土遺物Ⓛ(1/3)	157
第170図	SD025出土遺物Ⓜ(1/3)	158
第171図	SD025出土遺物Ⓨ(1/3)	159
第172図	SD025出土遺物Ⓩ(1/3)	160
第173図	SD025出土遺物ⓐ(1/3)	161
第174図	SD025出土遺物ⓑ(1/3)	162
第175図	SD025出土遺物ⓓ(1/3)	163
第176図	SD025出土遺物ⓔ(1/3)	164
第177図	SD025出土遺物ⓖ(1/3)	165
第178図	SD025出土遺物ⓗ(1/3)	166
第179図	SD025出土遺物ⓙ(1/3)	169
第180図	SD025出土遺物ⓜ(1/3)	170
第181図	SD025出土遺物ⓞ(1/3)	171
第182図	SD025出土遺物ⓠ(1/3)	172
第183図	SD025出土遺物ⓡ(1/3)	173
第184図	SD025出土遺物ⓣ(1/3)	174
第185図	SD025出土遺物ⓥ(1/3)	175
第186図	SD025出土遺物ⓧ(1/3)	176
第187図	SD025出土遺物ⓩ(1/3)	177
第188図	SD025出土遺物⓫(1/3)	178
第189図	SD025出土遺物⓬(1/3)	179
第190図	SD025出土遺物⓭(1/3)	180
第191図	SD025出土遺物⓯(1/3)	181
第192図	SD025出土遺物⓰(1/3)	182
第193図	SD025出土遺物⓱(1/3)	183
第194図	SD025出土遺物⓲(1/3)	183
第195図	SD025出土遺物⓳(1/3)	184
第196図	SD025出土遺物⓴(1/3)	185
第197図	SD025出土遺物⓵(1/3)	186
第198図	SD025石塔新出土状況(1/50)	186
第199図	SD025出土遺物⓷(1/3)	187
第200図	SD025出土遺物⓸(1/3)	188
第201図	SD025出土遺物⓹(1/3)	191
第202図	SD025出土遺物⓺(1/3)	192

第203図	SD025出土遺物⓻(1/3)	192
第204図	SD025出土遺物⓼(1/3)	193
第205図	SD025出土遺物⓽(1/3)	194
第206図	SD025出土遺物⓿(1/3)	195
第207図	SD025出土遺物Ⓚ(1/3)	196
第208図	SD025出土遺物Ⓛ(1/3)	197
第209図	SD025出土遺物Ⓜ(1/3)	198
第210図	SD025出土遺物Ⓨ(1/3)	199
第211図	SD025出土遺物Ⓩ(1/3)	200
第212図	SB045実測図(1/80)	201
第213図	柱穴出土遺物(1/3)	201
第214図	土坑実測図①(1/30)	203
第215図	土坑出土遺物①(1/3)	204
第216図	土坑実測図②(1/30)	206
第217図	土坑出土遺物②(1/3)	207
第218図	SX042実測図(1/40)	208
第219図	SX042出土遺物(1/3, 1/8)	208
第220図	SX007出土遺物(1/3)	209
第221図	SE002実測図(1/30)	209
第222図	SE002出土遺物①(1/3)	210
第223図	SE002出土遺物②(1/3)	211
第224図	SE044実測図(1/50)	211
第225図	SE044出土遺物(1/3)	212
第226図	包含層・整地層出土遺物(1/3)	213
第227図	第72次調査における遺構の変遷(1/180)	214

第5章 中世大友府内町跡第80次調査

第228図	調査区位置図(1/800)	217
第229図	遺構配置図①(町屋段階 1/250)	219
第230図	遺構配置図②(大規模施設段階 1/250)	220
第231図	遺構配置図③(寺院段階・古代 1/250)	221
第232図	SF006と周辺の遺構配置図(1/160)	227
第233図	SF006出土遺物①(1/3)	229
第234図	SF006出土遺物②(1/3)	230
第235図	SF006出土遺物③(1/3, 1/2, 1/8, 1/1)	231
第236図	SD010出土遺物①(1/3, 1/2, 1/8, 1/1)	233
第237図	SD099出土遺物(1/3)	235
第238図	SD016出土遺物(1/3, 1/8)	235
第239図	SD030出土遺物(1/3)	236
第240図	SD037出土遺物(1/3, 1/2, 1/8, 1/1)	237
第241図	SD034・SD037・SF026実測図(1/40)	238
第242図	SD034出土遺物(1/3, 1/8)	239
第243図	礎石建物と周辺の遺構配置図(1/150)	240

第 244 図	礎石建物1・3と周辺の遺構実測図(1/60, 1/8)・・・	241	第 287 図	SE173実測図(1/60)・・・	274
第 245 図	礎石建物2実測図(1/60)・・・	242	第 288 図	SE173出土遺物①(1/3)・・・	275
第 246 図	礎石建物2周辺出土遺物(1/3)・・・	242	第 289 図	SE173出土遺物②(1/8)・・・	276
第 247 図	SX058出土遺物(1/3)・・・	243	第 290 図	SE173出土遺物③(1/8)・・・	277
第 248 図	柱六列実測図(1/60)・・・	244	第 291 図	SX084出土遺物(1/3)・・・	278
第 249 図	SP004出土遺物(1/3)・・・	244	第 292 図	SX085出土遺物①(1/3)・・・	280
第 250 図	SP025出土遺物(1/3)・・・	245	第 293 図	SX085出土遺物②(1/3)・・・	281
第 251 図	町屋段帯の柱六出土遺物(1/3)・・・	246	第 294 図	SX085出土遺物③(1/3)・・・	282
第 252 図	SK012実測図(1/30)・・・	247	第 295 図	SX085出土遺物④(1/3)・・・	283
第 253 図	SK012出土遺物(1/3)・・・	247	第 296 図	SX085出土遺物⑤(1/3, 1/8)・・・	284
第 254 図	SK013実測図(1/30)・・・	247	第 297 図	SX085出土遺物⑥(1/2, 1/8, 1/1)・・・	285
第 255 図	SK013出土遺物(1/8)・・・	247	第 298 図	近世整地層出土遺物①(1/3)・・・	286
第 256 図	SK014実測図(1/30)・・・	248	第 299 図	近世整地層出土遺物②(1/3)・・・	287
第 257 図	SK017実測図(1/30)・・・	248	第 300 図	近世整地層出土遺物③(1/3)・・・	288
第 258 図	SK017出土遺物(1/3, 1/8)・・・	248	第 301 図	近世整地層出土遺物④(1/3)・・・	289
第 259 図	SK019～SK021実測図(1/30)・・・	249	第 302 図	近世整地層出土遺物⑤(1/3)・・・	290
第 260 図	SK019～SK021出土遺物(1/3)・・・	249	第 303 図	近世整地層出土遺物⑥(1/3)・・・	292
第 261 図	SK032・SK086実測図(1/30)・・・	250	第 304 図	近世整地層出土遺物⑦(1/3)・・・	294
第 262 図	SK033実測図(1/30)・・・	250	第 305 図	近世整地層出土遺物⑧(1/3)・・・	295
第 263 図	SX038～SX040出土遺物(1/3)・・・	251	第 306 図	近世整地層出土遺物⑨(1/3)・・・	296
第 264 図	SX042出土遺物(1/3)・・・	252	第 307 図	近世整地層出土遺物⑩(1/3)・・・	297
第 265 図	SX078・SK079実測図(1/40)・・・	253	第 308 図	近世整地層出土遺物⑪(1/4)・・・	298
第 266 図	SX078出土遺物(1/3)・・・	254	第 309 図	近世整地層出土遺物⑫(1/3)・・・	299
第 267 図	SK079出土遺物(1/3)・・・	255	第 310 図	近世整地層出土遺物⑬(1/8)・・・	300
第 268 図	SK174実測図(1/40)・・・	255	第 311 図	近世整地層出土遺物⑭(1/8, 1/3, 1/2, 1/1)・・・	301
第 269 図	SK174出土遺物(1/3)・・・	256	第 312 図	近世整地層出土遺物⑮(1/1)・・・	302
第 270 図	SK198実測図(1/40)・・・	257	第 313 図	その他の遺物①(1/3)・・・	303
第 271 図	SK198出土遺物①(1/3)・・・	258	第 314 図	その他の遺物②(1/3)・・・	304
第 272 図	SK198出土遺物②(1/3)・・・	259	第 315 図	その他の遺物③(1/3, 1/2)・・・	305
第 273 図	SK198出土遺物③(1/1)・・・	259	第 316 図	その他の遺物④(1/2)・・・	306
第 274 図	SK198出土遺物④(1/1)・・・	260	第 317 図	その他の遺物⑤(1/1)・・・	306
第 275 図	SX054・SX055実測図(1/30)・・・	261	第 318 図	「大規模施設」段帯の道路・道路側溝・暗渠 など(1/160)・・・	307
第 276 図	SX054・SX055出土遺物(1/3, 1/8)・・・	262	第 319 図	SF094出土遺物①(1/3)・・・	309
第 277 図	SX036・SX088実測図(1/30)・・・	263	第 320 図	SF094出土遺物②(1/3)・・・	310
第 278 図	SX036・SX088出土遺物①(1/3, 1/4)・・・	264	第 321 図	SF094出土遺物③(1/3, 1/1)・・・	311
第 279 図	SX036・SX088出土遺物②(1/4, 1/8)・・・	265	第 322 図	SD090・SD091・SD097実測図(1/60・1/80)・・・	312
第 280 図	SE001実測図(1/50)・・・	266	第 323 図	SD090出土遺物(1/3)・・・	313
第 281 図	SE001出土遺物(1/3, 1/8)・・・	267	第 324 図	SD091出土遺物①(1/3)・・・	314
第 282 図	SE002実測図(1/50)・・・	268	第 325 図	SD091出土遺物②(1/3, 1/4, 1/8, 1/1)・・・	315
第 283 図	SE002出土遺物①(1/3, 1/2)・・・	269	第 326 図	SD201土層断面図(1/40)・・・	315
第 284 図	SE002出土遺物②(1/6)・・・	270	第 327 図	SD201出土遺物(1/3, 1/8)・・・	316
第 285 図	SE002出土遺物③(1/6)・・・	271	第 328 図	略図SX104・SX102・SX089実測図(1/60)・・・	317
第 286 図	SE002出土遺物④(1/6)・・・	272			

第 329 図	SX089-SX104用土遺物(1/3)	318
第 330 図	SD260-SD269実測図(1/50)	318
第 331 図	SD269出土遺物(1/3, 1/8)	319
第 332 図	水戸(釘裏)遺構実測図(1/50)	320
第 333 図	SX103用土遺物(1/3)	320
第 334 図	堀SD100-SD101土層断面図①(1/60)	322
第 335 図	堀SD100-SD101土層断面図②(1/60)	323
第 336 図	SX087出土遺物①(1/3)	324
第 337 図	SX087出土遺物②(1/3, 1/8, 1/2)	325
第 338 図	SD100出土遺物①(1/3)	326
第 339 図	SD100出土遺物②(1/3)	327
第 340 図	SD100出土遺物③(1/3)	328
第 341 図	SD100出土遺物④(1/3)	329
第 342 図	SD100出土遺物⑤(1/3, 1/8, 1/1, 1/2)	330
第 343 図	SD101出土遺物①(1/3)	332
第 344 図	SD101出土遺物②(1/3)	333
第 345 図	SD101出土遺物③(1/3)	334
第 346 図	SD101出土遺物④(1/3)	335
第 347 図	SD101出土遺物⑤(元青花, 1/3)	336
第 348 図	SD101出土遺物⑥(1/3)	338
第 349 図	SD101出土遺物⑦(1/3)	339
第 350 図	SD101出土遺物⑧(1/3)	340
第 351 図	SD101出土遺物⑨(ドラゴン・ジャー, 1/3)	341
第 352 図	SD101出土遺物⑩(1/3)	343
第 353 図	SD101出土遺物⑪(1/3)	344
第 354 図	SD101出土遺物⑫(1/3)	345
第 355 図	SD101出土遺物⑬(タイムナムノイ系 四耳蓋, 1/3)	346
第 356 図	SD101出土遺物⑭(1/3)	347
第 357 図	SD101出土遺物⑮(1/3)	349
第 358 図	SD101出土遺物⑯(1/3)	350
第 359 図	SD101出土遺物⑰(1/3)	351
第 360 図	SD101出土遺物⑱(1/3)	352
第 361 図	SD101出土遺物⑲(1/3)	353
第 362 図	SD101出土遺物⑳(1/3)	354
第 363 図	SD101出土遺物㉑(1/3)	355
第 364 図	SD101出土遺物㉒(1/3)	356
第 365 図	SD101出土遺物㉓(1/3)	357
第 366 図	SD101出土遺物㉔(1/3)	358
第 367 図	SD101出土遺物㉕(1/3)	359
第 368 図	SD101出土遺物㉖(1/3)	360
第 369 図	SD101出土遺物㉗(1/3)	361
第 370 図	SD101出土遺物㉘(1/3)	363

第 371 図	SD101出土遺物㉙(1/3)	364
第 372 図	SD101出土遺物㉚(1/3)	365
第 373 図	SD101出土遺物㉛(1/3)	366
第 374 図	SD101出土遺物㉜(1/3)	367
第 375 図	SD101出土遺物㉝(1/3)	368
第 376 図	SD101出土遺物㉞(1/3)	369
第 377 図	SD101出土遺物㉟(1/3)	370
第 378 図	SD101出土遺物㊱(1/3, 1/4)	371
第 379 図	SD101出土遺物㊲(1/4)	372
第 380 図	SD101出土遺物㊳(1/3)	374
第 381 図	SD101出土遺物㊴(1/8)	375
第 382 図	SD101出土遺物㊵(1/8)	376
第 383 図	SD101出土遺物㊶(1/3, 1/2, 1/1)	377
第 384 図	SD101出土遺物㊷(1/1)	378
第 385 図	SD101出土遺物㊸(1/3)	379
第 386 図	SD101出土遺物㊹(1/3)	380
第 387 図	SD101出土遺物㊺(1/3)	382
第 388 図	SD101出土遺物㊻(1/3)	383
第 389 図	SD101出土遺物㊼(1/3)	384
第 390 図	SD101出土遺物㊽(1/3)	385
第 391 図	SD101出土遺物㊾(1/3)	386
第 392 図	SD101出土遺物㊿(1/3)	387
第 393 図	SD101出土遺物①(1/3)	388
第 394 図	SD101出土遺物②(1/3)	389
第 395 図	SD101出土遺物③(1/4)	390
第 396 図	SD101出土遺物④(1/4)	391
第 397 図	SD101出土遺物⑤(1/4)	392
第 398 図	SD101出土遺物⑥	394
第 399 図	SD101出土遺物⑦	395
第 400 図	SD101出土遺物⑧	396
第 401 図	土坑と出土遺物(1/3, 1/50)	398
第 402 図	柱穴実測図(1/30)	399
第 403 図	SP233実測図(1/30)	400
第 404 図	「寺院」段階の遺構(1/300)	401
第 405 図	SD095実測図(1/40)	402
第 406 図	SD095出土遺物(1/3)	402
第 407 図	SD200土層断面図(1/60)	403
第 408 図	SD200出土遺物①(1/3)	405
第 409 図	SD200出土遺物②(1/3)	406
第 410 図	SD200出土遺物③(1/3, 1/8, 1/2, 1/1)	407
第 411 図	SK186実測図(1/40)	407
第 412 図	SK186出土遺物(1/3)	407
第 413 図	SK081実測図(1/40)	408

第414図	SK083実測図(1/40)	408
第415図	SK083出土遺物(1/3)	408
第416図	SK098実測図(1/40)	409
第417図	SK098出土遺物(1/3)	409
第418図	SK180実測図(1/40)	410
第419図	SK180出土遺物(1/3)	410
第420図	SK191実測図(1/40)	411
第421図	SK191出土遺物(1/3)	411
第422図	SE120出土遺物(1/3)	411
第423図	SE188実測図(1/40)	412
第424図	SE188出土遺物(1/3)	412
第425図	柱穴列1実測図(1/50)	413
第426図	柱穴列2実測図(1/50)	414
第427図	柱穴出土遺物(1/3)	415
第428図	SX202出土遺物(1/3, 1/1)	415
第429図	SK118実測図(1/40)	416

第430図	SK118出土遺物(1/3)	416
第431図	SK177実測図(1/40)	417
第432図	SK177出土遺物(1/3)	418
第433図	SX204出土遺物(1/3)	418
第434図	SX199出土遺物(1/3)	418
第435図	古代(奈良・平安時代)の遺構	420
第436図	SK218実測図(1/30)	421
第437図	SK218出土遺物(1/3)	421
第438図	SX274・SX283・SX300出土遺物(1/3)	422
第439図	第80次調査区周辺の遺構とその変遷 (1/600)	425
第440図	木戸(釘貫)遺構の座標とレベル	426
第441図	中世大友府内町跡第11・12・48・72・ 76・80次遺構配置図①(1/200)	427~428
第442図	中世大友府内町跡第11・12・48・72・ 76・80次遺構配置図②(1/200)	429~430
第443図	中世大友府内町跡第11・12・48・72・ 76・80次遺構配置図③(1/200)	431~432

表目次

第1表	中世大友府内町跡発掘調査一覽①	6
第2表	中世大友府内町跡発掘調査一覽②	7
第3表	旧万壽寺跡発掘調査一覽	7
第4表	中世大友府内町跡第11次調査 主要遺構一覽①	17
第5表	中世大友府内町跡第11次調査 主要遺構一覽②	18
第6表	中世大友府内町跡第76次調査 主要遺構一覽	18
第7表	中世大友府内町跡第72次調査 遺構一覽	125

第8表	中世大友府内町跡第80次調査 遺構一覽①	222
第9表	中世大友府内町跡第80次調査 遺構一覽②	223
第10表	中世大友府内町跡第80次調査 遺構一覽③	224
第11表	中世大友府内町跡第80次調査 遺構一覽④	225
第12表	コンタと推定される花卉形の ガラス製品出土地点一覽	232

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経過

別府湾沿岸は、瀬戸内海を通じて古代から、九州の玄関口としての役割を果たしてきた。中でも大分川左岸地域は、中世・近世・近代を通じ、豊後国・大分県の行政・経済の中心地として発展してきた。特に明治以降、瀬戸内海路に加え、鉄道の敷設や道路網の整備など、陸上交通の発達が顕著になると、県庁所在地である大分市は、東九州の交通の要衝となった。そうした中、明治44年に大分駅が近世城下町の外堀の南に建設されると、周辺は大分県の物流の中心地となり、以後太平洋戦争による空襲の打撃を受けながらも、今日まで発展を遂げた。

ところが、昭和40年代以降の自動車交通量の増加は、大分駅周辺の交通状況に変化を起し、鉄道と道路の平面交差部分では交通障害を引き起こす結果となった。そこで、これらを解消するため昭和45年、「大分市国鉄路線高架化促進期成同盟会」が設立され、25年後の平成7年に大分駅周辺総合整備事業の「大分駅付近連続立体交差事業」として採択された。このため、国道10号線も鉄道の跨線橋である万寿橋を解消する必要が生じた。国土交通省はこれに併せ、道路を拡幅し、顕徳町交差点付近の交通混雑の緩和、沿道築堤の改良、交通事故の防止など、道路交通の安全と円滑化を計るため、「国道10号古国府拡幅事業」を計画した。

一方、大分川左岸沿いには、自らキリスト教に改宗し、南蛮貿易を行った戦国大名である大友宗麟の城下町「府内」があることが、古絵図から知られていた。この古絵図には、大友館・万寿寺など当時の主要な建物の位置や、街路・町屋の配置などが明瞭に描かれ、都市の構造を伝えるものであった。その位置は昭和31年に刊行された大分市史の段階で、大友館や万寿寺をほぼ特定しているが、精度に欠けていた。その後、昭和63年に刊行された大分市史・中巻では新たに府内古図が確認されたこともあり、明治時代の地籍図と照合し、さらに現在の地図に置き換えた。その結果、現在の地図上に高い精度で、戦国時代の「府内」を再現することができた。その規模は、大分川沿いの東西約0.7km、南北2.2kmで、現在「中世大友府内町跡」として周知遺跡となっている。

「一般国道10号古国府拡幅事業」は、この戦国時代の「府内」を南北に貫く土木工事となり、しかもこの町の中核部である大友館の東側を通ずるものであった。そこで、大分県教育委員会は、事業主体者である国土交通省と協議を行い、工事に先立ち発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査の経過

大分県教育委員会は「一般国道10号古国府拡幅事業」に伴う、中世大友城下町跡の発掘調査を、平成12年6月から開始した。しかし、この遺跡に対する発掘調査は、平成8年から大分市教育委員会が大分駅南地区の区画整理事業に伴う、移転先の宅地造成地や民間開発などに対応し実施しており、同じ遺跡を2つの組織が発掘調査する状況であった。そこで大分市教育委員会と協議を行い、遺跡全体を当時の遺跡名である「中世大友城下町跡」とするが、大友館部分は「大友氏館跡」、町屋跡部分は「府内町跡」として県教育委員会と市教育委員会が重複することなく発掘調査手順に調査次数を重ねることとした。その後、大友館跡と万寿寺跡が「大友氏遺跡」の名称で国指定史跡になったこともあり、平成20年に遺跡名を「中世大友府内町跡」、大友館部分は「大友館跡」、万寿寺部分は「旧万寿寺跡」と変更している。

こうして、「一般国道10号古国府拡幅事業」の最初の調査として「府内町跡9次調査」が、開始された。その後、国土交通省と協議を重ねながら、用地が取用された順に発掘調査を行い、平成23年度末の時点では、工事はほぼ完了している。この間、平成16年度からは文化課から独立した調査組織となった大分県教育庁埋蔵文化財センターが平成24年度の事業完了まで発掘調査を担当した。

第3節 調査組織の構成

「一般国道10号古国府拡幅事業」の発掘調査は平成12年6月から開始されたが、この事業区域の西側に隣接して「大友館跡」が想定されており、国指定史跡に向けての確認調査を大分県教育委員会が実施することになった。このように、重要遺跡に近接して大規模な土木事業が実施されることとなり、土木事業と遺跡保存の調整を行う必要が生じたため、文化庁と協議を行い、調査指導者を平成12年度から大分県教育委員会と大分市教育委員会が各1回、年2回開催し、その指導を受けながら発掘調査を実施することとなった。

本書に報告する府内町跡11・72・76・80・88・95次調査は平成13・18・19・22・24年度に発掘調査したもので、大友館の東北側、「府内古園」C類では称名寺にあたる。

以下はその調査体制である。

調査指導者	河原純之（元千葉大学文学部教授・川村学園女子大学教授） 後藤宗俊（別府大学文学部教授・大分県文化財保護審議会委員） 小野正敏（国立人間文化機構理事） 坂井秀弥（元文化庁記念物課主任調査官・奈良大学文学部教授）
-------	---

平成13年度（中世大友府内町跡第9・11・12・13次調査）

文化課長	工藤正徳
参事兼課長補佐	麻生祐治
参事兼課長補佐	清水宗昭
受託事業担当主幹	栗田勝弘
主査	山本恭弘（府内町跡11次調査担当）
主査	原田昭一（府内町跡9次調査担当）
主査	松本康弘（府内町跡13次調査担当）
主事	恒賀健太郎（府内町跡12次調査担当）
文化財発掘調査員	幡上敬一
文化財発掘調査員	橋丈太郎
文化財発掘調査員	山村芳貴

平成18年度（中世大友府内町跡第67・68・72・76次調査）

埋蔵文化財センター所長	小玉学司
調査二課長	坂本嘉弘
受託事業担当副主幹	吉田 寛（府内町跡72次調査）
受託事業担当主査	後藤晃一（府内町跡76次調査）
文化財発掘調査員	河原英明
文化財発掘調査員	権藤聡子

平成19年度（中世大友府内町跡第78・79・80次調査）

埋蔵文化財センター所長	福田快児
次長	坂本嘉弘
調査二課長	栗田勝弘
受託事業担当副主幹	吉田 寛（府内町跡80次調査）
受託事業担当主査	後藤晃一（府内町跡78・79・80次調査）
受託事業担当主事	越智淳平
文化財発掘調査員	河原英明
文化財発掘調査員	宍岐尾可奈子

平成22年度 (中世大友府内町跡第88・91・92次調査)

埋蔵文化財センター所長	山口博文
次 長	坂本嘉弘
受託事業担当副主幹	小柳和宏 (府内町跡88次調査)
受託事業担当副主幹	染矢和徳 (府内町跡88次調査)
資料管理担当主査	吉田 寛 (府内町跡91次調査)
大型事業担当主事	越智淳平 (府内町跡92次調査)

平成23年度 (中世大友府内町跡第95次調査)

埋蔵文化財センター所長	山口博文
次 長	坂本嘉弘
受託事業担当副主幹	小柳和宏
受託事業担当副主幹	染矢和徳 (府内町跡95次調査)

平成24年度 (中世大友府内町跡第93次調査)

埋蔵文化財センター所長	山口博文
次 長	宮内克己
受託事業担当副主幹	小柳和宏
資料管理担当副主幹	染矢和徳 (府内町跡93次調査)

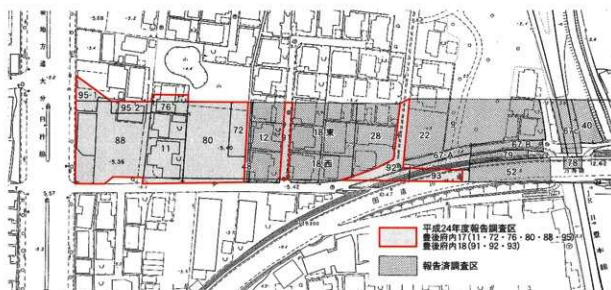
第4節 報告書作成にあたって

1. 本書の調査区位置

中世大友城下町跡の発掘調査は、土地収用状況に合わせて、国土交通省から委託を受け実施している。このため、連続して隣接地を発掘調査することは稀である。そこで、報告書を作成するにあたり、遺構の連続性を考慮し、調査年度が異なっても、隣接した調査区をまとめて刊行している。

そうした中、本書が報告する地域は、府内古図B・C類に描かれる「称名寺」や、「豊後府内」を南北に貫く街路部分にあたる。さらに西にある唐人町に関連する遺構・遺物も出土している。

称名寺
唐人町



第1図 中世大友府内町跡の「R日豊・豊後線以北の調査区位置図



2012年12月現在

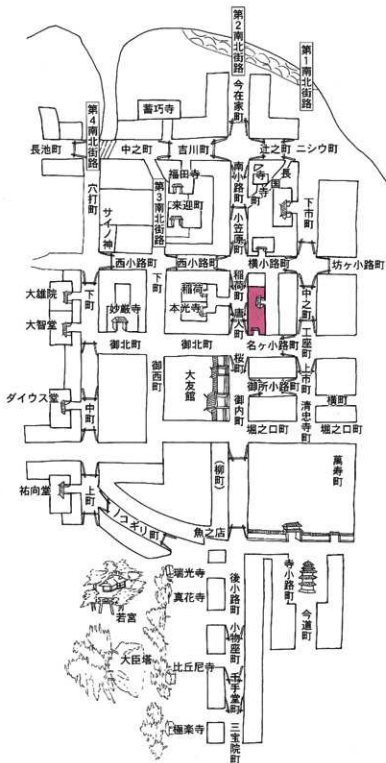
第2図 中世大友府内町跡発掘調査状況 (番号は調査次数 70・74・81・90・100次は地図範囲外)

2. 府内古図と街路の名称

戦国時代に豊後の中心であった府内を描いた「府内古図」は、現在3種類12枚が確認されている「府内古図」は、その研究¹⁾によるとA類・B類・C類に分類され、成立年代は寛永13年(1634)を遡らず、新しくなるほど文字情報が増えることが明らかにされている。すなわち、A類には見られない「御蔵場」の名称はC類のみに見られ、万寿寺西側の「柳町」の名称もB・C類、大友館の東北部の「称名寺」の名称は、B類にのみ書き込まれている。しかし、「府内古図」に描かれている、4本の南北の街路と5本の東西の街路名についてはいずれの「府内古図」にも記載されていない。このため、近年の研究では様々な仮称が冠されてきた。

そこで、報告書作成にあたり、こうした「府内古図」間の不整合と名称の無い街路の呼び方を統一・解消する必要が生じ、大分川側から「第1南北街路」・「第2南北街路」・「第3南北街路」・「第4南北街路」とした。「街路」の名称を選択したのは、ルイス・フロイスの「日本史」、及び宣教師達の書簡や年報の訳文が府内の道路を「街路」と記述されており、都市内の道路の意味でこの名称を使用する。また東西の道路については、御所小路町・名ヶ小路町等の道路名を含む町名があるため、それらについては「御所小路」・「名ヶ小路」とした。

そこで、報告書作成にあたり、こうした「府内古図」間の不整合と名称の無い街路の呼び方を統一・解消する必要が生じ、大分川側から「第1南北街路」・「第2南北街路」・「第3南北街路」・「第4南北街路」とした。「街路」の名称を選択したのは、ルイス・フロイスの「日本史」、及び宣教師達の書簡や年報の訳文が府内の道路を「街路」と記述されており、都市内の道路の意味でこの名称を使用する。また東西の道路については、御所小路町・名ヶ小路町等の道路名を含む町名があるため、それらについては「御所小路」・「名ヶ小路」とした。



第3図 府内古図と街路名称の設定 (府内古図A類をトレース一部変更)

注 (1) 木村幾多郎「府内古図の成立」『大分市歴史資料館年報1992年度版』大分市歴史資料館 1993年

第1章 はじめに

第1表 中世大友府内町跡発掘調査一覧①

平成25年2月現在

調査次数	調査機関	調査年度	事業名	調査場所	調査面積(m ²)	報告書発行	報告書名	調査内容
府内町跡1次	大分市教委	平成8・9年度	区画整移転事業	横小路町	620	平成16年3月	大友府内7	堀約10mの道路
府内町跡2次	大分市教委	平成8・9年度	区画整移転事業	横小路町	200	平成16年3月	大友府内7	
府内町跡3次	大分市教委	平成9年度	区画整移転事業	横小路町	160	平成16年3月	大友府内5	10基の墓前後の境線
府内町跡4次	大分市教委	平成10年度	マンション建設	上町	330	平成14年3月	大友府内4	名ヶ小路の南側の一部
府内町跡5次	大分県教委	平成11・13年度	JR日豊・豊肥線高架	横小路町	4,200	平成17年3月	大友府内1	御蔵場北側の遺構等
府内町跡6次	大分市教委	平成11年度	JR築港線	寺町町・万寿寺	1,600			万寿寺の南側の堀?
府内町跡7次	大分県教委	平成12年度	JR日豊・豊肥線高架	清志寺町	2,000	平成18年3月	豊後府内3	第1南北街道・豊後島
府内町跡8次	大分県教委	平成12年度	JR日豊・豊肥線高架	柳町・堀の南側	2,000	平成17年3月	豊後府内1	15世紀の土屋
府内町跡9次	大分県教委	平成12・13年度	国道10号拡幅	御所小路町	970	平成17年3月	豊後府内2・4・3	御所小路の街道
府内町跡10次	大分県教委	平成13・14年度	JR日豊・豊肥線高架	上町・祐向寺	2,000	平成19年3月	豊後府内6	キリシタン墓
府内町跡11次	大分県教委	平成13年度	国道10号拡幅	長名寺	700	平成25年3月	豊後府内17-1	長名寺の西側の堀
府内町跡12次	大分県教委	平成13年度	国道10号拡幅	大友塚・桜町・名ヶ小路町	700	平成18年3月	豊後府内4-1	大友塚の東北隅・礎石建物
府内町跡13次	大分県教委	平成13年度	国道10号拡幅	御内町	800	平成17年3月	豊後府内2	ウェロニカメダ出土
府内町跡14次	大分市教委	平成13年度	マンション建設	寺人町	104	平成15年3月	大友府内6	井戸
府内町跡15次	大分市教委	平成13年度	スーパー建設	御北町	472	平成16年3月	大友府内3	
府内町跡16次	大分県教委	平成13年度	JR日豊・豊肥線高架	上町	500	平成18年3月	豊後府内2	短冊形地蔵の町屋
府内町跡17次	大分市教委	平成14年度	ポンプ施設建設	市町・清志寺	1,697	平成19年3月	大友府内10	堀町の水路・築石遺構
府内町跡18次	大分県教委	平成13年度	国道10号拡幅	大友塚・御路	450	平成18年3月	豊後府内4-2	大友塚第2北北街道
府内町跡18次東	大分県教委	平成14年度	国道10号拡幅	桜町	700	平成18年3月	豊後府内4-2	大友塚の東側の町屋
府内町跡19次	大分市教委	平成13年度	国庫補助 範囲確認	万寿寺	106			陶製井筒の井戸
府内町跡20次	大分県教委	平成14年度	国道10号拡幅	柳町?	2,100	平成19年3月	豊後府内7	礎石建物・北境の堀
府内町跡21次	大分県教委	平成14年度	国道10号拡幅	堀之口町	700	平成17年3月	豊後府内2	府内2型メダ出土
府内町跡22次	大分県教委	平成14年度	国道10号拡幅	桜町・御所小路町	600	平成18年3月	豊後府内4-3	第2型メダ
府内町跡23次	大分市教委	平成14年度	国庫補助 範囲確認	万寿寺	1,623			
府内町跡24次	大分市教委	平成14年度	国庫補助 範囲確認	万寿寺	58			万寿寺の堀の礎石
府内町跡25次	大分市教委	平成15年度	市道拡幅	ノコギリ町	57	平成19年3月	大友府内9	
府内町跡25-2次	大分市教委	平成15年度	市道拡幅	祐内町	281	平成18年3月	大友府内9	16世紀前半の築石柱礎物
府内町跡25-3次	大分市教委	平成15年度	市道拡幅	上町	18	平成19年3月	大友府内9	
府内町跡25-4次	大分市教委	平成15年度	市道拡幅	上町	8	平成19年3月	大友府内9	16世紀後半の溝の遺構
府内町跡25-5次	大分市教委	平成16年度	市道拡幅	町外	270	平成19年3月	大友府内9	
府内町跡25-6次	大分市教委	平成16年度	市道拡幅	上町	300	平成18年3月	大友府内8	
府内町跡25-7次	大分市教委	平成16年度	市道拡幅	上町	110	平成19年3月	大友府内9	
府内町跡25-8次	大分市教委	平成17年度	市道拡幅	上町	75	平成19年3月	大友府内9	
府内町跡25-9次	大分市教委	平成17年度	市道拡幅	上町	27	平成19年3月	大友府内9	
府内町跡25-10次	大分市教委	平成18年度	市道拡幅	上町	125	平成20年3月	大友府内12	
府内町跡26次	大分市教委	平成15年度	市道拡幅	中町・デウス堂付近	230	平成18年3月	大友府内8	
府内町跡26-2次	大分市教委	平成17年度	市道拡幅	中町・デウス堂付近	156	平成20年3月	大友府内12	
府内町跡26-3次	大分市教委	平成18年度	市道拡幅	中町・デウス堂付近	350	平成20年3月	大友府内12	
府内町跡27-1次	大分市教委	平成16年度	市道拡幅	妙蔵寺	200	平成19年3月	大友府内9	
府内町跡27-2次	大分市教委	平成16年度	市道拡幅	御北町	40	平成19年3月	大友府内9	
府内町跡27-3次	大分市教委	平成17年度	市道拡幅	上町・妙蔵寺	105	平成19年3月	大友府内9	
府内町跡27-4次	大分市教委	平成17年度	市道拡幅	妙蔵寺	32	平成19年3月	大友府内9	
府内町跡27-5次	大分市教委	平成17年度	市道拡幅	妙蔵寺	19	平成19年3月	大友府内9	
府内町跡27-6次	大分市教委	平成17年度	市道拡幅	妙蔵寺	8	平成19年3月	大友府内9	
府内町跡27-7次	大分市教委	平成17年度	市道拡幅	妙蔵寺・御北町	41	平成19年3月	大友府内9	
府内町跡27-8次	大分市教委	平成18年度	市道拡幅	御内町	220	平成20年3月	大友府内12	
府内町跡27-9次	大分市教委	平成18年度	市道拡幅	中町	81	平成20年3月	大友府内12	
府内町跡28次	大分県教委	平成15年度	国道10号拡幅	桜町	480	平成18年3月	豊後府内4-2	大友塚の東側の町屋
府内町跡29次	大分県教委	平成15年度	国道10号拡幅	万寿寺	1,000	平成21年3月	豊後府内12	万寿寺内の区画溝
府内町跡30次	大分県教委	平成15年度	国道10号拡幅	横小路町	700	平成22年3月	豊後府内14	14世紀の町屋
府内町跡31次	大分県教委	平成15年度	JR大越線高架	境小路町	500	平成17年3月	豊後府内15	御蔵場
府内町跡32次	大分市教委	平成18・19年度	個人・市道拡幅	中町・デウス堂付近	237	平成18年3月	大友府内8	
府内町跡33次	大分市教委	平成15年度	国庫補助 範囲確認	府内の南側付近	880			15・16世紀後半の大溝
府内町跡33-2次	大分市教委	平成16年度	個人住宅	府内の南側付近	450			
府内町跡34次	大分県教委	平成15年度	国道10号拡幅	万寿寺	700	平成20年3月	豊後府内8	万寿寺御蔵場の堀・礎石建物
府内町跡35次	大分県教委	平成15年度	国道10号拡幅	万寿寺	500	平成21年3月	豊後府内12	井戸・瓦多敷
府内町跡36次	大分県教委	平成15年度	庄原佐野線	名ノ店・ノコギリ町	850	平成20年3月	豊後府内9	万壽寺跡・井戸
府内町跡37次	大分市教委	平成15年度	アパート建設	御蔵場	217			
府内町跡38次	大分市教委	平成15年度	アパート建設	御所小路町	370			
府内町跡39次	大分市教委	平成15年度	アパート建設	中町	15	平成20年3月	大友府内12	特定箇所小路の掘削・帯状大溝
府内町跡40次	大分県教委	平成18年度	JR日豊・豊肥線高架	御内町	170	平成20年3月	豊後府内10	溝
府内町跡41次	大分県教委	平成18年度	庄原佐野線	名ノ店・ノコギリ町	3,400	平成22年3月	豊後府内16-1	御蔵場の東側の御蔵と町屋
府内町跡42次	大分県教委	平成18年度	国道10号拡幅	万寿寺	1,500	平成21年3月	豊後府内12	万壽寺跡
府内町跡43次	大分県教委	平成18年度	国道10号拡幅	万寿寺	400	平成20年3月	豊後府内8	高寿寺御蔵場の堀・礎石建物
府内町跡44次	大分市教委	平成16年度	アパート建設	御内町	100			
府内町跡44-2次	大分市教委	平成16年度	範囲確認	御西町	20			
府内町跡45次	大分市教委	平成16年度	アパート建設	中町・コレジオ堂付近	250	平成20年3月	大友府内12	
府内町跡46次	大分市教委	平成16年度	駐車場建設	万寿寺	90			
府内町跡47次	大分市教委	平成16年度	店舗建設・範囲確認	長名寺	35			
府内町跡48次	大分県教委	平成18年度	国道10号拡幅 工業用水管	名ヶ小路	70	平成18年3月	豊後府内4-1	名ヶ小路
府内町跡49次	大分県教委	平成18年度	国道10号拡幅 工業用水管	柳町・御路	78	平成22年3月	豊後府内15	
府内町跡50次	大分県教委	平成16年度	個人住宅 浄化槽	ノコギリ町・御路	2			御蔵場の西側の御路と堀溝

第2表 中世大友府内町跡発掘調査一覧②

平成25年2月現在

調査回数	調査機関	調査年度	事業名	調査場所	調査面積(m ²)	報告書刊行	報告書名	調査内容
府内町跡51次	大分県教委	平成17年度	国道10号拡幅	第2南北街道・御内町・万寿寺	4,800	平成22年3月	豊後府内15	万寿寺西側・大友東院南側
府内町跡52次	大分県教委	平成17年度	国道10号拡幅	第2南北街道・大友氏窟	600	平成22年3月	豊後府内15	第2南北街道・大友氏の東側
府内町跡53次	大分市教委	平成17年度	桜ヶ丘南水幹線	万寿寺西側の堀	192	平成21年3月	大友府内13	
府内町跡54次	大分市教委	平成17年度	浄化槽	駒寺の東	7			
府内町跡55次	大分県教委	平成17年度	庄原野緑地	御藏場	320	平成20年3月	豊後府内9	地下墓？
府内町跡56次	大分市教委	平成17年度	国庫補助(総務部)	御西町	76			
府内町跡57次	大分市教委	平成17年度	市下水道	名ヶ小路町	190	平成21年3月	大友府内13	
府内町跡58次	大分市教委	平成17年度	アバウト建設	御所小路町	210			
府内町跡59次	大分市教委	平成17年度	市下水道	桜町	9	平成21年3月	大友府内13	
府内町跡60次	大分市教委	平成17年度	桜ヶ丘南水幹線	万寿寺西側の堀	156	平成21年3月	大友府内13	
府内町跡61次	大分県教委	平成17年度	JRA大幡高築	瑞光寺	240	平成20年3月	豊後府内11	
府内町跡62次	大分市教委	平成17年度	確認調査	第1南北街道	48			街頭跡
府内町跡63次	大分市教委	平成18年度	確認調査	御西町	90			
府内町跡64次	大分市教委	平成17年度	アバウト建設	御西町	153			
府内町跡65次	大分市教委	平成17年度	確認調査	御西町	9			
府内町跡66次	大分市教委	平成17・18年度	確認調査	御西町・大友窟	48			
府内町跡67次	大分県教委	平成18年度	国道10号拡幅	御蔵場・御所小路町	300	平成22年3月	豊後府内15	
府内町跡68次	大分県教委	平成18年度	国道10号拡幅	万寿寺	400	平成21年3月	豊後府内12	
府内町跡69次	大分県教委	平成18年度	庄原野緑地	御藏場・魚ノ店/コギ町	1,741	平成22年3月	豊後府内16-2	街頭跡・井戸・町屋
府内町跡70次	大分市教委	平成18年度	市下水道工事	末道寺	30			
府内町跡71次	大分県教委	平成18年度	JRA大幡高築	瑞光寺	900	平成21年3月	豊後府内13	
府内町跡72次	大分県教委	平成18年度	桜ヶ丘南水幹線	駒寺	300	平成25年3月	豊後府内17-1	名ヶ小路・駒寺寺域
府内町跡73次	大分市教委	平成18年度	桜ヶ丘南水幹線	万寿寺西側の堀	329	平成21年3月	大友府内13	
府内町跡74次	大分市教委	平成18年度	民間共同住宅建築	大塚院の北側	395	平成19年3月	大友府内11	
府内町跡75次	大分県教委	平成18年度	庄原野緑地	御藏場・魚ノ店	870	平成22年3月	豊後府内16-3	第2南北街道・一掃堀跡
府内町跡76次	大分県教委	平成18年度	国道10号拡幅	駒寺	100	平成25年3月	豊後府内17-1	駒寺寺域内
府内町跡77次	大分県教委	平成18年度	庄原野緑地	御藏場・コギ町	1,210	平成22年3月	豊後府内16-4	街頭跡
府内町跡78次	大分県教委	平成19年度	国道10号拡幅	第2南北街道	100	平成22年3月	豊後府内15	
府内町跡79次	大分県教委	平成19年度	国道10号拡幅	第2南北街道	70	平成22年3月	豊後府内15	
府内町跡80次	大分県教委	平成19年度	国道10号拡幅	駒寺	870	平成25年3月	豊後府内17-1	第2南北街道・駒寺寺域
府内町跡81次	大分市教委	平成19年度	民間共同住宅建築	中ノ町付近	400	平成21年3月	大友府内14	崖状遺構・井戸
府内町跡82次	大分市教委	平成20年度	個人住宅(確認)	名ヶ小路町	61			街頭跡
府内町跡83次	大分市教委	平成20年度	民間(店舗建設)	今道町	333	平成22年3月	大友府内15	
府内町跡84次	大分市教委	平成20年度	民間(病院関連)	中ノ町	36	平成22年3月	大友府内16	
府内町跡85次	大分市教委	平成21年度	民間(店舗建設)	中町	38			
府内町跡86次	大分市教委	平成21年度	国庫補助(国庫建設)	御藏場	1,910			
府内町跡87次	大分市教委	平成21年度	庄原野緑地	塔跡?・寺小路町跡	1,604	平成23年3月	大友府内17	塔跡・溝・土坑・屋敷土坑
府内町跡88次	大分県教委	平成22年度	国道10号拡幅	駒寺寺域	1,150	平成25年3月	豊後府内17-2	堀・堀底石製溝跡
府内町跡89次	大分市教委	平成22年度	国庫補助(総務部)	御藏場・柳町	939			井戸・溝・土坑・崖状遺構跡
府内町跡90次	大分市教委	平成22年度	民間開発	ニシク町・辻之町	46			溝・土坑・亀石
府内町跡91次	大分県教委	平成22年度	国道10号拡幅	柳町・第2南北街道	240	平成25年3月	豊後府内18	街頭跡
府内町跡92次	大分県教委	平成22年度	国道10号拡幅	柳町・第2南北街道	644	平成25年3月	豊後府内18	街頭跡
府内町跡93次	大分県教委	平成24年度	国道10号拡幅	第2南北街道	93	平成25年3月	豊後府内18	街頭跡
府内町跡94次	大分市教委	平成22年度	個人住宅(確認調査)	横小路町	69			井戸・土坑
府内町跡95次	大分県教委	平成23年度	国道10号拡幅	駒寺寺域	182	平成25年3月	豊後府内17-2	井戸・土坑
府内町跡96次	大分県教委	平成24年度	JRA高築事業	御所小路町・御所小路	927			
府内町跡97-1次	大分市教委	平成24年度	病院専用地	寺小路町	5,880			街頭跡以外の内部調査・分析
府内町跡98次	大分市教委	平成24年度	個人住宅	菜園寺町南	119			
府内町跡99次	大分県教委	平成24年度	JRA高築事業	ダイウス西側	385			府内から西に出る街頭
府内町跡100次	大分市教委	平成24年度	個人住宅	成守寺東側	1,411			

第3表 旧万寿寺跡発掘調査一覧

平成25年2月現在

調査回数	調査機関	調査年度	事業名	調査場所	調査面積(m ²)	報告書刊行	報告書名	調査内容
旧万寿寺跡1次	大分市教委	平成17年度	国庫補助(総務部)		388			瓦甍め・溝・大型土坑
旧万寿寺跡2次	大分市教委	平成18年度	国庫補助(総務部)	堀之口町	270			道路状遺構・遊路
旧万寿寺跡3次	大分市教委	平成18年度	国庫補助(総務部)		365			堀立柱建物跡・井戸
旧万寿寺跡4次	大分市教委	平成19年度	国庫補助(総務部)		240			大規模埋設跡・溝跡土坑
旧万寿寺跡5次	大分市教委	平成20年度	国庫補助(総務部)		185			大規模埋設跡・溝
旧万寿寺跡6次	大分県教委	平成23年度	庄原野緑地	万寿寺西部	1,411			瓦甍め・溝・瓦瓦

*ゴチック体は県教委実施の発掘調査、ピンクの網掛けは本取巻の発掘調査

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

大分はその名称が示すように、平野を丘陵や河川が分断した地形をしており、各所に小規模な平野が展開する。この中で、大分川の左岸から西側にかけて広がる小地域は、中世以降今日に至るまで、豊後国・大分県の政治経済の中心地となっている。この地域は、東側を大分川が北流し、北側には別府湾が広がり、南側は高崎山系から東に延びる標高約40~30mの上野丘陵が横たわり、西側は高崎山(628m)へと続く標高80mから100mの起伏の激しい丘陵に囲まれている。

上野丘陵

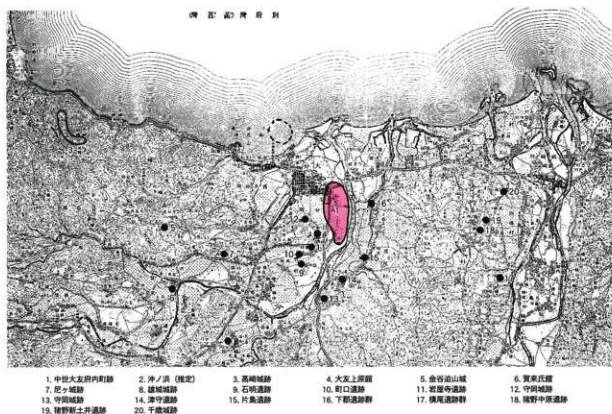
こうした地域の中で、中世大友府内町跡は東部の大分川沿いに形成された都市遺跡である。府内古園に描かれている範囲は、北は現在に比べ西側に大きく曲がっている河口部から、南は上野丘陵の先端部と大分川が接する部分にあたる。現在の標高は河口に近い北部で約4m、上流の南部地域で約6mの自然堤防上に立地する。

自然堤防

北と東側は別府湾と大分川に限られるが、遺跡の南西部から西側の限りは、試掘調査の結果や、元地形が残されている部分の観察から、低湿地の広がりが確認された。この部分は1950年代までレンコンを栽培していたと伝えられている。この低湿地は上野丘陵の裾を走り、北の別府湾方向に伸び、府内古園に描かれる舟入に続いている。

低湿地
舟入

中世大友府内町跡が立地する自然堤防は、発掘調査の結果、検出面は粘質土層であるが下部には砂層が厚く堆積している。下部の砂層から縄文時代晩期から古墳時代前期の土器が出土しており、上部からは8世紀頃の遺物が出土している。おそらくこの間に2~3m堆積し形成されたものと考えられる。



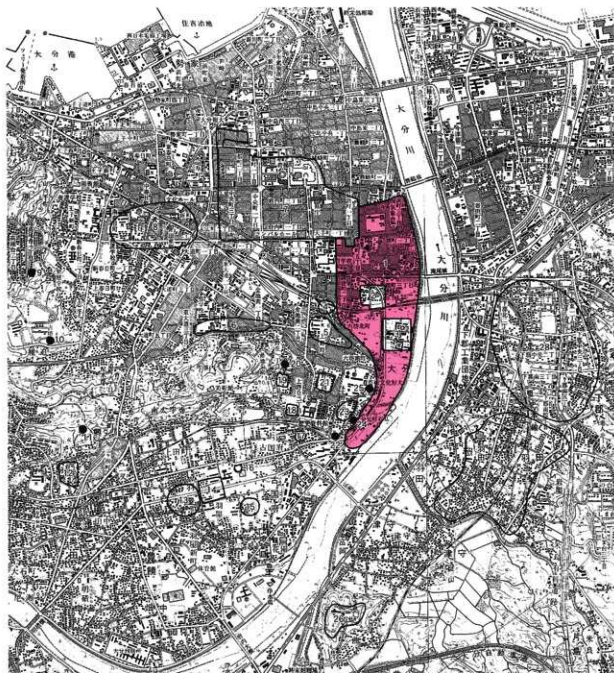
第4図 中世大友府内町跡と周辺の戦国時代遺跡

第2節 歴史的環境

古宮古墳
壬申の乱
大分藩

羽屋井戸遺跡
「評」

別府湾に近い大分川左岸地域化が、豊後のなかでも政治的に特別な地域として注目されるのは7世紀後半である。その代表的な遺跡として国指定史跡として整備されている古宮古墳である。西側の急峻な丘陵地にあるこの古墳は、壬申の乱(672年)で大真人皇子(天武天皇)側について活躍した大分君恵尺(えさか)・稚臣(わかみ)の墓と想定されている。また同時期の重要な遺跡として上野丘陵の南側平野で調査された羽屋井戸遺跡・羽屋園遺跡がある。この遺跡からは、7世紀後半～8世紀初頭の方形の掘り方をもつ大型掘立柱建物や総柱の倉庫群が確認されており、「評」段階の遺構と想定されている。



- | | | | | | |
|-------------|------------|------------|--------------|-----------|----------|
| 1. 中世大友府内町跡 | 2. 大友氏墓跡 | 3. 万寿寺跡 | 4. 上野町・観音寺遺跡 | 5. 若菜八幡遺跡 | 6. 軍大遺跡跡 |
| 7. 正世府内城下町跡 | 8. 東宮堂遺跡 | 9. 龜甲山古墳 | 10. 古宮古墳 | 11. 千人塚古墳 | 12. 水成遺跡 |
| 13. 羽屋園遺跡 | 14. 金剛宝成寺跡 | 15. 石明遺跡 | 16. 駒口遺跡 | 17. 般若寺遺跡 | 18. 円寿寺 |
| 19. 金剛宝成寺 | 20. 上野原寺 | 21. 大友上原遺跡 | 22. 若菜寺石仏 | 23. 龜王遺跡 | 24. 光町石仏 |
| 25. 大匠塚古墳 | 26. 守興遺跡 | 27. 羽田遺跡 | 28. 下野遺跡群 | | |

第5図 中世大友府内町跡と周辺の遺跡

龍王畑遺跡	その後の設置された豊後国府については、羽屋井戸遺跡・羽屋園遺跡の東側に「古国府」の地名が残るものの、政庁本体が未だ不明である。しかし、上野丘陵の東端部で調査された龍王畑遺跡では9世紀から10世紀前半にかけての底をもつ独立柱建物や築地塀跡、道路状遺構が検出され、その配置から、国司館跡の可能性が指摘されている。この遺跡の東北側には8世紀～9世紀にかけての版築基壇に瓦葺の礎石建物が建てられている。さらに、この丘陵の東端部の南側崖面に岩屋寺石仏、東側崖面に元町石仏が刻まれており、平安時代後期の藤原様式の作風と言われている。このように上野丘陵の南側の羽屋地区から古国府地区、そして上野丘陵東部は7世紀後半から10世紀頃にかけて、豊後国の政治の中心地であったと考えられている。
宇佐神領大鏡	11世紀から13世紀代になると、注目される文書が残されている。まず「宇佐神領大鏡」の天喜元年(1053)、康平2年(1059)、承保4年(1077)に「勝津留島四至」として登場する。その示す範囲は、上野丘陵東部から北に広がる沖積地にあたり、16世紀に大友館が置かれる場所が含まれている。その中で天喜元年の申文に西の限りとして「高国府」の地名が見られ、上野丘陵東端部が想定されている。13世紀中頃、大友氏3代目の大友頼泰が豊後国に守護職として下向した際、「高(陸)国府」の割譲を強引に求める。このため「高国府」「勝津留島」については守護所の設置場所と関わる重要な問題となっている。さらに、この申文の中に「東隈北廻り、二方市河」とあり、すでに大分川沿いで河原市があり、府内古図に描かれた「府内」の初元的な位置づけがなされている。こうした様子を裏付けるような豊後府中の状況を表す文書がある。それは仁治3年(1242)の「新御成敗状」で、都市の規範を示す条項が書かれている。この文献資料は、13世紀代に豊後国の中心地である府中が、都市として成立していたことを示している。
新御成敗状 府中	しかし、こうした状況は考古資料で証明できているわけではない。「勝津留島」の範囲の中で新御成敗状が描く「府中」の状況は現時点で考古学的には不明である。ただ、上野丘陵の南側の平野部で調査された石明遺跡では13世紀を中心とした大規模な溝とその内側をさらに小規模な溝で区画する遺構が確認されており、「国府」に隣接した位置でもあり、初期の守護館の指摘もある。
石明遺跡 初期の守護館 徳治元年 万寿寺	14世紀代になると、徳治元年(1306)に万寿寺が大分川を東に望む自然堤防上に建立されると、この地域での本格的な町づくりが開始される。これまでの中世大友府内町跡の発掘調査で確認されるのはこの時期からで、以降16世紀中頃から後半に最盛期を迎え、17世紀初頭に「府内」が近世の府内城下町建設に伴い移転するまでの遺物や遺構が継続して出土する。
府内城下町 下部遺跡群 守岡丘陵 上原館 町口遺跡	この時期の遺跡は、府内周辺でも多く確認されている。大分川の右岸にある下部遺跡群や津守・片島地区でも16世紀の方形館や方形区割りをもつ遺構が確認されている。独立性の強い守岡丘陵は館城的な存在である。一方上野丘陵には土塁と堀を廻らす上原館があり、その南の古国府地区には町口遺跡、北側にも16世紀の遺跡がある。さらに西方の高崎山の山頂は大友氏の詰城として知られている。このように、16世紀代の府内は、府内古図に描かれていない部分も含め、その構造が論じられている。

第3章 中世大友府内町跡第11・76次調査

第1節 調査の概要 (第6・7図)

府内古図
称名寺
万寿寺

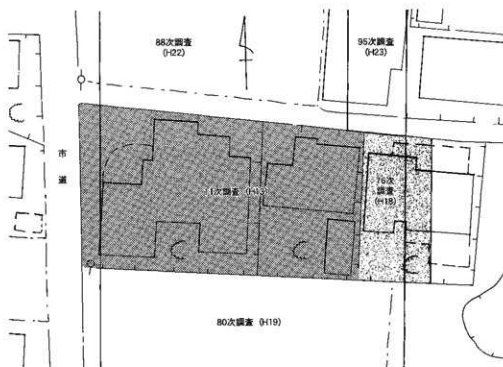
平成13年度に実施した中世大友府内町跡11次調査は、「府内古図」から復元した豊後府内の中で、A類には記載はないが、B・C類には「称名寺」と記述される場所にあたる。府内古図から復元される称名寺の規模は豊後府内で最大面積を誇る万寿寺に次ぐ寺域をもつ。しかし、この寺は永禄年間に藩主の命で府内から北西に離れた沖の浜に移転された記録もあり、「府内古図」が描こうとした時期には、存在しなかった可能性が強く、そのことがA類の「府内古図」に反映していると考えられる。

国道10号古国府拡幅に伴う、称名寺と想定される場所の発掘調査は、平成13年度の第11次調査以後、平成18年度に称名寺の南端を72次、第11次調査区の東側を76次、平成19年度に11次調査区の南側を80次、平成22年度に北側を88次、平成23年度には88次調査の残り部分を95次調査として実施した。これは、国土交通省大分工事事務所の土地収用状況と、それに連動する調査委託の順となる。

本章では、第6図に図示した、中世大友府内町跡第11調査区と、その東側に隣接する狭小な76次調査区を合わせて報告する。

平成12年度開始から開始した国道10号古国府拡幅事業に伴う中世大友府内町跡の発掘調査は、平成13年度を迎え、第11・12・13次調査と3ヶ所を同時に調査する事となった。これらの調査は、中世大友府内町跡に対する初期の発掘調査で、遺構・遺物の遺存状況が不明の中での実施であった。中世大友府内町跡第11次調査も、称名寺推定地の最初の発掘調査となり、以後72・76・80・88・95次と続く発掘調査にとって、大規模な確認調査の意味を持つことになった。

調査直前のこの場所は、昭和30年代に宅地化された住宅地で、近世・近代の水田を客土により約1.3m埋め立てられていたが、昭和50年代に鉄筋コンクリートの家屋が建てられたため、調査区内の



第6図 中世大友府内町跡第11・76次調査及び周辺調査位置図

一部が遺構面まで掘削されていた。しかし、全体的には17世紀初頭に近世城下町に移転する以前の
中世の遺構が比較的良好な状態で残されていた。

発掘調査の結果、検出した遺構は第7図に図示したが、府内古図に描かれていたとおり、調査区の
西端で南北方向に延びる街路を確認した。さらにその東側に区画性の強い大きな溝が検出され、称
名寺跡と想定される範囲と区切られている。街路は豊後府内の中枢部分を南北に貫く第2南北街路
と仮称しているもので、版築状に土砂が積み上げられ、敷面の路面と街路側溝が確認できた。

また区画性の強い溝は、少なくとも三度掘り返されており、さらにその前段階の溝も内側にほぼ
平行して検出された。称名寺跡部分では、南北方向の溝が数条掘り込まれていた他、廃棄土坑や柱
穴状遺構、柱穴列、墓、町屋化されたことを示す井戸などが検出された。

遺物は、国内産の京都系土師器や在地系土師器、瓦質土器、中国産の陶磁器類、朝鮮王朝産の茶碗、
東南アジア産の陶磁器が出土した。また深い堀は、低湿地状態になっており、漆器柄や下駄、木製
品など植物性遺物の他、貝殻や動物骨などが出土した。

柱穴列

植物性遺物

第2節 遺構と遺物

1. 遺構の概要と基本層序（第7・8図）

中世大友府内町跡第11次調査は、南北約15m、東西約35mの長方形の区画内を発掘調査した。第
8図Aに図示した上層図は、調査区北壁の西半分であるが、この土層図で、調査区内の主要な遺構の
変遷をたどることができる。

唐人町
版築整備

北壁の土層図からは、西側の唐人町との間に街路に沿ってSD142の溝が、初期の南北街路整備を
切って、掘り込まれている。その後SD142は埋め立てられ、南北街路の版築整備が施行される。さ
らに、この街路の東端を削って称名寺を区画する街路沿いの溝であるSD044が掘削されている。と
ころが、SD044以前にその東側に沿ってSD051が掘削されていることが判る。このSD051も掘り返
しが確認される。そして、最終的にSD048がSD044と同じ方向に掘り込まれているが、両者の前後
関係は南壁で見る限りでは、SD044が新しい。

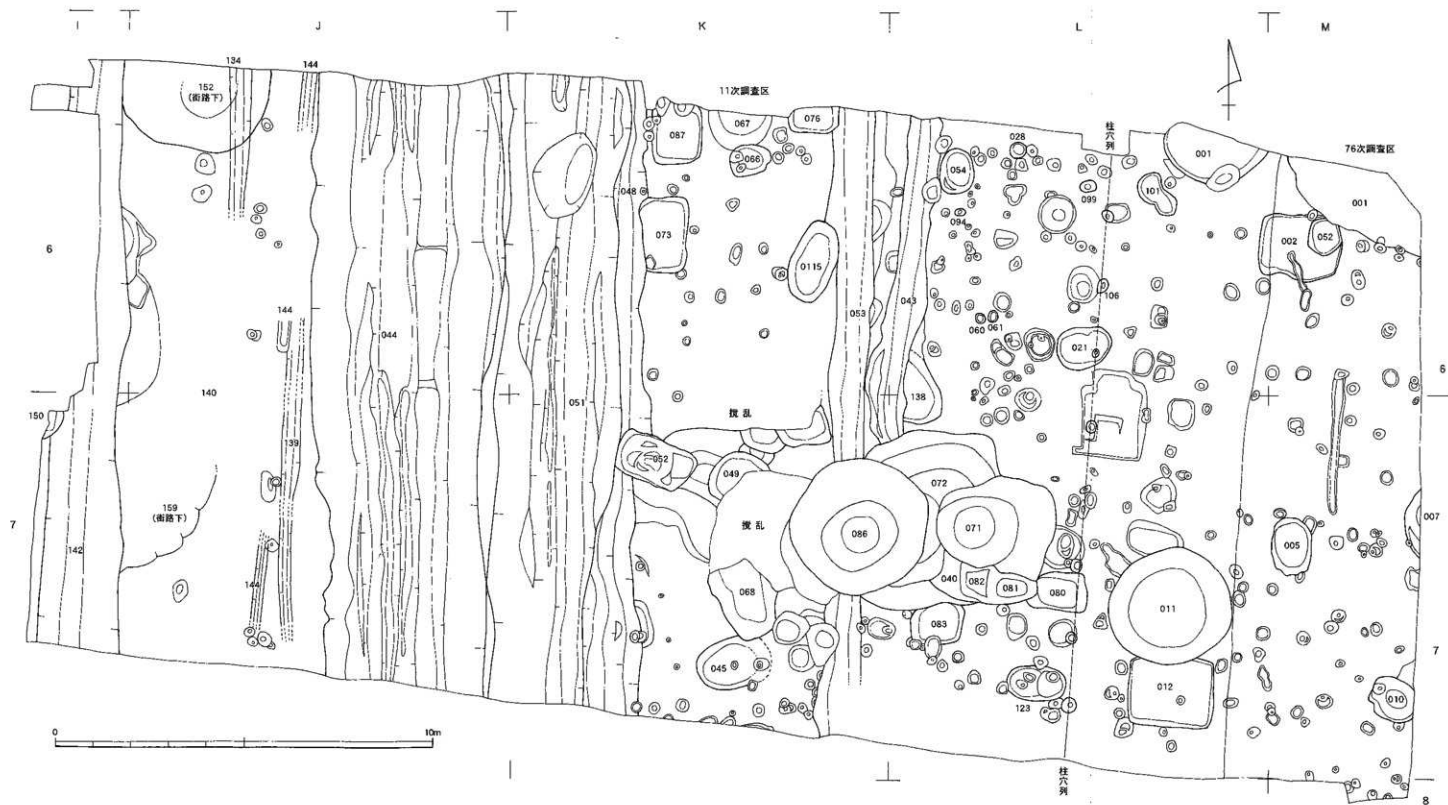
以上が、街路とその周辺の溝の前後関係であるが、街路とSD044の関係は、溝上部の拡張等とも
関連し、街路完成後にSD044を改めて掘削したとは言い難い。即ち初期の段階において、同時ある
いはSD044が先行存在していた、上部が掘削されれば、後出するととらえることもできる。

天正14年
島津氏侵攻

SD044が半分以上埋まった段階で、焼土層が観察される。この層は、含まれる遺物や、前後の上
層から、16世紀末葉と考えられ、豊後府内の広範囲で確認されることから、天正14年（1586）の島
津氏侵攻の際に焼き払われた跡を処理したものとして想定されている。

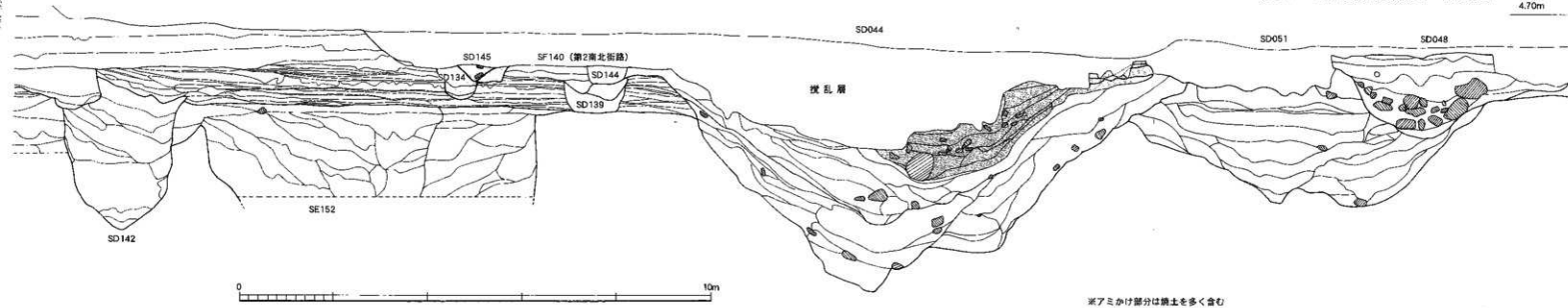
この他、第8図Cに図示したのは調査区中央で検出した南北方向の溝であるSD053とSD043であ
る。両者は南部で他の遺構と切り合い不明であるが、北壁の土層観察ではSD043よりもSD053が新
しい。また、第8図Dは15世紀中葉から後葉の溝の上面に構築され、16世紀後葉の最新段階の遺構
に切られる版築状の堆積である。下部は粗い砂粒、中位は細かい砂粒、上位はシルト質の土壌で構
成され、称名寺の西側を区切る築地塀の基礎部分の可能性を考える。

築地塀

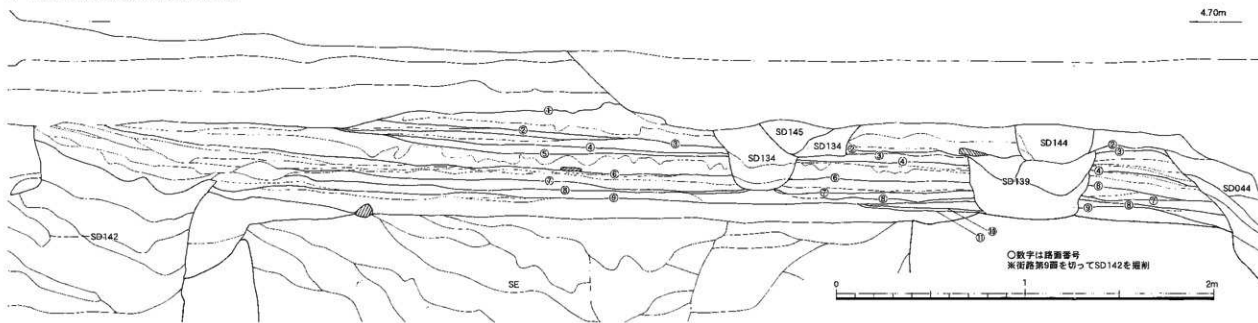


第7図 中世大友府内町跡第11・76次調査遺構配置図(1/100)

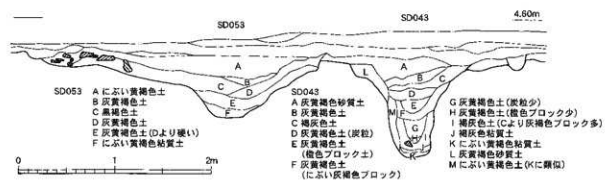
※番号は遺構番号



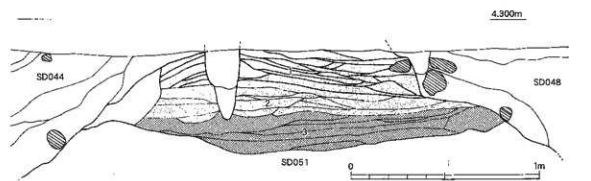
A 調査区北壁主要遺構土層断面図(1/40)



B 第2南北街路(1/20)



C SD0043・SD053 土層断面図(1/40) (北壁)



D SX088 版築状遺構(1/20)

1. シルト質 2. シルト質又は細かい砂粒を含む 3. 粒と砂粒を含む

第8図 第11・76次調査区土層図

第4表 中世大友府内町跡11次調査主要遺構一覧①

本調査の 遺構名	旧遺構名	遺構の形状	遺構の時期	主要遺物	検査 数	隣接調査区での名称			備考
						72次調査	80次調査	85次調査	
SK001	S-001	土坑	16世紀末	瓦が多数・唐律	19				瓦の一種類。76次のSK001と近接し、同一遺構の可能性。
SB011	S-011	井戸	16世紀後半 ～末葉	竹筒水注・備前茶入れ・ 備前鉢鉢・備前二石甕・ 備前金指輪瓦瓦	92				経穴に球合せ六角井戸で、井戸 跡の土層は盛り直し。
SK012	S-012	土坑	15世紀前半	大内系白色土器	20				方形竅穴
SK021	S-021	土坑	不明	瓦質の火鉢	21				横円形土坑
SP028	S-028	柱穴状遺構		銭貨4	113				
SK040	S-040	土坑	15世紀前半	備前滑石鉢	22				
SD043	S-043	溝	16世紀中葉	ベトナム印花皿・備前 滑石・大内系白色土器 ・在地系上野質土器	42	不明	SD193		跡名中内の区画溝で、SD083に隣 接平行。
SD044	S-044	溝	16世紀後半 ～末葉	青磁・黒徳儀青磁・濠洲 急香花・白磁皿・タイ田 瓦器・備前・備前 備・高屋実目・備前 水注・滑石・瓦質磁石・ 瓦質磁鉢・金箔土器 他磁器・焼台・フイロ羽 口・るつば・漆器類・南 洋物・下駄・骨角製器・ 漆・漆木・各種木製品・ 「討」子の忍骨・磁・焼き 小刀・刀・真鍮製釣り子 ・磁・土各種・銭貨10	45	SD025A	上層 SD100 下層 SD101	SD120	跡名寺と内側の第2群北街道を 区切る大型の溝で、底面は南北方 向に溝が掘り出された。床面底は 盛装で、木炭や牛骨、瓦器・漆 器などが良好な状態で残ってい た。
SK045	S-045	土坑	16世紀後葉	白磁皿	23				
SD048	S-048	溝	16世紀末葉 ～16世紀初葉	青磁・瓦質花瓶・ワクロ 土器器・芽・軒平瓦	82	不明	SD071		SD051の上面に掘り込まれた溝。
SK049	S-049	土坑	15世紀末葉 ～16世紀後半	青磁・瓦器・ 焼台・ガラス小玉 ・元徳滑石・瓦	22				4基の土坑が連続して掘り合う。 遺構としては異なるものである が、何層でも重なった。後継遺構の ため、時期も長い。
SD051	S-051	溝	15世紀中葉 ～後葉	赤瓦スタンピング・瓦質 磁器・大内系白色土器 ・銭貨1	85	SD025B	SD200	SD160	跡名寺の区画溝。
SK052	S-052	土坑	16世紀後半	安楽・宮治笠・瓦器類・ 瓦質火鉢・陶台	29				床面は段差があり不揃い。
SD053	S-053	溝	16世紀前半 ～中葉	灰質香か・京都土器 器・土器・陶台・銭貨2	90		SD095	SD225	跡名中内の区画溝。SD043に隣 接平行。
SK054	S-054	土坑	16世紀後葉	鉛製板材	31				
SK058	S-058	土坑		青磁碗	31				
SP060	S-060	柱穴状遺構		青磁香炉	113				
SP061	S-061	柱穴状遺構	14世紀後半	在地系上野質土器	114				
SK066	S-066	土坑	16世紀後半		32				
SK068	S-068	土坑	15世紀	ロタン目土器・軒平瓦 ・亀瓦	32				
SH071	S-071	井戸	14世紀末 ～15世紀前半	青磁碗・瓦器類・在地系 土器器・磁石・銭貨1	92				SH071とSP066・SP133は同じ場 所で掘り返し掘り出された井戸。 SH071とSP066・SP133は順で 掘り出される。
SK073	S-073	土坑	14・15世紀		32				平面が南北に主軸の長方形で、 SK078・SK081も同様な形態であり、 重複して検出されていることから 土坑墓の可能性がある。
SK078	S-078	土坑		土師質土器小皿					土坑墓?
SK081	S-081	土坑	不明		31				
SK082	S-082	土坑	不明	中国天目	34				
SK083	S-083	墓坑	16世紀後半	八道鏡? 銭貨6	112				灰化物が散乱しており火葬墓と考 える。銭貨は火葬後に埋納。
SB085	S-085	井戸	16世紀中葉	青磁碗・中国天目・瓦質 磁・瓦質碗・大内系白色 土器・陶台・土器・瓦・芽・ 銭貨5	95				
SK087	S-087	土坑	14・15世紀	青磁花瓶	34				土坑墓?
SP091	S-091	溝列の一部							
SI094	S-094	柱穴状遺構	16世紀	瀬戸美濃天目	114				
SP099	S-099	柱穴状遺構	15世紀前半		114				

第5表 中世大友府内町跡11次調査主要遺構一覧②

本表の遺構名	旧遺構名	遺構の性状	遺構の時期	主要遺物	報告頁	発掘調査区での名称			備 考
						72次調査	80次調査	88次調査	
SK101	S-101	土坑	16世紀後葉	朝鮮工朝茶研	35				
SP106	S-106	溝列の一部			115		柱穴列2		SK116に含む
SK115	S-115	土坑	15世紀前半		35				
SK116	S-116	土坑	15世紀前半	瓦器等伊・土師質土器・鉄貨2	35				
SK123	S-123	土坑	16世紀前半	ロクロ目土師器	37				
SE133	S-133	井戸	16世紀後葉	瓦質瓦	101				
SD134	S-134	街道調査	16世紀後葉	人形手着履・朝鮮工朝磁・瓦質赤伊・灰瓦	104			SD142	
SK138	S-138	土坑		中国銅貨	38				
SD139	S-139	街道調査	16世紀後葉	京都系土師器・鉄貨1	107				
SF140	S-140	第2南北街道	16世紀中葉～末葉	青花碗・青花皿・朝鮮工朝磁・備前焼・京都系土師・土師・鉄貨品・鉄貨7	103	SF006 SF094	第2南北街道		検出面積から11区にわたり発掘である検出面積が検出された。街道調査も同じ範囲で位置を変えながら5区が確認された。
SD142	S-142	街道調査	16世紀後葉	青花碗・京都系土師器	91		SD201		両側の土人町と第2南北街道を区切る。
SD144	S-144	街道調査	16世紀後葉		107				
SD145	S-145	街道調査	16世紀後葉	鉄製品	104		SD142		
SK150	S-150	土坑	16世紀後葉	鉄製約子	38				部分のみ検出。
SE152	S-152	井戸	16世紀以前		102		SE441		調査地で前半分のみ調査。第2南北街道下で検出。北半分は88次調査。
SK159	S-159	土坑	14世紀末～15世紀前半	在地系土師質土器多量・銅貨	39				第2南北街道下で検出された大形土坑。

第6表 中世大友府内町跡76次調査主要遺構一覧

本表の遺構名	旧遺構名	遺構の性状	遺構の時期	主要遺物	報告頁	発掘調査区での名称			備 考
						72次調査	80次調査	88次調査	
SK001	S-001	土坑	16世紀後葉	瓦・京都系土師器	118				瓦一括後葉
SK002	S-002	土坑	15世紀後葉	瓦質青伊	119				
SK005	S-005	土坑	15世紀後葉	ロクロ目土師	119				
SK007	S-007	土坑		鉄貨	120				
SK010	S-010	土坑			120				
SK052	S-052	土坑			120				

2. 第11次調査の遺構と遺物

(1) 土坑

調査区内で検出した竪穴遺構のうち、井戸以外の、比較的大規模な掘り込み約40基を土坑とした。報告は、この中で、形態が方形や円形など、掘削にある種の意図を感じるものや、遺物がまともって出土したものを中心に行う。

SK001 (第9図)

調査区の東北隅で検出された不定形な土坑で、北側の半分近くは調査できなかった。確認された遺構の規模は、東西約2.3m、南北は1.4m以上で、床面は、ゆるく中央部が窪み、深さは最深部で約0.45mである。壁は、西側がほぼ垂直に立ち上がるが、他は斜めである。

鬼瓦等
瓦廃棄

土坑内からは丸瓦や平瓦や鬼瓦等の瓦が充填された状態で多量に出土した。このことから、土坑は称名寺の瓦を廃棄するために掘削された廃棄土坑であると想定できる。

備前焼

土坑は瓦のみを対象にした廃棄土坑と考えられ、第10図に示したとおり、他の遺物の出土は極めて少ない。その中で1は破片であるが、数少ない遺物である。色調は茶褐色をしており、焼き締め陶器であることから、備前焼の碗と考える。復元された底径は4.6cmで、口縁部を欠くが、12cm程度の口径と推定できる。

軒丸瓦

2～4は軒丸瓦の瓦当部分である。復元される瓦当の直径は、2が14.4cm、3は15.6cm、4は15cmで、いずれも中心に巴文を配置し、延びる長い尾は隣の瓦と近接し、圏線状になっている。その外側には、珠文が施文されている。珠文の数と間隔は、3点とも異なる。数は3・2・4の順で多く、小粒になる。

珠文

コビキ痕

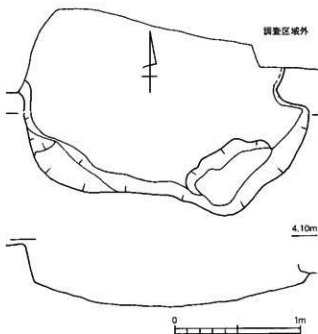
5も丸瓦で、幅15cmの玉縁部分である。幅は器面の調整は、外面が縄目の平行叩きで、縦方向の撫で仕上げである。内面には斜目方向のコビキ痕が認められる。内面には先端を玉縁部分とは反対方向に先端を曲げた突起が認められる。この突起は、瓦のずれを防ぎ、固定化するため、屋根の構造材と結束する装置と考える。

6～7は、鬼瓦の一部と考えられる。いずれも小破片で、部位を特定することはできない。

備前焼

SK001からの出土遺物は、瓦以外の遺物は少ない。このため埋設時期を考える資料としては、備前焼の碗がある。豊後府内から出土する備前焼は、稲鉢や壺・甕を主体に14世紀代から出現する。しかし、器種が多様化するのには、16世紀後半である。出土する碗も、この時期の製作と想定され、埋設される瓦に混入した時期はそれ以後である。称名寺が破壊され、処理すべき大量な瓦が生じるのは、天正14年(1586)の島津氏侵襲時が有力であり、遺構の時期はそのころの可能性が高い。

天正14年



第9図 SK001実測図(1/30)

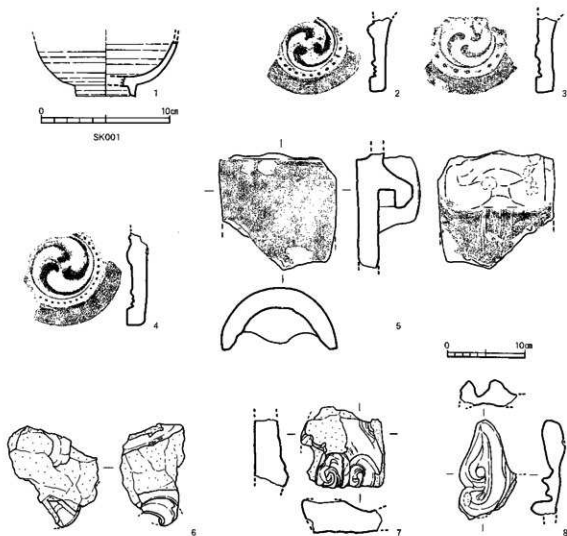
SK012 (第11図)

調査区の東南隅L-7区で検出された方形の土坑で、北側をSE011と切合う。遺構の規模は、東西約2.25m、南北約1.7mで、上面観は長方形をしている。深さは約15cmで、床面は、南壁沿いがやや深くなるが、ほぼ平坦に整えられている。

遺構内から出土した遺物は第12図に図示した。9は、口縁部が直口する瓦質土器壺である。内面は彫削りと襷であるが、外面には上位に直径1cm、下位に直径2cmの菊花文の連続スタンプ文が施文されている。

白色系土師質土器 10は復元口径12.3cmの白色系土師質土器の坏で、底径は4.8cmで糸切の後に板目圧痕が残る。器高は2.5cmで、器壁は薄く、口縁部が大きく外側に開く形態に仕上げられ、在地系土師質土器とは趣を異にする。11・12は在地系土師質土器の坏で、11は復元口径11.5cmの、ほぼ完成品である。底径6.8cmの底部には糸切痕が残り、器高3.8cmの口縁部は屈曲しながら外傾し、肩部は外側に肥厚する。12は復元底径7.8cmの糸切痕のある底部の破片である。

大内氏期 遺構の時期は、10の白色系土師質土器が大内氏館の編年観で14世紀代まで遡ることが論じられており、11の在地系土師質土器の形態から15世紀前葉と考える。



第10図 SK001出土遺物(1/3, 1/5)

SK021 (第13図)

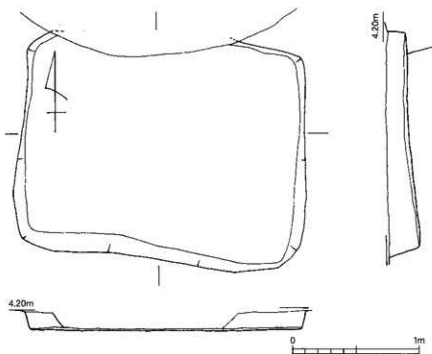
調査区の東寄りのL-6区で検出された土坑である。遺構の規模は東西が長軸方向となり約1.4mで、南北は約1.1mの楕円形をしている。壁の立ち上がりは斜めで、床面は平坦に整えられている。深さは約40cmである。床面で検出されている柱穴は、南北方向に並ぶ柱穴列(第131図)を構成するものである。

柱穴列

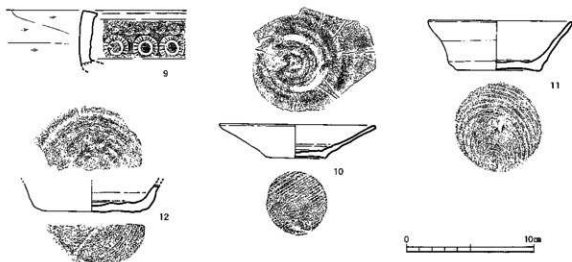
瓦質土器

菱形文

遺物の出土は少ないが第14図13の口縁部が内溝する瓦質土器の火鉢が出土している。外面には細かい平行する突帯が施文され、その間を菱形文を基調とするスタンプ文が回転押捺施文されている。時期は資料が少なく特定することはできない。



第11図 SK012実測図(1/30)



第12図 SK012出土遺物(1/3)

SK040 (第15図)

L-7区の中央部で検出された土坑で、幾つかの土坑が重なり合う複雑な状況を見せている。確認された遺構の規模は、南北約1.8mであるが、東側はSX082に切られ、西側も井戸であるSE086と重なるため、計測不能である。検出面から床面までの深さは約10cmで、床目は中央部が最深部となる凸レンズ状である。

備前焼
菊花文・雷文

第16図に示した出土遺物は14が焼締め陶器の摺鉢で、口縁が尖り肥厚し、内面には8本単位の掘り目が口縁部に直角に加えられている。色調や胎土から備前焼と考える。15は口縁部が直口する瓦器質の鉢である。外面は口縁部に沿って菊花文、その下に雷文のスタンプ文が押捺されている。器面はヘラで磨かれている。16は土師質土器の杯で、口縁部の器壁は薄く、器高は4.2cmと高い。時期は、備前焼の摺鉢の口縁部形態や、土師質土器の器形から15世紀前半と考える。

SK045 (第17図)

調査区中央の南壁付近のK-7区で検出された浅い土坑である。東半分はSD53と重複している。残された遺構の規模は、東西1.6m以上、南北約1.8mで、断面は皿状になり、中央部が最深部で、深さ20cmである。遺構からは、華大や人頭大の礫が多量に出土した他、土器や陶磁器も出土しており、廃棄土坑と考える。

白磁
白磁皿C群

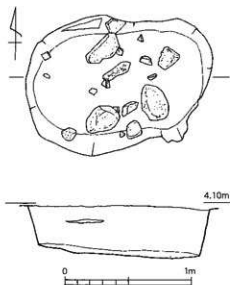
土坑から出土した遺物は第18図17が白磁の皿である。口径11.8cm、高台の径6.4cm、器高3.1cmで、口縁部が外反する。軸は、畳付部分以外は全面に施釉されている。形態は小野福年の白磁皿C群に該当し、16世紀に編年されるが、京都系土師器が伴うことから、16世紀後半と考える。

SK049 (第19図)

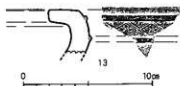
SK049は調査区中央にあたるK-7区北寄りで検出された連続して切合う土坑群である。遺構検出時は、東南部を井戸、北部を攪乱された東西方向に長い不整形の土坑と認識された。しかし、調査が進行すると、それぞれの遺構の単位が明確になり、少なくとも、5基の土坑が重なり合っていることが明らかになった。そこで、遺構の名称は図のように、西側から、SK049A・SK049B・SK049C・SK049D、とし報告する。なお遺構の構築の順番は不明である。

SK049Aは5基の中では大型で、西から東に向けて広がる浅い土坑である。西側はSK052と切合い、東側は、SK049B・SK049C・SK049Dと重なり合う。残された遺構の規模は、南北約1.5m、東西は1.5m以上あるが、深さは10数cmで、床面は平坦である。

SK049Bは5基の遺構の中で、最も深く掘り込まれた土坑である。東南部を井戸で削られており、形状が不明だが、残された部分から円形の土坑であることが判る。残された遺構の規模は、東西1.2m、南北も1.2mで、検出面からの深さは約20cmで、床面は平坦である。



第13図 SK021実測図(1/30)



第14図 SK021出土遺物(1/3)

SK049Cは5期の中で最も小規模な土坑である。しかも、南側をSK049B、北側をSK049Dと重なり合う。このため、遺構の規模が確認できるのは、約70cmを測る東西幅のみである。深さもSK049B・SK049Dよりも浅く、10数cmであり、小規模の円形土坑と考える。

SK049Dは北側を擾乱し、北東部はSK049Eと重なる。残された遺構は約半分であるが、その規模は、東西約1.0m、南北50cm以上の小判形の形状をし、深さは約15cmで、床面は平坦である。SK049Eは北西部分を攪乱されている。確認できる遺構の規模は、東西約1.0m、南北約0.7mで平面形は小判形である。検出面からの深さは20cm弱で、床面は平坦である。

以上の5基の土坑から出土した遺物は、遺構検出当初は同じ遺構と判断したため、区別しておらず、一括してSK049として取り上げ、第20～22図に図示した。

18～20は貿易陶磁器である。18は口径14.4cmで、胴部が膨らまず口縁部が外反する発色の悪い青磁碗である。龍泉窯系であろうか。19は口縁部が内斂気味に立つ青磁碗で、外面には剣先連弁文が簡略された文様である、口縁部に平行に波状文、胴部に口縁部に直角に連続単線文が施文されている。

小野編年では15世紀末から16世紀前半に位置付けられる青磁連弁文碗C群、筒輪陶器に相当する。20は褐釉陶器の底部近くの資料である。内面と底部に近い部分は露胎となっている。

21は備前焼の甕である。口径は34.5cmで、口縁部は扁平な玉縁が廻り、内傾する。乗岡編年では15世紀後半に位置付けられている。

22～32は瓦質土器である。22・23は胴部に吊り下げ用の取手が対象の位置に付く羽釜で、22は取手部のみである。23は取手の下位に鈎状の凸帯が廻る。色調は淡灰褐色である。24～26は口縁部が大きく内湾するため、上面に平坦部が生じている。器形は26に見られるように、器高が低く、広い底部を持つ形態をしている。また、24・25の口縁部外面には、スタンプによる連続した菊花文が施文されている。27・28は瓦質

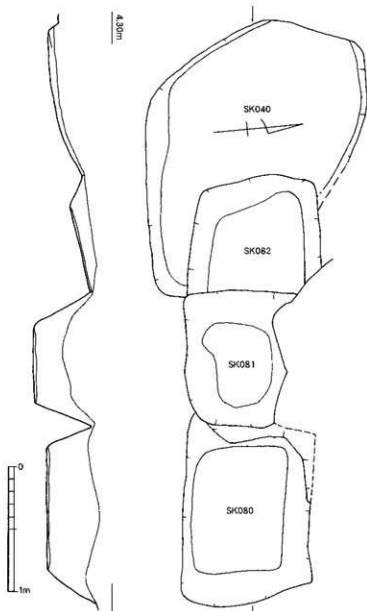
龍泉窯系
剣先連弁文青磁連弁文
碗C群
筒輪陶器

備前焼

乗岡編年

羽釜

菊花文



第15図 SK040・080・081・082実測図(1/30)

土器の鉢の底部に付く脚で、27は脚部に裝飾が貼付されていたと想定する。

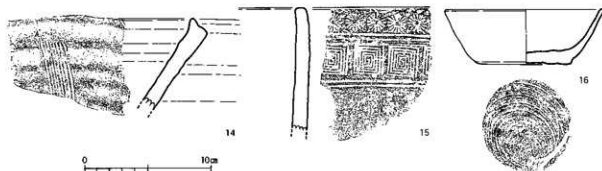
29～31は、胴部が張らず、筒状になり、口縁部が直口する火鉢である。口縁部外面には平行する2条の細い凸帯が廻り、その間にスタンプ文が施文されている。その文様は、小破片の29は認めることができないが、30は両側を菊花文に挟まれた間に、中央に大き目の珠文を配し、その周りに7個の小さな珠文を施文した花弁状のスタンプ文の3つで1単位とした文様を、間隔を置き施文している。また、30はSE086出土の火鉢と接合する。31は菊花文のみを連続的に施文している。器面には飽磨きの痕跡が明瞭に残る。

珠文

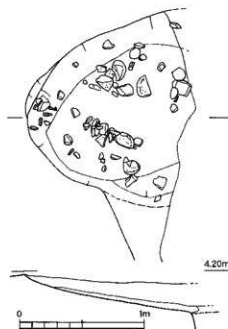
32は胴部が張り、口縁部が外反する甕で、SE086出土資料とも接合する。瓦質であるが、色調は灰色をしており、焼成の甘い須恵質とも言える。器面調整は、口縁部外面に指圧痕が残る以外は、撫で仕上げである。

瀬戸美濃系

33は土師質土器で、復元口径10cmで、形状から蓋と考える。34は瀬戸美濃系で、底部には糸切痕が残る。底部以外の外面と、内面上位に淡灰褐色の釉がかかる。花瓶であろうか。



第16図 SK040出土遺物(1/3)

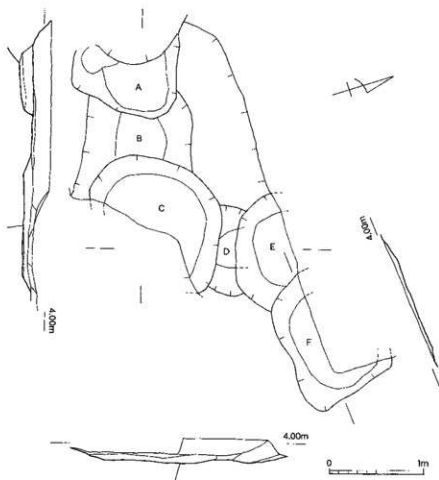


第17図 SK045実測図(1/30)

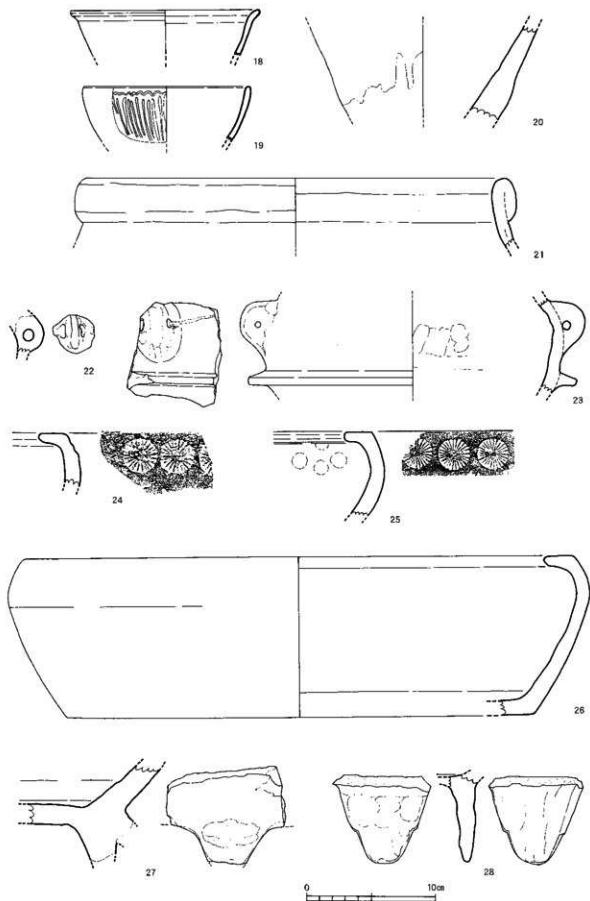


第18図 SK045出土遺物(1/3)

- 糸切痕 35・36は内面にロクロ目が残る上師質土器である。35は口径8cm、底径5.6cm、器高2cmの小皿で、底部は糸切痕と板状圧痕が付く。これに対し、36は口径12cmであるが、底径は小さく6cmで、ハの字状に口縁部が開く。器高は3.3cmである。15世紀末から16世紀初頭に編年される。
- 京都系土師器 37は口径14.8cmの京都系土師器である。器壁は比較的薄く、古式に属し、16世紀中葉から後葉に位置付けられる。
- 燗台 38は口径8.6cm、底径7.3cm、器高4.1cmで、円柱状の形態で、上面は皿状になる。器面は指圧痕がつき、中央には縦に穿孔されている。豊後府内では燗台と理解されており、16世紀後葉から末葉のものに比較すると、器高が低く、古く位置づけられる。
- 滑石製行觸 39は滑石製の石鍋の口縁部の破片である。
- ガラス小玉 40～54はガラスの小玉である。色調は40・41・43～45・49・52・53が白色で、42・54は青色、46・47は白色と赤紫色、48は白色と暗茶色、50は透明に近く、51は黄色味が強い。形状は、54はらせん状に2段重ねになっている。出土状況は明確でない。
- 銅銭 55は銅銭で、北宋の1078年初鑄の「元豊通寶」である。
- コビキ痕 56は平瓦で、幅は不明であるが、長さは34cmである。1枚つくりで器面にはコビキ痕が明確に残る。
- 縄目叩き 57は玉縁のつく丸瓦で、外面には縄目叩き、内面には布目とコビキ痕、不明瞭であるが、吊り紐の痕跡も認めることができる。



第19図 SK049実測図(1/40)

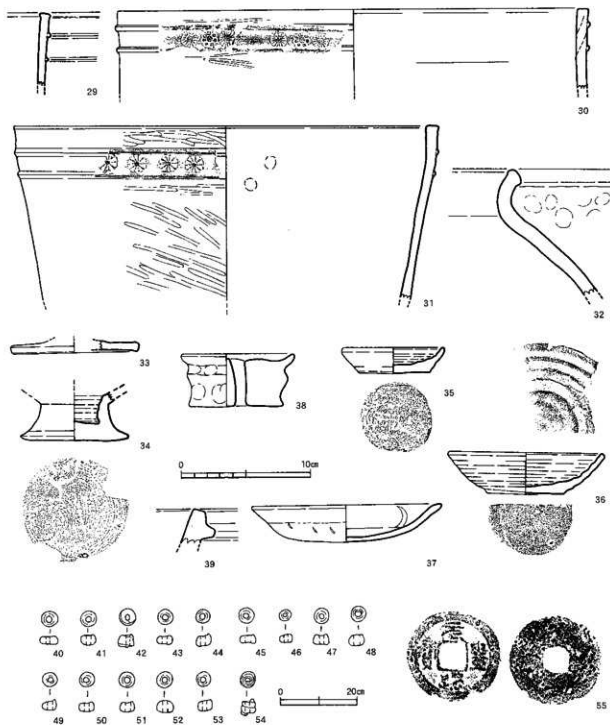


第20図 SK049出土遺物①(1/3)

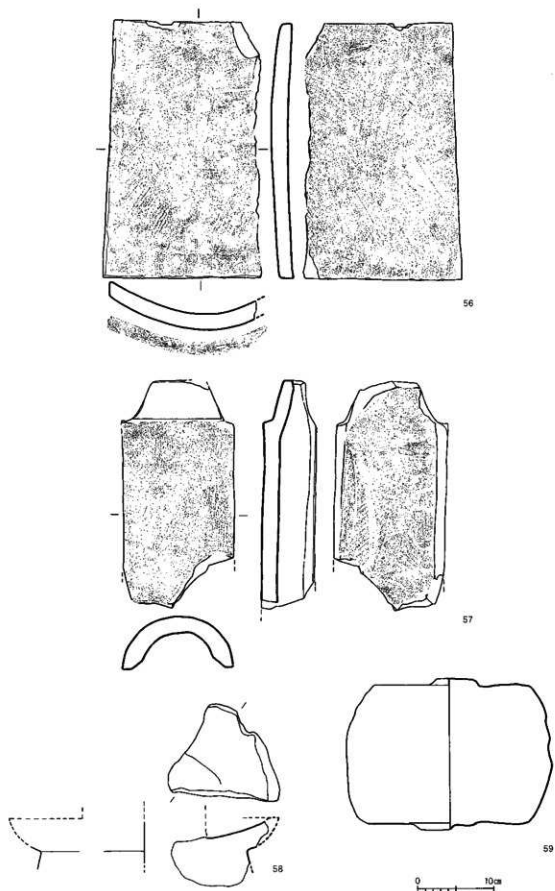
茶臼
五輪塔

58は、受けの付く茶臼の破片である。青灰色の砂岩製である。59は五輪塔の水輪である。上面と下面に突起が造り出され、火輪と地輪を安定的に繋ぐ装置と考える。

以上がSK049の5基の土坑から出土した遺物であるが、15世紀後葉から16世紀後葉までの遺物が含まれる。古い時代の遺物は、混入も考えられるが、区別することができない。ここでは、これら5基の土坑の時期を出土遺物に従い、15世紀後葉から16世紀後葉とする。



第21図 SK049出土遺物②(1/3, 1/1)



第22図 SK049出土遺物③(1/5)

SK052 (第23図)

SK052はK-7区北寄りで検出された土坑は、調査区のほぼ中央にあたる。東側をSK049、西側をSD048と重なり合う。遺構は東西約2.3m、南北約1.3mの平面形が隅丸長方形をしているが、床面は一定ではなく、東側は、深さ10cmであるが、中央の最深部は約80cmあり、しかも、途中で段が観察される。このため、SK052は数度にわたり、掘削を繰り返された可能性が高い。

剣先透弁文
常滑焼

出土遺物は第24図に図示した。60は外面に簡略された剣先透弁文が施文された青磁碗である。61・62の口縁部と63の底部は同一個体で、常滑焼の甕と思われる。61・62の屈曲する口縁部は未発達で、直立する頸部には緑茶色の釉が垂れるようについている。また、底部は中央部以外に砂粒状の付着物が付き、外面には胴部と同様な雑たれを認めることができる。64は瀬戸美濃系のおろし皿である。内面は浅い格子状のおろし目が刻まれ、底径は6.8cmで、糸切痕が残る。

瓦質土甗

65～69は瓦質土器である。65は体部が外傾する器形の鉢で、脚が付き、外面に細い凸帯が一条廻る。66・67は胴部が円筒状に直立する形態で、67には脚が認められ、66にも本来は脚が付くものと考えられる。また、両者とも、底部近くに低い凸帯が一条廻る。

瓦質土器甗

68・69は瓦質土器の甗である。両者とも胴面を横方向に艶磨きで器面調整され、高台が付く。68は口径が10.7cm、高台径5.0cm、器高5.2cmで、69がやや大きく口径13.2cm、高台径5.8cm、器高5.7cmである。

70は底部に糸切痕の残る在地系土質土器の小坏で、法量は口径8.5cm、底径5.9cm、器高2.2cmである。

燭台

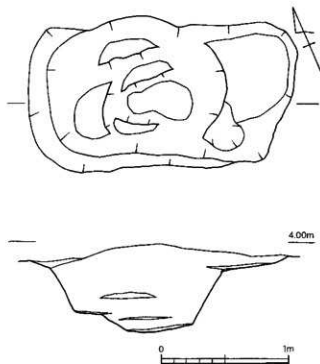
71は上面径6.0cm、底面径7.4cm、器高5.5cmの円柱状の形態で、上面は周辺が皿状にわずかに高くなり、中央部に深さ2.8cmの小孔が開けられている。燭台と想定している。

滑石製石鍋
土鉢

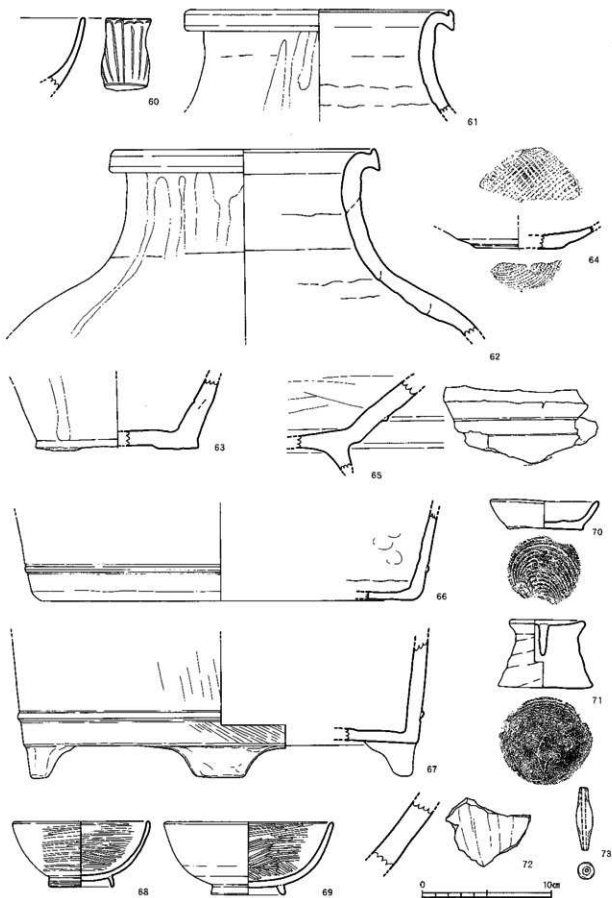
72は滑石製の石鍋の胴部の破片である。外面には縦方向の削りの痕跡が残る。

73は紡錘形の土鉢で、長さ4.9cm、最大幅1.1cmで、重さ4.2gである。

遺構の時期は、60が15世紀末から16世紀前半、61・62の常滑焼の甕は13世紀後半と古い時期に編年されているが、71の燭台は16世紀後葉であり、この時期に最終的には掘削されたと考える。



第23図 SK052実測図(1/30)



第24図 SK052出土遺物(1/3)

SK054 (第25図)

SK054は、L-6区の西北部で検出された土坑で、西側には溝であるSD048が南北に掘削されている。遺構の形態は、長軸を南北にとる小判形である。規模は、南北が1.3m、東西1.0mで、検出面からの深さは20cmで、平坦な床面の規模は、南北約0.9cm、東西0.7cmである。

鉛製品

注目される出土遺物は、第26図に図示した2点の鉛製品である。74は薄い鉛板を幾重にも折り曲げた状態の遺物である。残された大きさは、長さ5.9cm、幅3.9cmで、鉛板の厚さは約0.1cm、重さは59.2gである。表面には漢字のような文字が刻印されているが、読むことができない。75は厚さ0.3cm、重さ25.6gの鉛板の破片である。形状は、2か所で屈曲し、平行する稜線が認められる。残された大きさは、長さ3.7cm、幅2.9cmである。

鉛板

遺構の時期は、図示していないが、京都系土師器の小破片が出土しており、その形状や器壁の厚さなどから、16世紀後葉と考える。

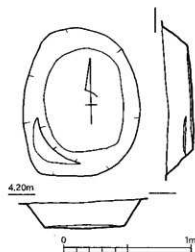
SK058

SK058はL-6区のSD048の上面で検出された土坑である。遺構の規模は小さく、形状が不明であったため、遺構実測図は掲載していない。

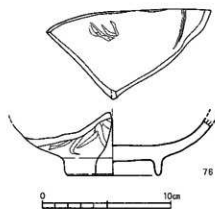
龍泉窯系青磁

出土遺物は第27図76の龍泉窯系の青磁碗が出土している。外面と見込みにヘラ描きの文様があり、その上から高台内側が露胎となっている以外は釉が全面にかけられ、貫入が入っている。内面には見込み部を囲むように円形の圈線が廻っている。底径7.2cmで、比較的大形の碗である。

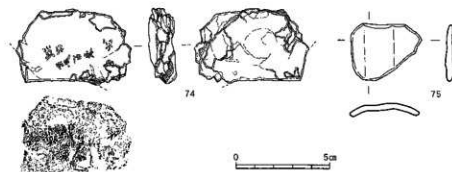
遺構の時期は、出土遺物がこの1点のみあるため、不明である。



第25図 SK054実測図(1/30)



第27図 SK058出土遺物(1/3)



第26図 SK054出土遺物(1/2)

SK066 (第28図)

SK066はK-6区の北寄りで検出された長軸を東西にとる土坑で、南側は攪乱されている。残された規模は、東西1.2cm、南北1.0m以上で、検出面からの深さは約20cmである。遺構内からは、學大の河原石が出土したほか、京都系土師器の小破片が出土している。

SK068 (第30図)

SK068はK-7区で検出された遺構で、長軸を南北にとり、北側はSE053と重なり合う。残された規模は、南北2m以上で、東西は1.7m、検出面からの深さは0.4mである。

遺構からの出土遺物は第29・31図に図示した。77は口径7.9cm、底径5.4cm、器高1.8cmの小坏である。態度は白色系で、口縁部にススが附着する。78～80は瓦であるが、78は軒平瓦で、瓦当には中心部から両側に向かう唐草文施文されている。79・80は凸帯が付く瓦で、鬼瓦の可能性がある。

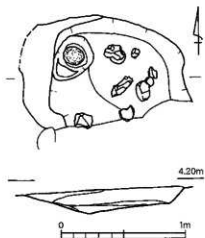
遺構の時期は、77の資料から15世紀代の可能性が高い。

SK073 (第32図)

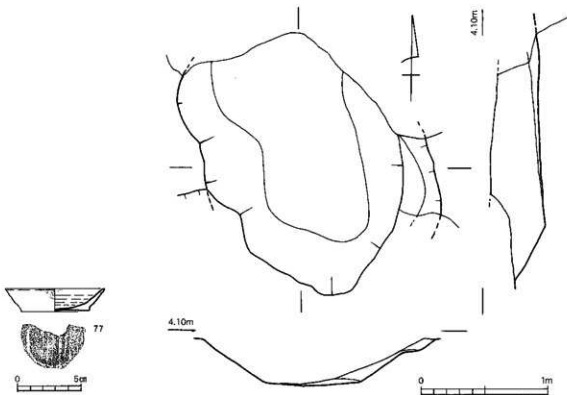
SK073はK-6区で検出された南北に長軸を持つ長方形の上坑である。規模は南北2.2m、東西約1.5mで、床面は中央部が窪み、検出面からの深さは0.4mである。

遺構からの出土遺物第33図81の小皿は、口径7.6cm、底径5.8cm、器高1.5cmで、この遺物から14・15世紀代の遺構と考える。

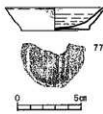
白色系
軒平瓦
唐草文
鬼瓦



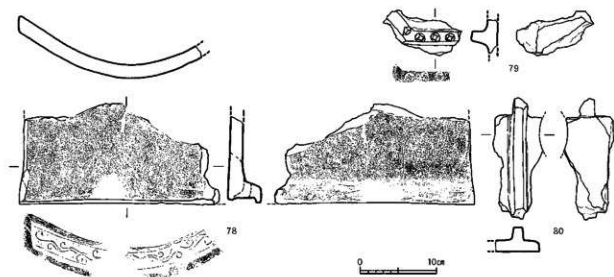
第28図 SK066実測図(1/30)



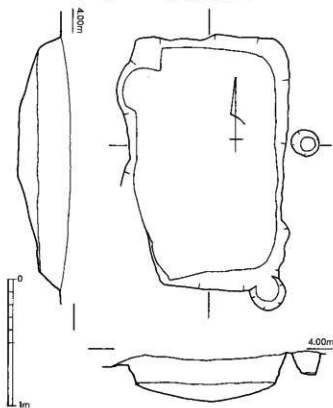
第30図 SK068実測図(1/30)



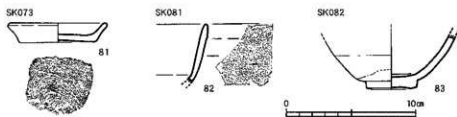
第29図 SK068出土遺物①(1/3)



第31図 SK068出土遺物②(1/5)



第32図 SK073実測図(1/30)



第33図 SK073・081・082出土遺物(1/3)

SK081 (第15図)

SK081・SK082はL-7区の中央部で検出された連続する十坑である。SK081は東西約1.2m、南北約1.0の規模で、床面は皿状に窪み、深さは約50cmである。

香炉

出土遺物は少なく、第33図82の瓦質土器は香炉と考えられる。口縁部には木瓜文状のスタンプ文が連続的に施文されている。

SK082 (第15図)

SK082はSK081の西側に掘り込まれた土坑で、南北約1.2m、東西も1m以上の東西方向に長い方形土坑と想定できるが、東側は削られている。深さは西端が深く15cmで、床面は傾斜している。

中国陶磁
天目

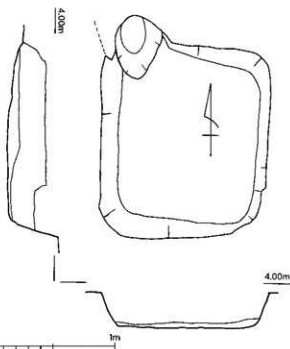
SK082も出土遺物は少なく、第33図83は中国陶磁の天目茶碗である。この資料にはSK087出土の資料が接合する。

SK087 (第34図)

SK087はK-6区の北寄りで検出された方形土坑である。南北1.8m、東西1.5mの規模で、検出面からの深さは0.4mで、壁はほぼ直立し、床面はほぼ平坦である。



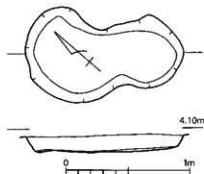
第35図 SK087出土遺物(1/3)



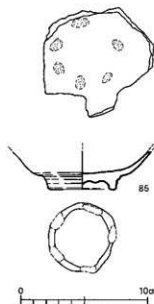
第34図 SK087実測図(1/30)

龍泉窯系
青磁長頸壺

出土遺物は少なく、図示した第35図84は龍泉窯系の青磁の長頸壺である。外面には施釉前の文様が施文されている。遺構の時期は、良好な遺物ないが、SK073と類似しており、14・15世紀と考える。



第36図 SK101実測図(1/30)



第37図 SK101出土遺物(1/3)

SK101 (第36図)

SK101は、L-6区東北部で検出されたヒョウタン形の上坑である。規模は長さ1.4m、最大幅0.9cmで、検出面からの深さは15cmを測り、床面は平坦である。

朝鮮王朝

遺構内からの出土遺物は少なくいが、第37図85の朝鮮王朝陶磁の碗がある。色調は暗赤褐色で、透明釉がかかる。器形は底部近くがふくらみ、法量は高台の畳付中心部で5cmを測る。目跡は見込みに

斗々屋茶碗

6ヵ所、畳付に5ヶ所が確認できる。蕎麦茶碗と斗々屋茶碗は目跡の大きさと数、器形の違いで認識されており、前者は見込みに大きい目跡が5個程度、後者は小さい目跡が7～10個と認識されているが、本資料は蕎麦茶碗に近い。

蕎麦茶碗

遺構の時期は、小破片であるが京都系土師器が出土していることから、16世紀後葉と考える。

SK116 (第38図)

SK116はK-6区の東寄りで検出された南北に長楕円形の土坑である。この遺構は、検出時複数の遺構の切合いが想定され、SK114・SK115の遺構名も一部に付けていた。しかし、発掘調査が進行すると一つの土坑であると理解できた。このため、名称をSK116に統一した。

遺構の規模は、長軸が2.5m、幅1.4mであるが、検出面からの深さは0.5mで、床面の形態は、壁が緩く傾斜し平坦である。床面の規模は長さ1.8m、幅0.9cmである。

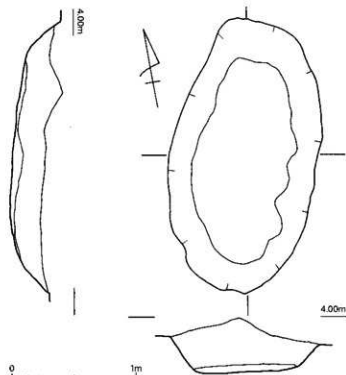
備前焼

出土遺物は第39図に図示した。86は備前焼の大甕で、復元径は約50cmである。口縁部は直立し、玉縁が廻る。胴部は工具による撫でと粗い刷毛目で器面調整され、暗茶褐色をしている。

香炉

87～89は瓦質土器である。87は3か所に脚が付く小型の香炉である。口径は6cmで、脚を含めた器高は4.7cmである。口縁部外面には竹管状の施文具で連続的な刺突文が施文されている。器面は丁寧な磨ぎで、灰褐色をしている。88の口縁部と89の胴部は同一體体の可能性が高い。88の口縁部外面には平行する2本の沈線間を菱形の文様で埋めている。この文様は89の胴部下位にも一条施文されている。施文具は×印のスタンプを連続して押捺した可能性もある。器面は外面が横方向の撫でで仕上げられているが、内面は横方向の刷毛目状の調整痕が認められる。88は底部近くで、文様部の径は約50cmである。

90～92は在地系の土師質土器の坏である。90は口径6.6cm、底径4.5cm、器高2.5cmの小杯で、口縁部は内駒する。91は口径7.4cm、底径4.4cm、器高2.7cmの小杯である。底部は上げ底状になり、口縁部にはスガが付着している。92は口径10.9cm、底径6.5cm、器高3.5cmの完形品の坏である。口縁部は肥厚し、外傾し、器高は比較的高い。

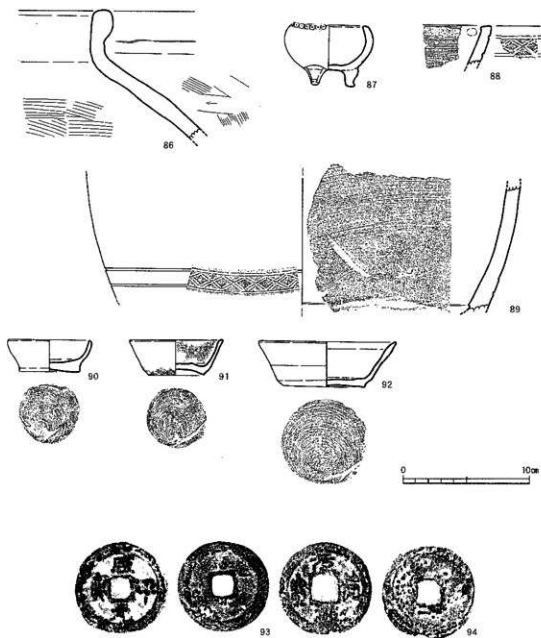


第38図 SK116実測図(1/30)

銭貨

遺構内からは銭貨が2枚出土している。93は北宋の998年初鑄の「咸平元寶」である。94は北宋の1098年初鑄の「元符通寶」である。

遺構の時期は、備前焼の形態は14世紀後半から15世紀前半の形態に近い。在地系の土師質土器も14世紀代のそれに比較すると、器高が高く、口径に対し底径がやや小さい特徴がある。また、器高の高い杯を伴うことも特徴で、14世紀末から15世紀前葉と考える。



第39図 SK116出土遺物実測図(1/3, 1/1)

SK123 (第40図)

SK123は、L-7区の南寄りで見出された東西に長軸を持つ楕円形の土坑である。確認できる遺構の規模は、上面が東西約1.8m、南北約1.0mで、壁はほぼ垂直に掘り込まれ、検出面からの床面までの深さは0.9mである。床面は、ほぼ平坦であるが、西側半分が緩く東に傾斜し、東半分が最深部となっている。

備前焼

出土遺物は第41図に図示したが、小形の在地系の小坏3点が目立つ。95は備前焼の小型の壺の口縁部の資料である。口縁部は直口し、端部は外側に肥厚し、玉縁状になる。器面は回転を利用した横方向の撫でで、色調は暗赤茶色である。15世紀前葉と考える。

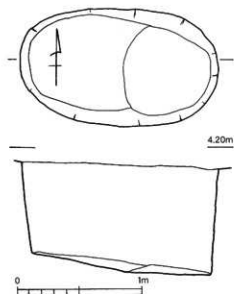
在地系
小坏

96~98は在地系の土師質土器である。96は口径6.3cm、底径4.8cm、器高1.7mの小坏である。97は口径7.6cm、底径4.3cm、器高2.7cmの坏である。96に比較すると、口径に対し底径が小さく、側面観は口縁部が外に大きく開く逆ハの字状をし、端部は内湾状になる。98は口径7.5cm、底径3.9cm、器高2.6cmで、97に見られた側面観の逆ハの字状の形態がさらに顕著になる。口縁部は大きく伸び、端部が外反し、先端は尖るように仕上げられている。

茶臼

99は、茶臼の破片である。石材は淡緑色をし、和泉砂岩に類似する。

遺構の時期は、備前焼の壺や、在地系土師質土器の形態から15世紀前葉から中葉と考える。



第40図 SK123実測図(1/30)



第41図 SK123出土遺物(1/3)

SK138 (第42図)

SK138は、K-6・7区、L-6・7区の交差部で検出された土坑で、SD043を切る。上面の遺構の規模は、長軸方向が2.0m、短軸方向が1.7mの不整円形をしている。検出面からの深さは0.4mで、床面は平坦である。

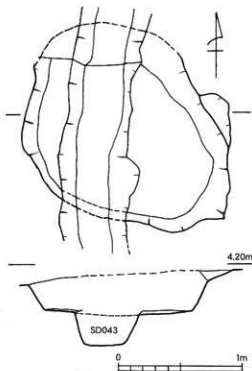
遺構内から出土した遺物は少なく、図示できたのは第43図100の中国陶磁の天目茶碗の底部のみである。底部は削り出しの高台状になり、壘付外側で測る底径は4cmで、胴部下位には縦方向の細いへら状の磨き痕が文様状に残されている。その上から黒色の釉が厚くかけられている。

遺構の時期は、出土遺物が少ないため、不明であるが、切合うSD043との関係で、16世紀後葉の可能性が高い。

中国陶磁
天目



第42図 SK138出土遺物(1/3)



第43図 SK138出土遺物実測図(1/30)

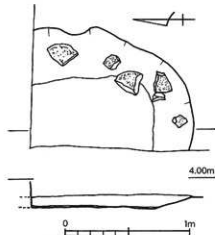
SK150 (第44図)

SK150はI-7区で検出された遺構で、調査区の西側壁部にあたる。遺構の全体を知ることができないが、確認できたのは、東南部のみである。このため、遺構の規模は不明であるが、検出面からの深さは10cmで、皿状に窪み、床面は平坦である。

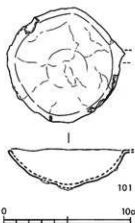
遺構内からは拳大の礫や扁平な石が出土したが、遺物は少ない。しかし第45図101に図示した鉄製品は注目される。この鉄製品は、柄の部分を欠くが、鉄製の杓子である。残された部分は、口径8.9cm~9.2cmで多少歪んでおり、器高は3.0cmで、厚さは2.5mmである。全体に錆が進んでいるが、重さは182.3gを測る。

鉄製杓子

遺構の時期は、第2南北街路の西側に掘り込まれた溝の上面で検出されたことから、16世紀後葉以降と考えられる。



第44図 SK150実測図(1/30)



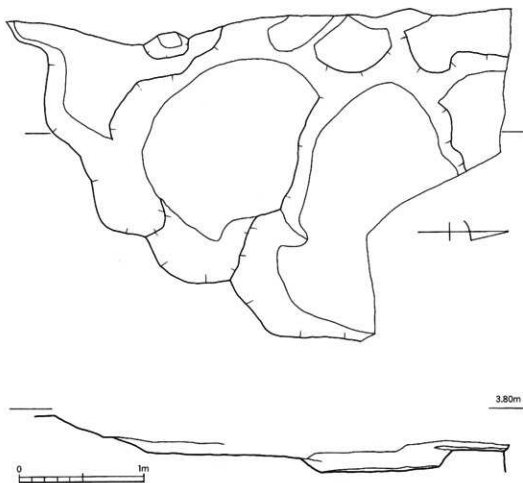
第45図 SK150出土遺物(1/3)

SK159 (第46図)

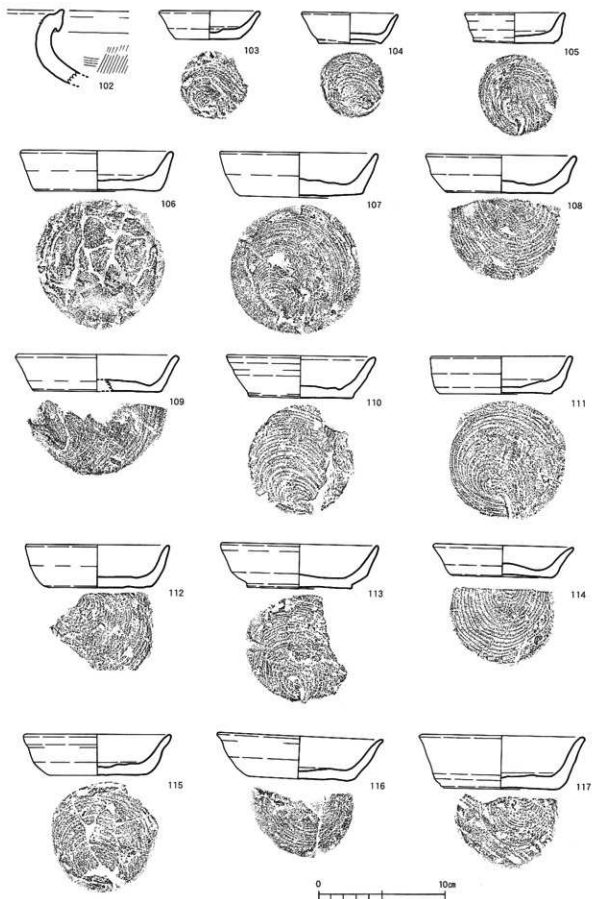
SK159は、第2南北街路を形成している版築状の土砂を除去後にJ-7区で検出された遺構である。遺構の規模は、周辺を擾乱部分で削られているが、南北4.0m、東西2.9mの範囲で堀堀められている。底面は平坦であるが、数面が確認され、複数の掘り込みの集合体の可能性が高い。最深部は北寄りで検出された土坑で、遺構確認面から50cmある。

遺構内からの出土遺物も多く第47・48図に図示した。102は黒褐色をした瓦質土器の壺で、口縁端部は帯状の粘土が貼り付けられ、常滑焼の壺状になっている。器面は刷毛目状の工具で調整されている。103～117は在地系土師質土器である。103～105は小型の坏である。103は口径8.0cm、底径5.2cm、器高2.3cmで、底部は糸切痕の後板状圧痕が残る。底部付近は丸みを持ち、口縁部は、外傾する。104は口径7.6cm、底径5.0cm、器高2.4cmの小坏で、口縁部は、外傾し、先端部は尖り、外反する。105は口径8.0cm、底径6.5cm、器高2.5cmの完形品の小坏である。底部付近の器壁は厚く、口縁部は直角に近い立ち上がりで、先端部は外反する。

106～117は坏であるが、106・107は口径と底径の差が小さく、口縁部は底部付近の器壁が厚く、直線的に立ち上がり、先端が尖る。このため、断面系が長三角形になる。法量は106が口径12.0cm、底径9.8cm、器高3.1cmで、107は口径12.6cm、底径10.0cm、器高3.5cmである。これに対し、108も



第46図 SK159実測図(1/30)



第47図 SK159出土遺物①(1/3)

同類であるが、底部近くがふくらみ、口縁部が外反する。口径12.0cm、底径8.6cm、器高3.0cmである。

109は口径12.6cm、底径10.2cm、器高2.9cmで、底部には糸切痕の後、板状圧痕が残る。110は口径11.8cm、底径8.3cm、器高3.3cmである。109・110ともに、口縁部の器壁は、底部付近から端部まで、ほぼ均一で、外傾し、先端は丸く仕上げている。111は108と類似する形態の完形品の坏で、口径は11.2cm、底径9.0cm、器高3.0cmで、立ち上がり部外面を斜めに整える特徴を持つ。

112は口径11.4cm、底径8.4cm、器高3.4cmで、全体に器壁が厚く、重量感がある。113は108・111の系統を引き、口縁部下位を撫で、斜めに整えている。法量は、口径12.4cm、底径8.4cm、器高3.5cmで、口縁部を尖るように仕上げている。114は底部中央が盛り上がるように器壁が厚くなり、口縁部は底部近くの器壁が厚く、口縁部は大きく外反する。口径11.0cm、底径8.0cm、器高2.5cmである。

115は口径11.6cm、底径7.9cm、器高3.2cmで、底部近くの口縁部外面は丸みを持ち、口縁部は大きく外反する。116は、口径13.0cm、底径8.0cm、器高3.4cmで、多に比較すると、底径と口径の差が大きく、口縁部が逆ハの字状に開き、先端は尖るように仕上げ、外反する。117は口径13.0cm、底径9.0cm、器高4.2cmで、底部は糸切痕の上に板状圧痕が残る。口縁部の器壁は比較的均一で、端部は外反する。他の坏に比較すると、器高が高い。

118は、口径13.8cm、底径7.8cm、器高3.6cmで、底径と口径の差が大きく、口縁部は逆ハの字状に直線的に開き、側面観が逆台形である。他の坏に比較すると端正で、趣を異にする。

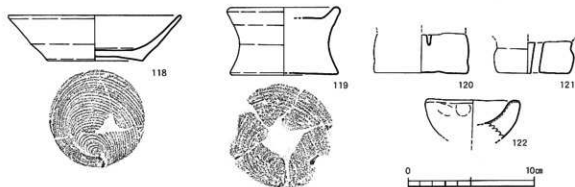
燗台

119～121は円柱状に成形した燗台である。119は上面径8.6cmで、周辺部が立ち上がり、坏状になる。底径は8.4cmで、器高は5.5cmである。上面中央には棒を立てた孔があるが、欠損しているため形状は不明である。120は上部を欠く資料である。底径は7.2cmで、残された高さは3.1cmであるが、上面の割れ口中央部に芯棒を立てる孔の痕跡を認めることができる。121も上部を欠く資料である。残された部分は、底径5.8cm、高さ2.6cmで、中央部には径0.7cmの芯棒を立てる孔が貫通している。

埴埴

122は埴埴の資料である。口径は7.2cmで、手捏ねのため外面には指圧痕が残る。器壁は厚く、底部近くは1.7cmである。内面には融着した金属質が残る。

遺構の報告で述べたように、遺構内には掘り込みによる底面と考えられる平坦部が数か所認められることができる。この遺構の形成は数度の掘削の結果と想定できる。その時期は、103～105の形態の小坏が存在することや、117の器高が4cmを超える坏をはじめ、比較的器高の高いものが多いこと、15世紀代に特徴的な118の口縁部が逆ハの字状に開く坏が含まれる。このことから、14世紀末から15世紀前葉にかけて掘削された土坑と考える。



第48図 SK159出土遺物②(1/3)

(2) 溝・堀

SD043 (第49図)

SD043はL-6区の西端で検出されたほぼ南北方向に延びる溝で、南半分は他の遺構から切られているため不明である。溝の方位はN-8°Eで、確認できる規模は、長さ約8.3m、上面幅約85cm、底面幅40cmで、検出面からの深さは約75cmで、断面形は逆台形である。

遺物は第50・51図に示したように、在地系土師器を中心にまとまりのある出土状態を見せる。中でも第50図123のベトナム印花文褐釉平皿は、露胎となっている底部の端に、突起状の高台が廻り、口縁部は直線的に外側へ広がる。内面は印花文があり、釉は内面淡黄白色、外面は茶褐色がかかる。法量は口径13.9cm、底径5.1cm、器高3.6cmである。

ベトナム印花文褐釉平皿

須恵質

124は外面に二段に櫛歯状文が施文された須恵質の焼き締め陶器である。色調は内面が灰色、外面は淡黄灰色である。125は口縁部がV字状に屈曲する常滑焼の壺の口縁部である。帯状に廻る口縁部の幅は約3.0cmである。

常滑焼

櫛歯状挿鉢

126・127は櫛歯状の挿鉢である。126は口縁部が肥厚し、断面が三角形になる。内面には8条の櫛歯状工具で掘り目が入れている。色調は淡茶色をしている。127は口唇部を欠くが、注口部に近い位置の資料で、内面には掘り目の交差状態が観察される。底径は16.2cmで、口径は32cm、器高11cmが想定されている。口縁部の形態は、126と同じで、断面が三角形であり、色調は灰茶色である。

瓦質土師

車輪状

スタンプ

128～130は瓦質土器である。128は口縁部が内湾する鉢の胴部で、平行に貼り付けられた細い凸帯の間に菊花文、その下に車輪状のスタンプ文様が連続して押捺されている。129は内湾する口縁部の資料で、上面に平坦面を持ち、その外側下位には平行する細い凸帯の間に菱形を基調としたスタンプ文が施文されているが、回転施文と考えられる。130は口径17.8cm、底径9.4cm、器高7.8cmの挿鉢である。掘り目は底部で重なり合うようにつけられている。

菱形スタンプ

白色系土師

131・132は白色系土師質土器で色調と器壁の薄さ、器面にロクロ引きによる段が付くことが特徴である。131は口径7.9cm、底径4.3cm、器高1.4cmであるが、132は大きく口径11.7cm、底径5.2cm、器高3.7cmで、底部には糸切の後の板状圧痕がついている。

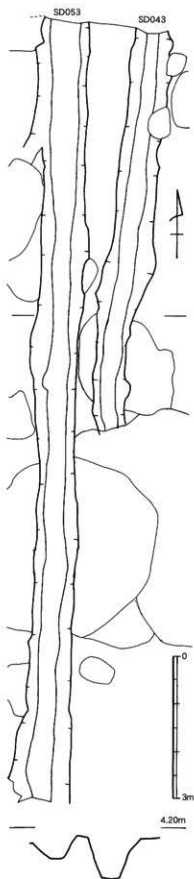
在地系土師

133～136は在地系土師質土器の小坏である。口径は6.8～8.0cmであるが、底径は4.6～7.0cmと差が大きく、器高は1.5～2.0cmである。135の器形は口縁部が直立気味になり、端部が外反する。136は内面にロクロ引きの痕跡が残る。

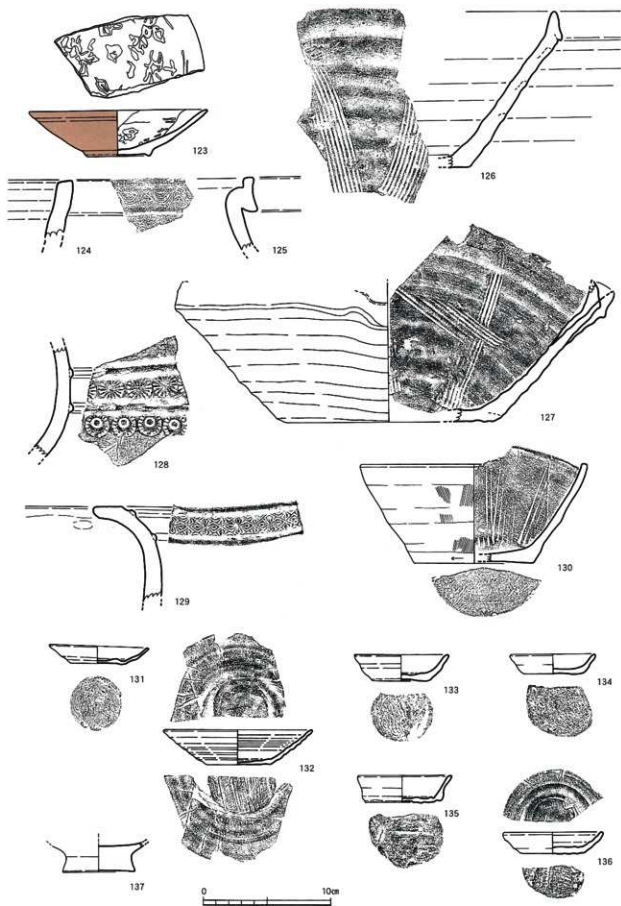
燗台

137は底径5.8cmであるが、上面端部を欠き、径8.0cm、器高2.5cmが想定できる。器形は、燗台に類似するが、上面中央部に穿孔を認めることができない。

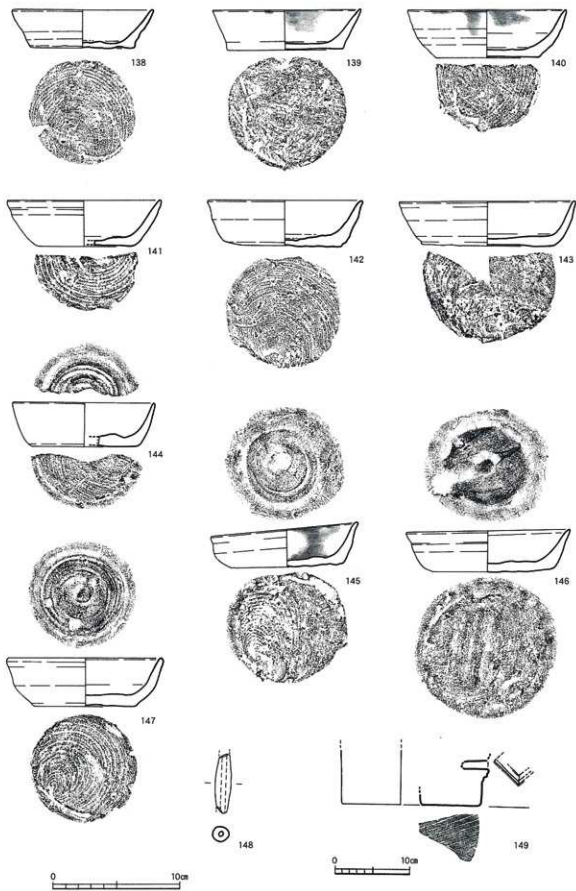
第51図138～147は在地系土師質土器の坏である。口径は138の11.1cmから143の13.9cmまでであるが、平均12.2cmである。底径と器高



第49図 SD043・053実測図 (1/80)



第50図 SD043出土遺物①(1/3)



第51図 SD043出土遺物②(1/3, 1/5)

の平均は8.8cmと3.5cmである。口縁部の形態は、底部から直線的に外横する138・139・141や、内湾気味になる140・144・147、口縁端部がわずかに外反する142・143・145・146などがある。器壁は底部近くを厚くする傾向が見られる。

紡錘形土錘

148は紡錘形の土錘である。両端を欠くが、重量は7.3gである。

茶白

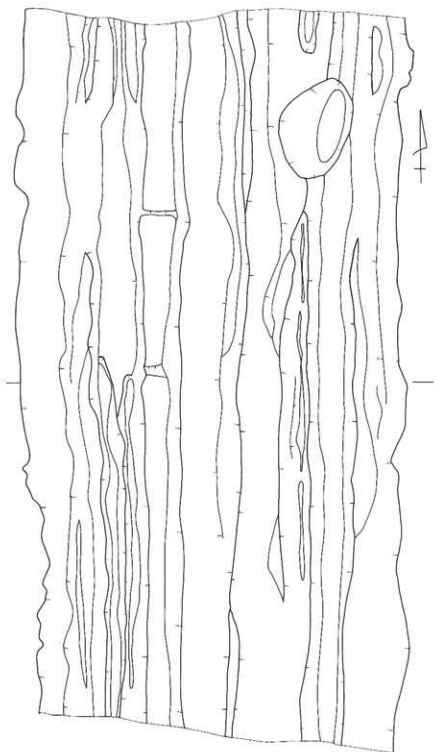
149は茶白の上白で、青灰色をした和泉砂岩に類似した石材である。取手部分の孔と菱形の飾りの部分が観察できる。

和泉砂岩系

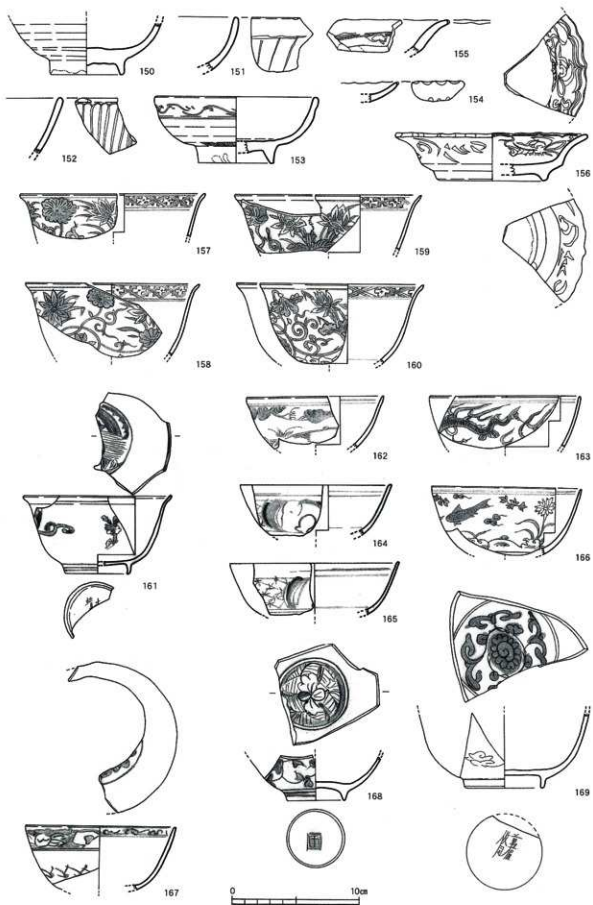
時期は備前焼の播鉢の形態や白色系土師質土器の存在から15世紀中葉と考える。

SD044 (第52図)

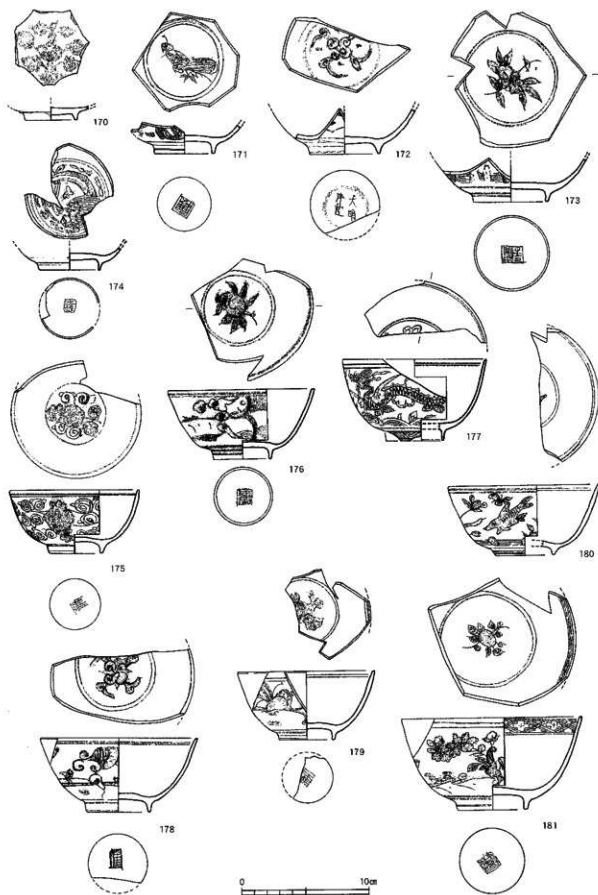
SD044は調査区の西側J-6・7区で検出された南北方向の大規模な溝で、SF140とした第2南北街路と東側の施設を区切る遺構である。同じ方向に掘り込まれた



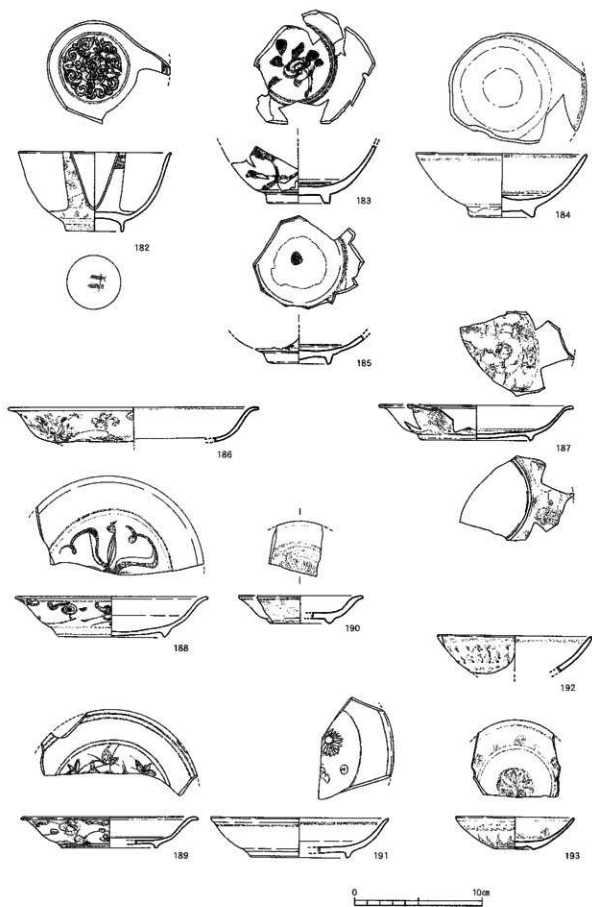
第52図 SD044・048・051実測図(1/80)



第53図 SD044出土遺物①(1/3)



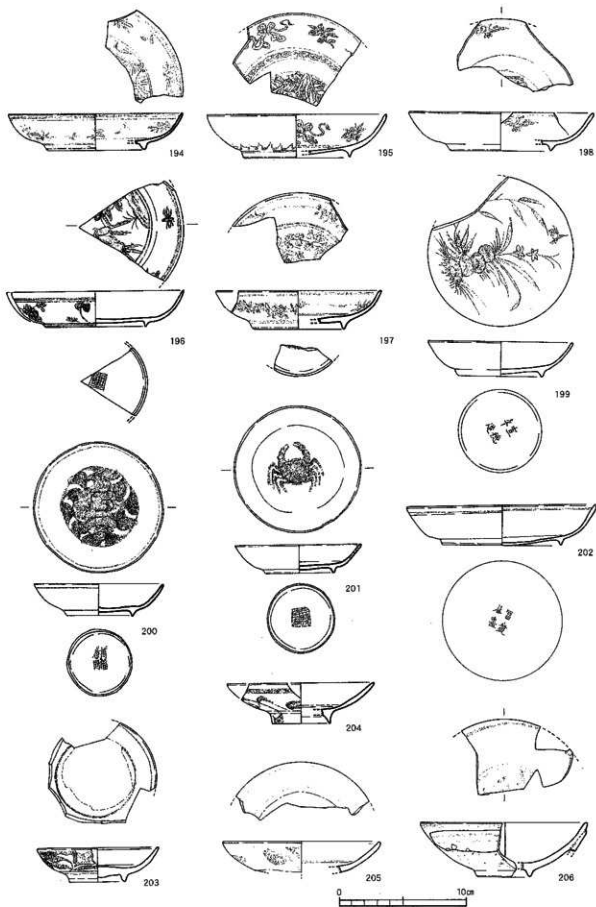
第54図 SDC44出土遺物②(1/3)



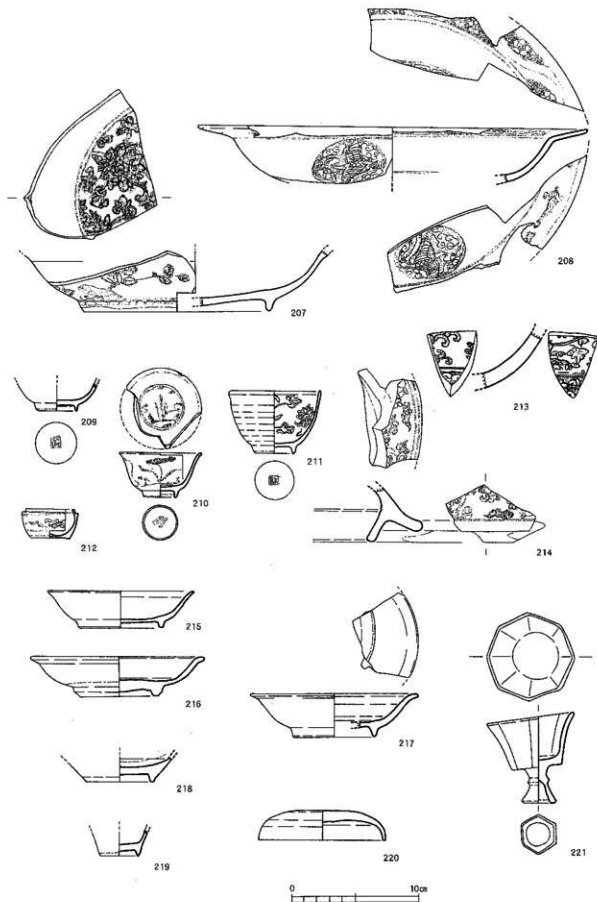
第55図 SD044出土遺物③(1/3)

- SD051と東側で切合い、SD044が新しい。調査区内で確認できるその規模は検出面で幅約5.0m、深さ約1.8mで、北は88次調査区、南は72次調査区に続いている。断面形は概ね逆台形であるが、底部は南北方向に細い筋状の掘り込みや段が観察され、数度の掘り返しも想定できる。
- 遺構内の土砂の堆積は、東西方向から埋め立てられた状態で、上面が窪地状になった時点で島津氏の侵攻があった模様で、その部分を中心に焼土を含む層が形成されている。さらにその後、埋立て作業が進められ、最終的には、第2南北街路と同じ高さに造成されている。
- 遺物は、埋めに混入した状態で出土したが、下部からの出土品は、この溝が機能していた時点で投棄されたと想定され、底面近くでまとまった状態で検出された。さらに、これらの遺物は、溝の下位は湿潤な状態が今日まで継続していたようで、本来は土中では腐食してしまう植物性遺物や動物性遺物が良好な状態で出土した。これらの出土遺物は第53～81図に図示した。
- 第53～59図は貿易陶磁器である。第53図150～156は青磁片である。150は底径5.8cmの龍泉窯系青磁であるが2次焼成を受けているため灰白色をしている。量付から内側は露胎である。151は、外面にはヘラ描き文様のある内湾気味に立ち上がる青磁碗である。152も器形・文様構成は類似するが、縦方向の線描きの幅が狭い剣先連弁系の文様である。153は外面上位に波状の文様を施文した、口径12.8cm、高台径6.0cm、器高5.3cmの龍泉窯系青磁碗である。154は口唇部に刻み目が付く青磁皿である。155・156は輪花皿である。線描きの文様は、155が内面に、156は内外面に施文されている。復元された156の量法は、口径15.2cm、高台径10.0cm、器高3.7cmである。154～156は龍泉窯系青磁である。
- 157～161は口縁部が外反する青花碗で、口径は157・159・160が14.8cm、158が13.8cmであり、復元口径の異なる158を含め、口径や唐草文や口縁部内面の四方樺文の構成や青花の発色、器壁の厚さ、口縁部内面の文様などから同一個体と考えられ、161も口縁部が外反する形態で、口径11.8cm、高台径5.1cm、器高6.1cmで、青花の文様は胴部と見込みに見られ、胴部文様は簡略されている。また、高台内側には「大〇堵〇」の銘が入る。これらは景徳鎮系青花で、小野編年の染付碗B群にあたる。
- 162～167は底部を欠く資料であるが、口縁部は外反しない。162は口径10.8cmで、SK101出土資料と接合する。163は口径12.0cmで、外面に雲龍文が施文されている。164の五彩碗は口径12.0cmで、文様には朱色・緑色・茶朱色に発色する釉で施文されている。165も五彩碗で、復元口径が13.4cmと164と異なるが文様構成や使用されている釉が極似しており、同一個体の可能性が高い。166は口径11.8cmで、外面に富を象徴する魚文と唐草文が施文されている。167は口径12.0cmで、文様は外面が口縁部と胴部下位の二段に分けて描かれ、内面は口縁部周辺と見込み部にも施文されている。
- 168・169は底部の資料であるが、168は高台径4.6cmで、外面と盛り上がる見込み部に文様が施文されている。また高台内側には「富」と思われる銘が書かれ、小野編年の染付碗E群にあたる。169は高台径6.1cmで、外面と見込み部に文様が描かれている。また、高台内側には「萬福攸同」の銘が入れられている。
- 第54図170～174は高台部分の資料である。170は高台径が4.1cmであり、皿とも考えられる。見込みに黒みを帯びた発色の青花の唐草文が描かれている。171の高台径は4.7cmで、青花による文様は、外面と高台内側にもあるが、見込みには二重調線の内側に女性と思われる人物像が描かれている。172も同様で、高台径5.4cmで、外面・見込みに発色の暗い青花による文様がある。また高台内側には「大明攸造」の銘が書かれている。173は高台径が5.9cmで、見込みに唐草文、外面と高台内側にも文様がある。174は高台径4.8cmで、見込みに龍文が描かれ、高台内側にも文様がある。171・172・174は小野編年の染付碗E群で、173はD群にあたる。
- 175～181は破片であるが、復元により全体形を知ることが出来る資料である。175は口径10.2cm、高台径4.1cm、器高5.0cmで、青花の発色は悪く黒色に近い。外面と見込みの文様は唐草文とおもわれる。また高台内側には「福」の銘が書き込まれている。176は口径11.5cm、高台径4.5cm、器高5.0cmの碗で、外

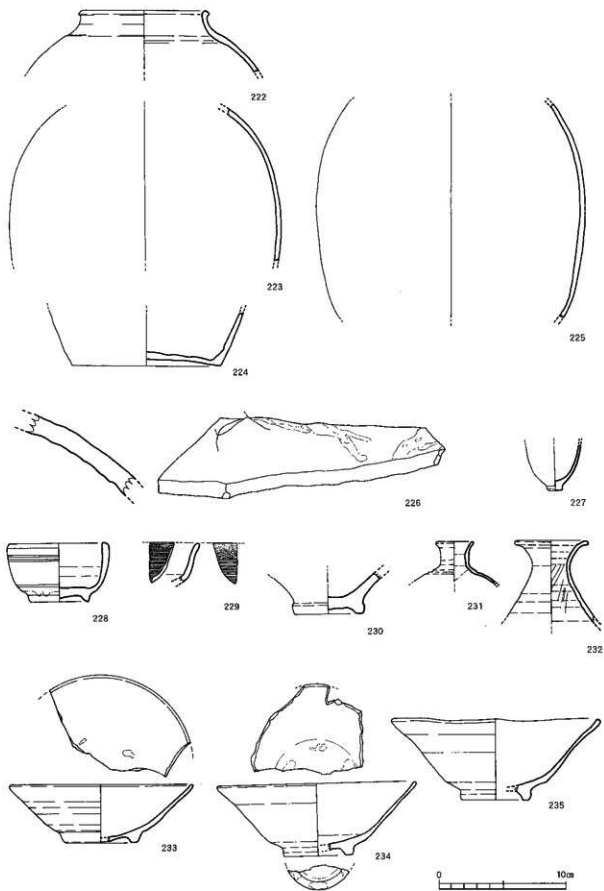
唐草文	面と見込みに唐草文が描かれ、高台内側にも記号化した文字が書かれている。177は口径11.2cm、高台径4.6cm、器高6.4cmで、見込み部の大半を欠く。文様は外面に龍文が描かれているが、見込みと高台内側は不明である。178は口径12.4cm、底径4.8cm、器高5.8cmで、179は口径10.8cm、高台径4.3cm、器高5.4cmで、両者とも外面と見込みに唐草文が描かれ、高台内側にも図案化された文字がある。180は口径12.0cm、高台径4.6cm、器高5.5cmであるが、見込みの大半を欠く。外面には草魚文が描かれている。181は口径14.2cm、高台径5.3cm、器高7.2cmの大振り碗である。文様は外部と見込みに唐草文、高台内側には文字を図案化した文様が描かれるなど、他の6点と同様であるが、口縁部内側は多角圓線のみであるのに対し、四方唐文が施文されて、高級感がある。第55図182は口径12.0cm、高台径4.4cm、器高6.2cmで、口縁部がわずかに外反する。文様は唐草文が外面と見込みに描かれ、口縁部内側には四方唐文が施文されている。また、高台内側には「貴富」を図案化した記号文字が記されている。以上の8点是小野編年の染付碗E群である。
中国青花前 景徳鎮窯系	これまで報告した中国陶磁の青花碗は、器壁も薄く、胎土も精緻で、文様も外側を縁取った後に呉州を充填する手法など製作方法が丁寧であることから、青花の発色の悪いものも含むが、景德鎮窯の製品と想定する。それに対し第55図183～185は文様も粗雑で、簡略化されており、器壁も厚く、胎土も精緻さに欠け、高台の造りも太い。このことから漳州窯系の碗と考える。183は高台径6.0cmで、高台周径は露胎となっている。文様は外面と見込みに唐草文が描かれている。184は口径13.5cm、高台径5.2cm、器高5.0cmで、文様は口縁部周辺の圓線のみである。高台周辺に軸はかけられず露胎で、見込みも蛇の目軸測ぎである。185は高台径5.0cmで、外面に文様が描かれているが、不明である。高台周辺は露胎で、見込みは蛇の目軸測ぎである。
漳州窯系	186～191は口縁部が外反する皿である。186は口径19.8cmで、口縁部が外反し、外面に唐草文が描かれているが、見込みは不明である。187は口径15.4cm、高台径8.6cm、器高2.7cm。188は口径15.2cm、高台径8.4cm、器高3.2cmで、両者とも外面と見込みに異なる唐草文が描かれている。189は口径14.0cm、高台径7.4cm、器高2.5cmで、外面と見込みに唐草文が描かれている。190は口径9.8cm、高台径4.6cm、器高2.2cmの小型の製品で、文様の施文手法やつくりから漳州窯系と考える。191は口径14.0cm、高台径7.6cm、器高3.1cmで、口縁部は他の5点に比較すると極小さい。文様は外面にないが、見込みに唐草文が描かれている。186～189は小野編年の染付皿B1群で、191は染付皿B2群である。
染付皿B1群 染付皿B2群 染付皿C群 茶筒底皿	192・193は小野編年の染付皿C群にあたる蓼筒底の皿である。192は口径12.2cmで、外面のみ文様が確認できる。193は口径9.4cm、高台径3.0cm、器高2.5cmで、文様は見込みに唐草文、外面の底部近くに芭蕉文が施文されている。
芭蕉文	
染付皿E群	第56図は小野編年の染付皿E群の青花皿である。194は口径13.6cm、高台径7.5cm、器高2.9cmで、文様は外面・内面・見込みと唐草文で埋められている。195は口径14.2cm、高台径8.5cm、器高3.4cmで、外面の文様は高台付近のみで乏しいが、内面は見込みを中心に唐草文や他の文様で埋められている。196は口径14.0cm、高台径8.0cm、器高2.8cmで、外面・内面・見込みに唐草文が描かれ、高台内側にも図案化した文字が書かれている。197も施文部位は同様であるが、高台の内側は不明である。口径13.0cm、高台径7.4cm、器高3.0cmである。
法螺貝状 蟹	198は口径14.6cm、高台径8.0cm、器高3.1cmで、外面に青花文はなく、内面と見込みに文様が描かれている。199も外面に文様はなく、内面に、口縁部と見込みの区別なく全体に唐草文が描かれ、高台内側に「宣徳年造」の銘が記されている。法量は口径11.4cm、高台径6.6cm、器高2.2cmである。200と201は完形品で、200は口径10.2cm、高台径5.1cm、器高2.5cmで、文様は見込みに法螺貝状の文様があり、高台内側に「萬福依同」の文字が記されている。また201も見込みに蟹が描かれ、高台内側には図案化された文字が記されている。法量は口径10.1cm、高台径5.3cm、器高2.2cmである。202は口径15.0cm、高台径9.4cm、器高3.1cmで、文様は無く、高台内側に「富貴佳器」の文字が記されている。以上の5点は外面に文様がな
「富貴佳器」	



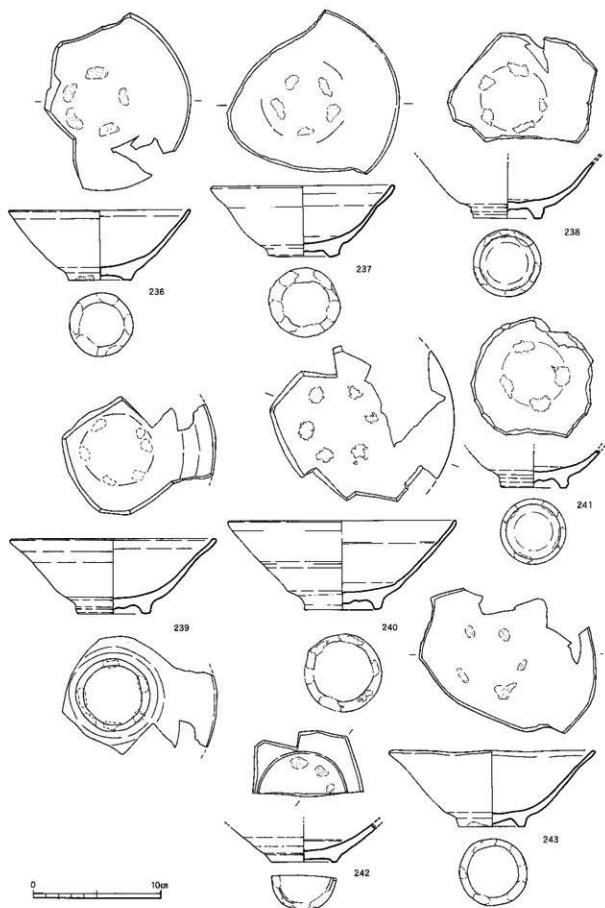
第56図 SD044出土遺物④(1/3)



第57図 SD044出土遺物⑤(1/3)

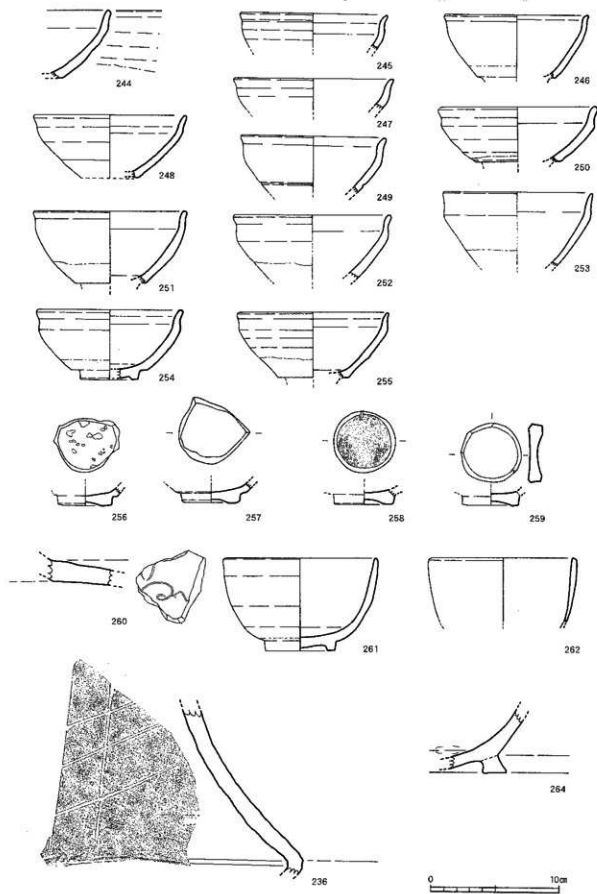


第58図 SD044出土遺物①(1/3)

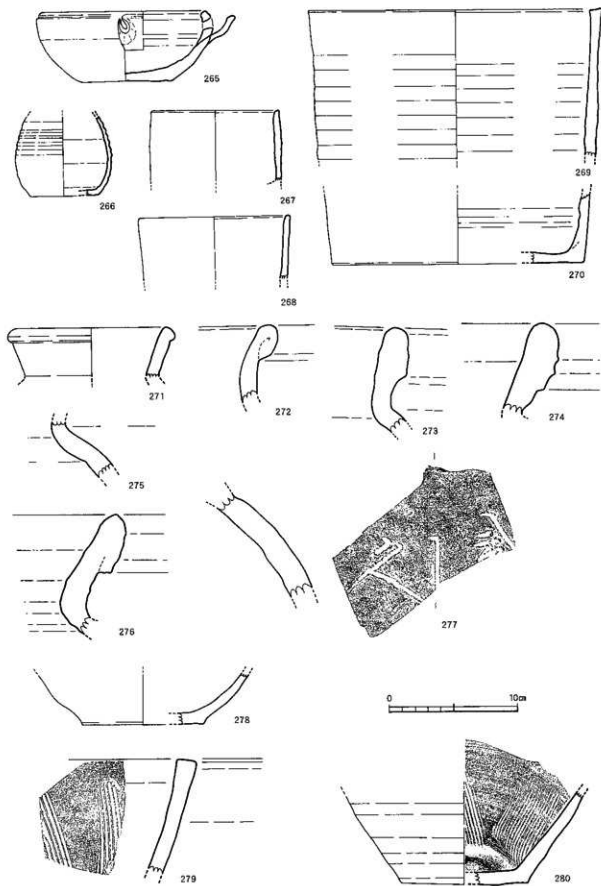


第59図 SD044出土遺物⑦(1/3)

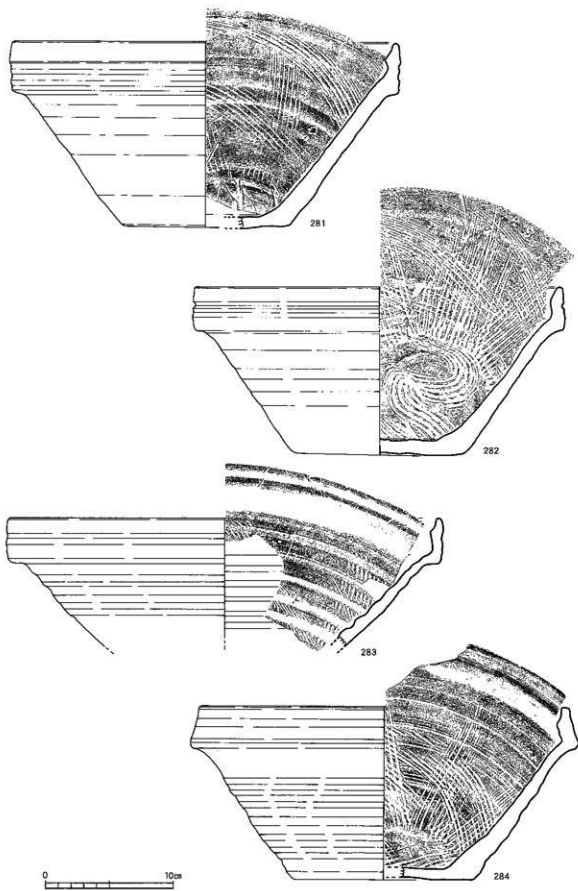
- く、見込みと内面にのみ文様が描かれている。
- 203は口径7.6cm、高台径4.4cm、器高2.7cmで文様は外面にのみ施文され、高台と内側、見込みは露胎である。204は口径11.6cm、高台径4.6cm、器高3.2cmで、高台周辺や見込みは露胎となっており、文様は外面にのみ施文されている。205は口径12.5cmで、見込みと底部周辺は露胎である。以上3点は、漳州窯系と考える。
- 206は口径13.6cm、高台径4.7cm、器高4.3cmで、青花は外面と見込みに点状の文様がある。また、口縁部には焼成の際に窯内で融着した破片が付いている。
- 第57図207と208は口縁部が折れる形態を特徴とする小野編年の染付皿F群の皿である。207は高台径14.6cmで、外面と見込みに唐草文が描かれている。208は口径30.6cmの大型品で、文様は外面に鳳凰文、内面は屈曲した口縁部とみこみに文様が施文されている。両者とも景德鎮系である。
- 209～211は青花の小杯である。209は高台径3.2cmで、内外面とも文様はなく白磁状態であるが、高台内側に「福」の文字が記されている。210は口径6.4cm、高台径2.7cm、器高3.5cmで文様は外面と見込みに施文されている他に、高台内側に図案化した文字が記されている。211は口径7.0cm、高台径3.0cm、器高4.9cmで、内面にのみ印文による文様があり、畳付以外は白磁釉がかけられている。青花は高台内側に「福」の文字が記されている。
- 212は台子の体部である。口径3.8cm、底径3.0cm、器高2.3cmで、底部周辺と蓋受け部の口縁部が露胎になっている。青花文は胴部のみ見られる。
- 213は大型の容器の資料で、器壁は1.5cmあり、文様は内外面ともに五彩で装飾されている。214は梅瓶の蓋である。青花による文様は、外面のみで、透明釉は身受け部以外全面に施釉されている。
- 215～219は白磁である。215口縁端部が外反する白磁皿で、口径11.5cm、高台径6.4cm、器高2.9cmある。畳付を除き全面施釉されている。216も口縁端部が外反する白磁皿である。口径は13.8cm、高台径6.2cm、器高3.3cmで、底部の器壁は厚く、底部周辺は露胎で、見込みは蛇の目軸刺ぎである。217は口径13.2cm、高台径6.6cm、器高3.4cmで、見込みは蛇の目軸刺ぎである。以上の3点は小野編年の白磁皿C群に含まれる。
- 218は高台径5.4cmの白磁の杯である。畳付部と鈎足み周辺が露胎となっている。219は高台径3.0cmの白磁小杯である。
- 220は内面が露胎で、外面が施釉されており、天井部は丸く仕上げていることから蓋と判断する。法量は口径10.0cm、器高2.4cmである。
- 221は白磁の角杯である。杯部は八角形で、径が6.6cm、深さ3.2cmで、脚は六角形で径は2.5cmで、杯との接合部は凸格が廻る。
- 第58図222～225は同一器体の褐釉陶器である。口縁部は内傾し、端部は肥厚する。肩部はわずかに段を持ち、胴部は長胴である。底部は上げ底になり、底面は露胎である。口径は9.6cmで、底径は11.9cmで、器高は30cm程度を想定する。色調は茶褐色である。中国製と考える。
- 226はタイ陶磁の四耳壺の肩部の資料である。耳は欠けている。227は淡灰褐色をした焼締め陶器の小杯で、小さな底部は径1.2cmで、中世大友府内町跡第5次B調査区でも出土している。製作地不明であるが、東南アジアの可能性を持つ。
- 第58図228～235・第59図236～243は朝鮮王朝陶磁である。228は白磁小杯で、乳白色の釉に黒色粒を含む。口径7.6cm、高台径4.8cm、器高4.6cmで、高台周辺は露胎である。229は古三島である。内外面とも口縁部に斜め方向、その下位に平行沈線を入れ、沈線内に白色土を埋め、透明釉をかけている。230は器壁が厚い壺で、高台径は5.4cmである。畳付部以外は透明釉がかり、灰褐色をしている。231は口径3.0cmの小型の壺である。器壁は薄く、暗褐色をした焼き締め陶器である。232は薄い器壁で、口縁部が外反し、暗灰色した舟徳利である。口径は5.5cmで、焼き締められている。



第60図 SD044出土遺物⑧(1/3)



第61図 SD044出土遺物⑨(1/3)



第62図 SD044出土遺物①(1/3)

高安・斗々屋
目跡

233～243は蕎麦や斗々屋と呼ばれる茶碗である。233は口径14.4cm、高台径5.8cm、器高4.6cmで、全面に透明釉がかり、灰緑色をしている。見込みに小さな目跡が2か所残されている。234は口径15.6cm、高台径5.4cm、器高5.7cmで、色調は灰白色や灰橙色をしており、透明釉がかけられている。見込みと畳付に3か所目跡が残されている。235は胴部下がふくらみを持つ。口径16.0cm、高台径5.4cm、器高6.4cmで、色調は灰白色をしており、透明釉がかかる。目跡は、見込みと畳付に確認できるが、全体の数は不明である。

236は口径14.2cm、高台径5.0cm、器高5.5cmで、透明釉が全面にかり、灰白色をしている。目跡は見込みと畳付に5ヶ所残されている。237は口径14.1cm、高台径5.6cm、器高5.5cmで、白橙色をしており、透明釉で覆われている。胴部下がふくらみ、口縁部は緩く屈曲する。目跡は見込みと畳付に5ヶ所確認できる。238は高台径5.4cmで口縁端部を欠く資料である。色調は灰白色・灰褐色をしており、透明釉がかかる。見込み中央は緩く窪み茶溜りを形成している。目跡は見込みと畳付に5ヶ所確認できる。

239は口径16.2cm、高台径4.7cm、器高5.9cmで透明釉がかり明赤茶色をしている。街路であるSF140の6・7面出土資料と接合し、目跡は見込みと畳付に不等間隔に6ヶ所残されている。240は口径18.0cm、高台径6.0cm、器高7.0cmで、黄褐色をしており、透明釉がかかる。内面には見込みと胴部の境に小さな段が付き、口縁部下位にも見られる。資料は街路であるSF140の5面からの出土資料と接合する。目跡は、見込みと畳付にほぼ等間隔で6ヶ所認められる。241は高台径5.3cmで、口縁部を欠く。色調は灰白色・灰褐色をしており、見込みと畳付に大きな目跡が4ヶ所残されている。

242の高台は低く、径5.2cmで、見込みと胴部の境に小さな段が生じている。色調は緑茶色で、堅緻な焼成である。二分の一の資料であるが目跡は見込みと畳付に3ヶ所認められる。243は口径16.0cm、高台径5.2cm、器高6.0cmで、灰白色をしており、透明釉がかかる。資料は街路であるSF140の6・7面からの出土資料と接合する。目跡は、見込みと畳付に5ヶ所認められる。

朝鮮王朝
蕎麦茶碗系
天目茶碗

以上の朝鮮王朝茶碗は、目跡の数が4～6ヶ所と少なく、器形も底部近くが張るなどの形態から蕎麦茶碗系に分類できる。

第60図244～259は口縁部が外反する天目茶碗である。244は茶色釉がかり、底部周辺が露胎となっている。245は口径11.4cmで、内外面に明褐色の釉がかかる。246は口径11.2cmで、底部を欠く資料である。釉は暗茶色をしている。247は口径12.6cmの茶黒色の釉がかかる口縁部である。248は口径11.9cmの底部を欠く資料である。底部周辺が露胎で、それ以外は茶褐色の釉がかかる。249は口径11.2cmで、外面に沈線が入られている。暗茶褐色の釉がかかる。250・251は底部を欠く資料で、250は口径12.6cm、251は口径12.0cmである。252は口径12.4cmで、暗褐色の釉がかかる。253は口径11.8cmで、口縁部は屈曲するように立つ。釉は黒褐色をしている。254は全体の形態を知ることができる資料で、口径11.6cm、輪高台の外側の径4.6cm、器高5.5cmで、茶褐色の釉がかかる。255は口径12cmで、底部を欠く。釉は暗茶褐色をしている。

内ぞり高台

256～259は天目茶碗の内ぞり高台の底部である。内面は施釉されているが、外面は露胎となっている。256は底径4.2cmで、内側の釉には付着物がある。257は底径4.2cmで、見込みの釉は黒茶色である。258・259は底部の破片を円盤状に加工している。底径は258が4.5cm、259が4.6cmで、見込みの釉は暗茶色である。

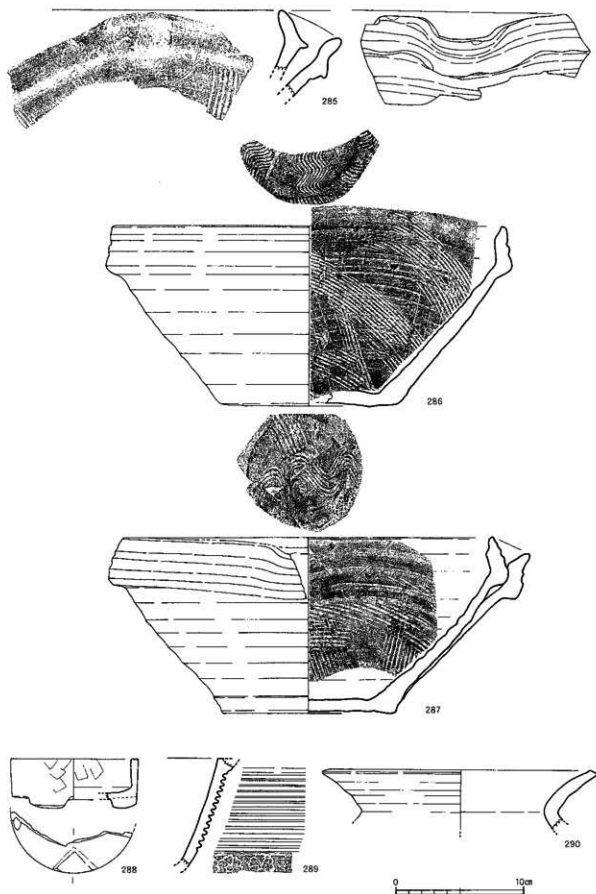
中国
瀬戸美濃系

以上244～259の資料は、256が中国陶磁であるが、ほかは瀬戸美濃製の天目茶碗である。260は、瓶で、線描きの文様の上に薄い緑色の釉がかかる。261は口径12.0cm、高台径5.5cm、器高7.3cmの碗で、高台周辺から内側は露胎であるが、そこ以外は淡黄白色の釉がかかる。262は口径11.0cmで、全面に天目茶碗と同じ暗褐色の釉がかかる。以上260～262は瀬戸美濃系と考える。

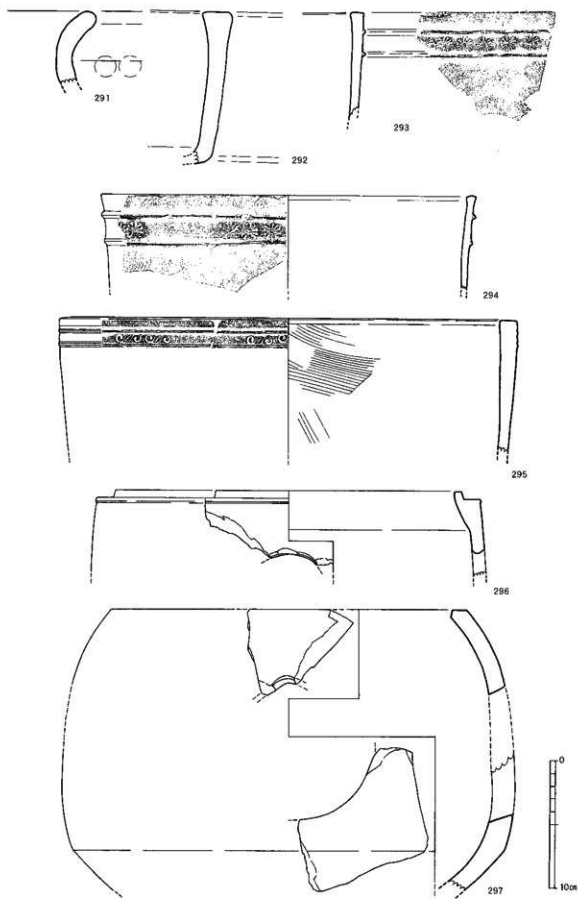
常滑焼

263の焼き締め陶器は外面にヘラ記号のある常滑焼の大甕の胴部である。暗茶褐色をしている。264は高台が付く焼き締め陶器で、内面は暗オリーブ色の釉がかかるが、外側は露胎で暗褐色をしている。

- 備前焼
注口 第61図265～第63図287は色調や胎土から備前焼の各器種とした。265は注口を持つ器形をしている。口径は13.0cm、底径7.0cm、器高4.9cmで、赤褐色をしている。266は底径5.4cmで、胴部上位にロクロによる凹線が入る。赤褐色をした徳利であろう。267・268は同じ器形をしており、267の状況から器高は7.5cm程度であろう。復元口径は267が9.8cm、268が10.8cmと異なるが、同一個体の可能性が高い。両者とも赤褐色をしており、外面はヘラ削りのあと撫でて仕上げられている。香炉の可能性が高い。269・270も形態や、胎土、器面の調整痕などから同一個体の可能性が高い水指又は建水と考える。269の口径は23.2cmで、内面には粘土積をした痕跡が残る。270の底径は20.0cmであり、器高は20cm程度と想定する。暗赤褐色をしている。
- 玉縁 271～278は大きさが異なるが、壺や甕の破片である。271は口径12.0cmで、口縁端部は外側に肥厚し、玉縁状になる。272の口縁部は、玉縁がさらに明確になる。さらに273は玉縁の外面が幅広になり、274・276は幅広になった部分に凹線が廻る。色調は、271・272が灰褐色であるが、273は赤褐色、274・276は茶褐色をしている。こうした口縁部には、275・277の片部・胴部が付くが、275は271・272に付く可能性が高く、「式」の文字がヘラ描きされた277は274などに付き、「式石」甕の胴部と考える。278も赤褐色をした焼結め陶器で、備前焼との壺の底部と考える。
- 「式石」甕 279～287は備前焼の擂鉢である。279は口縁端部がわずかに肥厚する14世紀前半の特徴を持つ。280は底径9.9cmで、17条の櫛歯状工具で掘り目が増えられている。
- 擂鉢 281～287の口縁部は、口縁上端部が発達して上方に伸びるため、外面に脊状のタガが生じている。図示した7点はこの部分に凹線が廻り、口唇部内側にも凹線状の窪みが生じている。内面の掘り目は、口縁部から内底部に直線的に入れ、さらにそれに交差するように斜めの掘り目を加えている。これらの擂鉢の時期は16世紀後葉に位置付けられている。
- 281は口径30.0cm、底径13.2cm、器高14.6cmで、内底部に掘り目はないが、底部近くの掘り目は使用のため摩耗している。282は口径28.5cm、底径13.2cm、器高12.3cmで、内底部には波状の掘り目が入られている。283は口径34.0cmで、内面には粘上帯の縦ぎ目が凹線状に残る。284は口径29.0cm、底径14.0cm、器高13.6cmで、内底部には「字状に掘り目が増えられている。285は口縁部の注口部で、幅3.5cmの広い注ぎ口を形成している。286・287は内底部に波状の掘り目がある。286は口径31.0cm、底径13.6cm、器高14.2cmである。287は注ぎ口部分を含む資料で、口径29.0cm、底径13.8cm、器高14.8cmである。
- 瓦質土器 第63図288～第66図306は瓦質土器の各器種である。288は口径10.0cm、底径5.6cm、器高3.9cmの香炉で、低い脚が付く。外面はヘラで磨かれ、暗灰色をしている。289は口縁端部を欠く鉢で、口縁部下位に13条の平行沈線が入られ、その下位に花卉状の文様が押捺されている。暗灰色をしている。290は口径21.8cmの灰色をした甕である。
- 第64図291は灰色をした大型甕の口縁部で、外面に指圧痕が残る。292は体部の器高が12cm程度で脚を持つ鉢と考える。口縁端部が肥厚し、器面はヘラ磨きされている。
- 菊花文 293は口縁部下に2条の細い凸帯が廻り、その間に菊花文のスタンプを連続して押捺している。294も同様で、口径29.4cmで、間隔を空けながら菊花文が押されている。295は直立する口縁の端部が肥厚する器形で、外面の2本凸帯の間には、豊後国特有の双頭麩手文が2個単位でスタンプされている。以上の3点は火鉢と想定されている。
- 双頭麩手文 296は、口径27.2cmで、口縁部上面の内側が突起している。また、胴部には意が形成されており、風炉と考える。297は口径28.0cm、器形は胴部が球状に張り、中央部に上部の一部が失る形状の意が開けられていることから風炉と考える。
- 風炉 第65図298～第66図301は瓦質土器の擂鉢である。298・299は外面がヘラ削りで成形され、内面にはほぼ等間隔で口縁部から内底部にかけて掘り目が入られている。内底部には波状の掘り目が入られており、両者は同一個体と想定される。298の口径は24.7、底径13.3cm、器高10.0cmで、299は幅



第63図 SD044出土遺物①(1/3)



第64図 SD044出土遺物⑦(1/3)

瓦質土師鉢鉢

3.5cmの注ぎ口を含む部位で、口径26.8cm、底径12.0cm、器高12.4cmである。300も同じタイプの撞鉢で、口径は28.0cmである。また301は内底部に同心円状の撞り目が入る底径13.5cmの瓦質土器の撞鉢である。

甕の底部の302は、底径18.2cmで低い脚が3か所に付く。胴部の内面と底部外面には刷毛目状の調整痕が付くが、内底部には同心円状の叩きで器面調整されている。303も低い脚を持つ底径44cmの胴部が直立する鉢である。口縁部は294・295のようになる火鉢と考える。304は底径19.2cmの底部で、口縁部は290や291を想定する。

305・306は鉢の脚で、294・295などの底部に付くと考えられる。

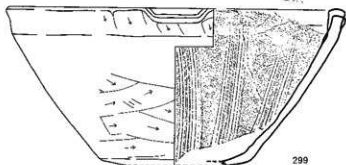
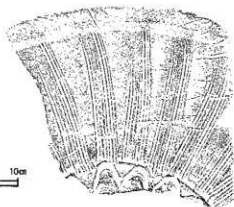
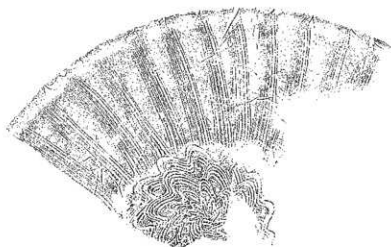
火鉢

京都系土師器

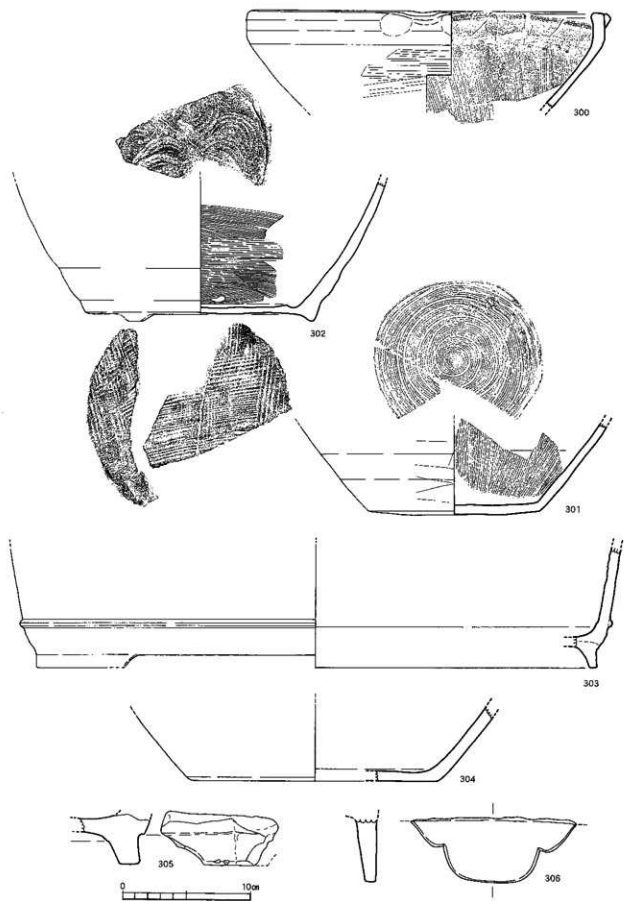
五法量

第67図307～第68図379は京都系土師器である。この土器は非ロクロ系で、全面撫でで仕上げている。色調は在地系土師質土器やロクロ日土師器と異なり、白黄色・白茶色の明るい色をしている。大きさは概ね五法量に分化している。中世大友府内町跡から最も多く出土する遺物でもある。図示した遺物はその中で、遺存状態の良好なものを図化した。

307～330は口径が8.0cm～9.0cmで最小の口径を持つ京都系土師器である。口縁部は先端が肥厚し、端部は



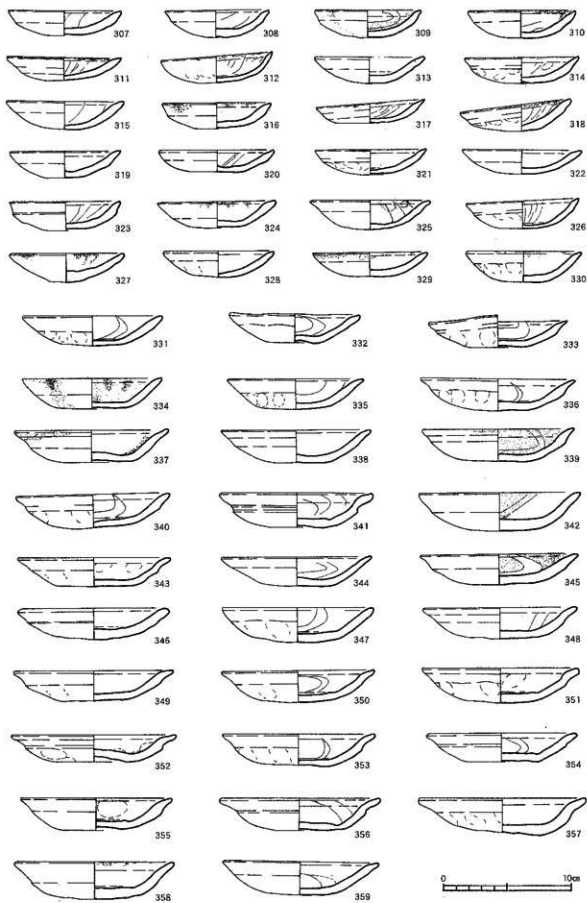
第65図 SD044出土遺物⑬(1/3)



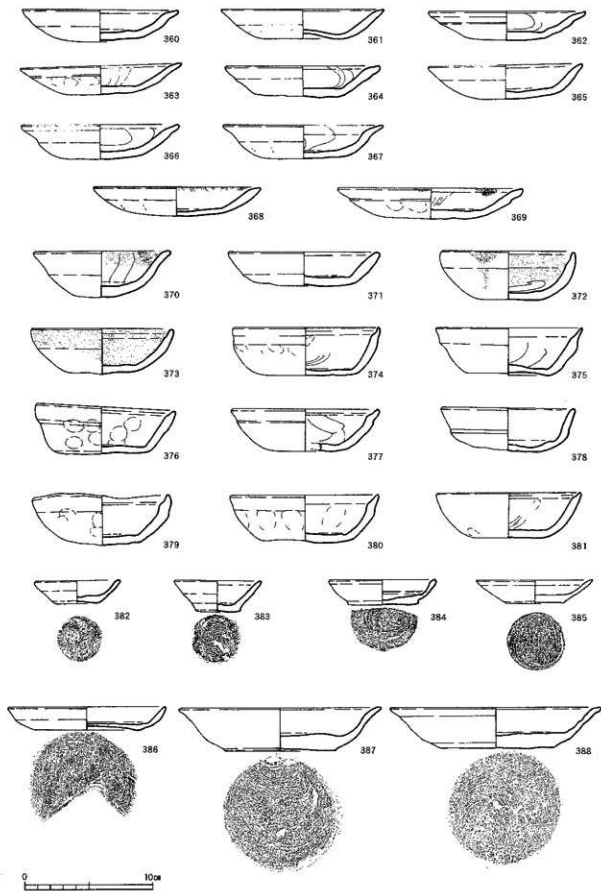
第66図 SD044出土遺物④(1/3)

- 突るように仕上げられている。口縁部外面の撫での押さえは弱い。また、309~312・316~318・324・325・327・329・330などの口縁部にはススが附着し、灯明皿としても使用されている。
- 次サイズは口径11cm前後で、331~335・337がそれにあたる。口縁部は端部が肥厚する。次に大きいサイズの口径は12cm~13cmのグループがある。口縁部は先端部の外面を強く押さええて撫でるものが自立し、外反するように成形している。341・343・348・350・351~357・362・367は特に強く押さええている。数量的にはこのサイズの出土量が最も多い。
- さらに大きいサイズは、369のような口径14cm前後のものがある。数量は少ない。これより大きいサイズとして口径16cm前後の京都系土師器もあるが、SD044からは良好な資料は出土していない。
- 非ロクロ系 以上の皿形をした京都系土師器の他に、豊後府内で創出された非ロクロ系の土師器がある。370~381は胎土が京都系土師器と同じであるが、口径が11cm前後、口縁部は端部の内側が強く押さえられており器高3.5cm前後で、器形は碗形になる。
- 碗形 382~385はロクロ成形された小杯である。382は口径6.2cm、底径3.3cm、器高1.2cmで、383は口径6.7cm、底径3.7cm、器高2.4cmで底部に糸切痕が残る。また384と385はそれぞれ口径8.2cm、底径4.5cm、器高2.0cmと口径9.2cm、底径4.6cm、器高1.8cmで、前2点よりも1サイズ大きい。385は口縁部にススが附着しており、灯明皿として使用されている。
- 386~388は底部に糸切痕が残る、ロクロ成形されていることが判るが、胎土は京都系土師器と同じであり、在地系の製作技法との折衷形態である。286の口縁部の形態断面は紡錘形状になり、口径14.0cm、底径8.1cm、器高1.9cmである。大型の287・288は端部が外反し、287は口径16.0cm、底径8.8cm、器高3.4cmで、388は口径16.4cm、底径9.0cm、器高3.2cmである。
- 金箔 以上の他、注日される京都系土師器として、第132図725に図示した金箔を貼ったものがある。この資料は、口径14.9cm、器高2.8cmで、器壁は0.6cmと比較的厚い。口縁部は外面を強く押さええて撫でるため、端部が外反する形態になる。全面には黒色の漆を塗布し、その上から金箔を貼っている。
- 黒色の漆 第69図は各種土製品である。390は円盤形の磁器製で、直径7.8cmで、中心部の厚さ0.7cmで周辺が薄くなり、重さは58.4gである。中国の窯道具(ハマ)である。389も同じ器種で、復元される直径も7.8cmで同じである。中国陶磁と一緒に豊後府内にもたらされたものであろう。
- 窯道具(ハマ) 391~394は埴壇壺である。393はほぼ完形品で、口径4.4cm、器高8.7cmで口縁部は短く立ち上がる。胎土は京都系土師器に類似し、製作にあたりロクロは使用されていない。391も口径4.6cmで同じ口縁部形態であるが、胴部の張り小さい。382は胴部から底部の資料で、底径は4.0cmで、指圧痕が残る。394は口径5.0cm、器高1.5cmの非ロクロ系土器である。
- 埴壇壺 395は上面径8.7cm、底面径8.5cm、器高7.7cmの場合で、上面中央に直径0.9cm、深さ4.0cmの芯棒を立てる孔が開けられている。
- 埴壇壺 396は口径6.3cm、器高4.2cmの埴壇壺で、器面には指押さえの痕跡が残る。完形品であるが、使用した痕跡は認められない。
- 土師 397は、土師である。最大径部に細い線が一条入れられ、直径4.0cmで、靱の部分には0.5cmの孔が確認できる。
- フイゴの羽口 398は直径7.0cmで、中央部に2.6cmの通風孔のあるフイゴの羽口である。
- 上皿 399は紡錘形をした土師である。長さ4.5cm、最大幅1.5cm、重さは10.4gである。400は平瓦を素材とし、短軸は6.1cm、長軸6.8cmで厚さは2.1cmの円盤状に仕上げた製品である。
- 漆器碗 第70図401~406は漆器碗である。401は口径13.0cmであるが、高台端部を欠くが、径4.3cmで、器高は5.5cm程度である。断面の木目は口縁部と平行になっており、全面を黒色漆で覆われ、文様は赤色漆で見込みと胴部外面に亀甲文が描かれている。
- 亀甲文 402は後援端部と高台端部をわずかに欠くが、量量は口径15.0cm、高台径8.0cm、器高9.0cmが想定で

- きる。断面には口縁部に平行な木目が認められる。漆は内外面とも赤色の漆で覆われ、口縁部近くの外面にはススが付着している。また内面は擦過痕が確認され、破損したものにバレットとして使用されたと想定できる。
- 403は高台を欠く資料であるが、口径は13.0cmであるが、底径は7.0cm、器高6.0cmが想定できる。内外面ともに暗茶色の漆が塗布されており、文様は、外面に3か所と見込みに巴文が赤色漆で施文されている。口縁部に平行な木目が観察できる。
- 404は口縁部を欠く資料である。底部は厚く2.9cmあり、1.2cmの高台が削り出され、径は8.1cmである。器面は黒色漆で全面が覆われ、見込みに赤色の漆で三つ葉文が描かれている。断面で口縁部に平行な木目が観察できる。
- 405はほぼ完形品である。口径17.4cmで、底部は厚く、3.5cmあり、0.9cmの高台が削り出され、器高は10.9cmである。全面黒色の漆が塗布され、外面に3か所、赤色の漆で伎文様が描かれている。また破損部分から、口縁部に平行な木目が観察できる。全体的に熱を受けている。
- 406はほぼ完全な漆繪である。口径14.9cmで、底部は厚く、3.0cmあり、1.9cmの高台が削り出され、器高は10.0cmである。全面黒色の漆が塗布され、見込みと外面3か所に赤色の漆で亀甲文様が描かれている。また破損部分から、口縁部に平行な木目が観察できる。
- 407は曲物である。底板の直径は15.6cm、厚さ0.5cmの征目板で、側板を加えると、容器としての直径は17.1cmである。底板と側板の接合は、約7.5cmごとに竹釘が打ち込まれ、一周廻った側板は板樹の皮紐で縫うように綴じられている。スギかヒノキを素材としている。
- 第71図408は骨角製品で、耳かき状の形態をしている。長さは12.1cmで、先端を匙状につくり出し、細い棒状の形態は、直径0.4cmである。
- 第71図409～第74図445は各種木製品である。409と422は木櫛である。基部の厚さは1.0cmで、歯部先端にかけて薄く仕上げている。422の一部には漆が付着する。410～412は連歯下駄である。410はほぼ完全な状態である。長さ10.1cm、幅5.7cm、歯を加えた厚さは3.5cmで、木材の中心部付近を使用しており、後方から見ると、同心円状の年輪が観察できる。上面の踵部が接触する部分には棒子状の線描きが入れている。411は、後ろの歯部の資料である。410と同様、後方から見ると、同心円状の年輪が観察できる。412は側部を欠く資料であるため、幅は不明であるが、長さは12.9cmで、歯を含む厚さは3.1cmである。素材は木材の中心部から外れた部位を用いている。
- 413は上面径7.3cmで、下面径に周辺に44か所の浅い切れ込みをいれるため平坦部の径は5.5cmになり、黒漆を塗っている。厚さは2.9cmで、中心部に直径2.2cmの孔を貫通させている。傘の骨を支える部品と考える。
- 414・415は種の玉杖(ぎっちょう)である。414は素材に小木を使用しているため側面に樹根を残すが、直径2.5cmの球形に仕上げている。415の木の中心部を素材にし、長径4.8cm、短径4.3cmのいびつな球形に仕上げている。
- 416と417は征目板を円盤状に加工した製品である。416は厚さ0.8cmで、復元径は10cmである。また417も厚さ0.8cmで、直径は13.2cmである。形状から考えると、曲物の底板の可能性が高い。
- 418は木材の中心部を素材とし、直径6.7cm、厚さ2.6cmの部位と、直径3.0cm、厚さ4.0cmの部位を削り出し、両者の境には浅い窪みが一条めぐる全長6.6cmの製品に仕上げている。木製の椀であろうか。
- 419は長さ9.3cm、幅1.8cm、厚さ1.0cmで、中央部に長さ3.8cmを残し両端を尖るように仕上げている。さらに残された中央部分を長さ1.7cm、深さ0.5cmを削り込み、中心に直径0.8cmの孔を開けており、同じ形態の木製品を組み合わせ、十字形にしていたと想定できる。紡績道具の一部と考える。
- 420は幅3.3cm、厚さ0.3cmの薄い板材で、長さは8.9cmが残されている。表面には2か所穿孔があり、うち1か所は1辺0.3cm、長さ1.7cmの方形の木釘が打ち込まれている。421も幅3.7cm、厚さ0.3cm、長さ



第67図 SD044出土遺物⑤(1/3)



第68図 SD044出土遺物⑬(1/3)

11.3cmの薄い板材で、細長いホームベース状に整形している。表面には16ヶ所の孔が左右対称に穿かれている。その中の1か所には一辺0.3cmの木製の角釘が打ち込まれ、先端を欠くが1.6cm確認できる。

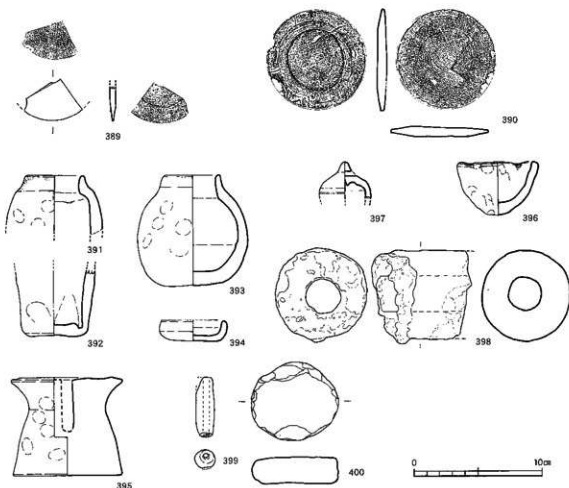
抜き部
独条
紙製芯
柾目板

第72図422は櫛歯の間隔が狭い木製の櫛で、梳き櫛と考える。423・424は木材の中心部を素材にした独条である。423は、長さ6.7cmで、柄の部分は長さ2.5cm、直径1.3cmで、最大径は3.4cmである。芯は直径0.3cmの鉄製である。また424は、長さ7.9cmで、柄の部分は長さ3.0cm、直径1.5cmで、最大径は4.0cmである。芯は直径0.4cmの鉄製で、前者より少し大きい。

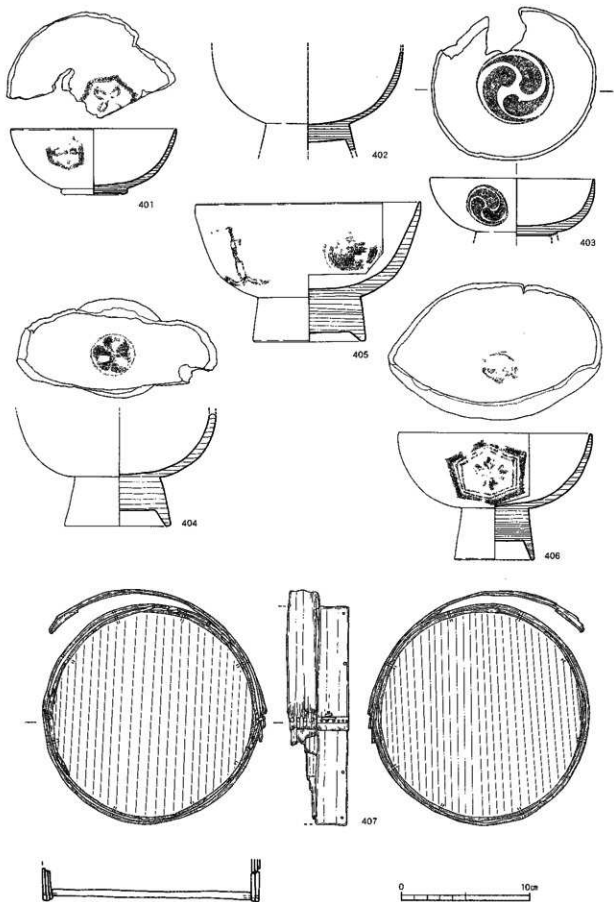
第73図425は長さ21.6cm、厚さ0.6cm、幅2.0cm以上の柾目板に切込加工している。表面に細い線描きが見られるが、割れているため、全容は不明である。しかし、割れ口には木釘が残されており、失われた部位と繋ぐ装置と考える。426は図下方を欠くが、長さ7.9cm、幅2.5cm、厚さ1.3cmで、板目板を素材とし、先端が尖るように加工された木製品である。427は薄い柾目板を素材とした板材で、残された部分は長さ8.6cm、幅3.3cm、厚さ0.3cmである。図中央と左上方に釘穴と考えられる小孔がある。

428は先端と左側面を丸く仕上げた木製品である。図下方を欠くが、長さ10.5cm、最大幅1.7cm、厚さ0.6cmが残されている。429は周閉を欠くが長さ12.4cm、幅4.2cm、厚さ0.5cmで、側面に釘穴がある柾目板で、同様の板材と接合していたと考える。430は長さ21.3cm、幅8.7cm、厚さ0.4cmの長方形の板目板で、図上方と下方に2カ所、右側に3カ所釘穴が開けられている。

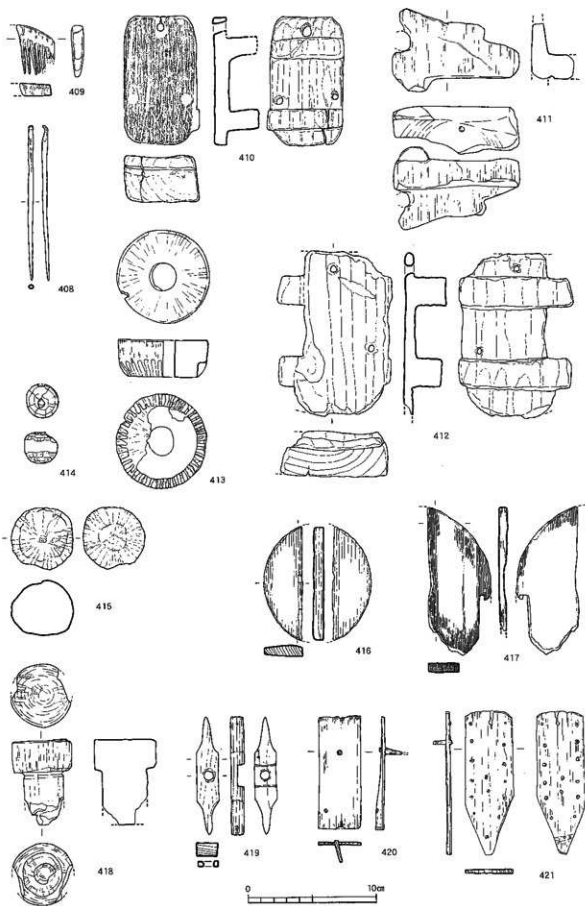
431～434は側面が割れているため、幅は不揃いであるが、長さは30.1cm、厚さは0.2cmと同じであり、同一の木製品を構成していた材料と考える。幅は431が6.7cm、432が6.1cm、433が3.3cm、434が3.4cmで、



第69図 SD044出土遺物①(1/3)



第70図 SD044出土遺物⑩(1/3)



第71図 SD044出土遺物⑧(1/3)

釘穴 431~433の中心のはぼ同じ場所に釘穴があり、433はさらに上位に1ヶ所加わり、434も上位に1ヶ所開けられている。なお、432の両端は焼焦げたようになっており、434もススが付着している。

435は421と同じく細長いホームベース状をしている木製品で、中央部の縦方向に2ヶ所釘穴が開けられている。縦21.8cm、幅5.5cm、厚さ0.3cmである。

第74図436は同一個体と考えられる2点の木製品である。図左は中央部に一辺0.3cmの木釘が刺さっている。図上で縦3.5cm、幅が3.8cmである。図右は、長さ41.2cmで、幅は最大で3.8cm、厚さ0.2cmである。左端に墨書で「封」の文字が書かれ、釘穴が2ヶ所上下に、さらに右端に1ヶ所開けられている。薄い板目板である。

柾目板 437~441は柾目板の板材である。全て一部あるいは大部分を欠くが、残された大きさは、437が長さ44.1cm、幅7.5cm、厚さ0.4cmで、438は長さ35.0cm、幅6.4cm、厚さ0.6cmで、羽子板状になり、柄の部分の幅は4.3cmである、439は長さ28.9cm、幅8.7cm、厚さ0.3cm、440は30.1cm、幅8.5cm、厚さ0.2cmで、両者とも板目板である、441は長さ11.0cm、幅6.6cm、厚さ0.3cmの柾目板である。

442は図下方を薄く仕上げた木製品である。長さ17.7cm、幅1.7cmで、最厚部は0.6cmである、443は下部端部を薄刀状に仕上げた木製品である。長さは17.8cmで、最大幅1.8cmで、上方が柄状になっており、厚さは0.5cmである。

444は長さ18.6cm、幅2.5cm、厚さ0.6cm、445は長さ18.0cm以上、幅2.4cm、厚さ0.2cmの薄く細長い板目板の木製品である。

赤閃石硯 第75・76図は石製品である。446は赤閃石の硯である。残された資料は墨池と墨堂半分くらいである。幅は5.1cmで、裏側も剥離しており、厚さと長さは不明である。海の周辺は弧を描くように仕上げられ、浅い、447は墨池部分のみの資料である。幅は4.4cmで厚さは0.7cmの小型で、墨地は深く、角は隅丸に仕上げている。石材の色調は灰色をしている。

天草石砥石 448は黄白色をしており、天草石製の砥石である。使用のため中央部が薄くなり、折れている。幅は5.9cmであるは、厚さも裏面が剥離しているため不明である。

滑石製石刷 449は滑石製の石刷の破片である。厚さは1.0cmである。

洗白 450~454は洗白の資料である。450は安山岩の上白で、掘り面のある径は20.5cmである。側面には取っ手が付く穴があり、一辺5.8cmと4.5cmの二段の方形の台座がある。掘り面が緻密で茶臼と考える。

451・452は下白の受け部で、451の受け部の径は39.4cmで、上面は研磨されているが、側面には敲打痕が残る。452の受け部径は37.4cmで底径は29.8cmである。上面は研磨で仕上げられているが、

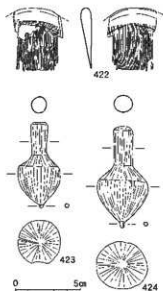
茶臼 側面は斜め方向の粗削りや敲打痕が残る。この2点茶臼で、石材は灰青色をしており和泉砂岩に類似する。453は上白で、上面径29.0cm、下面径26.8cmで、厚さは11.8cmである。掘り目は粗く、阿蘇凝灰岩製である。

454は直径24.3cm、厚さ13.6cmで、上面と下面、側面を丸く仕上げた石材に直径約13.0cmの孔を抉った凝灰岩製である。重さは5.0kgである。

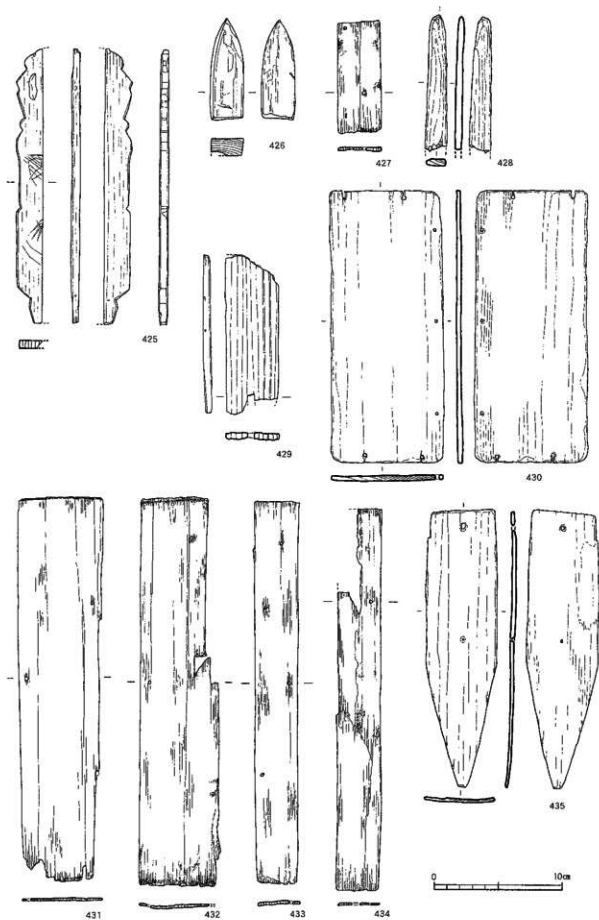
五輪塔 455・456は五輪塔の空輪・風輪部分である。455は長さ20.6cmで、空輪の径は16.8cmで、風輪の上部径15.0cm、下部径12.5cmで、

梵字 側面に梵字がある。重さは3.5kgである。456の空輪は宝珠状に成形され、最大径は15.6cmで、空輪は上部径が14.5cm、下部径は9.3cmである。全体の長さは19.0cmで重さは2.5kgである。

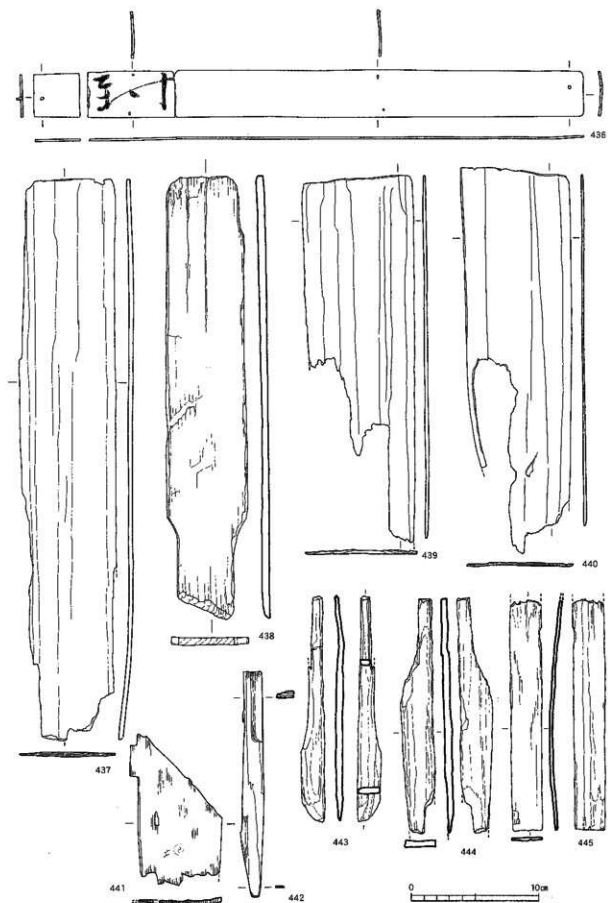
青銅製の匙 第77図は金属製品である。457は真鍮製の杓子で、出土時は金



第72図 SD044出土遺物②(1/3)



第73図 SD044出土遺物①(1/3)



第74図 SD044出土遺物②(1/3)

色をしていた。全長は17.0cmで、柄部は断面「く」字状で8.6cmを測り、すくう部分は柄の方向が8.4cm、幅が8.8cmで、深さはつぶれているが3.0cm程度が想定できる。厚さは0.1cmで、重さは33.4gである。

刀下

458は全長22.2cmの刀子で、茎の長さは8.3cm、幅は1.1cm～0.5cmで、刃部は13.9cmで、幅1.3cmであり、背部の厚さは0.3cmである。重さは24.5gである。

鉄製品

459は断面が底辺1.2cm、高さ1.5cmの隅丸の二等辺三角形をした鉄製品で、両端を欠く。取っ手の可能性が高い。

銅製品

460～463・468は夾大で掲載した資料で、460は青銅製品である。大きさは直径0.5cm、厚さ0.3cm、重さ0.2gで分銅の可能性もある。461は直径が1.6cm～1.9cmの円筒形をした青銅製品で、厚さは0.1cm以下である。462・463は銅製の釘である。462は長さ4.3cmで、打面は直径0.4cmの円形であるが、体部は一辺1.5cmの方形をした角釘である。重さ0.9gである。463は0.3cm×0.4cmの方形の断面方形で、両端を欠く。

銅製の釘

真鍮製物

464は青銅製、465は真鍮製の鏡である。464は基部のみの資料である。端部は角を落とした長さ1.0cm、幅0.8cmの方形の脹らみを造り出し、直径0.3cmの穿孔がある。そこから先端にかけて太くなる断面六角形の柄部が5.0cm続き、さらに直径0.4cmの断面円形の挿入部になっている。465は完形品で、全長13.8cm、重さ22.7gである。鏡は柄部と挿入部に分かち、境は低い高まりがある。柄部は0.4cm×0.8cmの断面長方形で、端部には直径0.4cmの孔が開けられている。挿入部は長さ7.0cmで、断面形は0.2cm×0.6cmの扁平な長方形で、先端は幅0.8cmの幅広になり、厚さ0.1cm、長さ0.2cmの突起が4カ所付く。金色をしている。

斧

466と467は斧と考える。466は真鍮製品で金色をしている。長さ9.1cm、幅0.5cm、厚さ0.1cmで、端部の表面が幅0.1cm、長さ1.0cmの幅でわずかに厚みを増している。467は曲がっているが、耳かき状態で青銅製品である。表面は金箔で包まれ、復元長は先端部を欠くが、約9.0cmで、断面は直径0.2cmの円形をしている。

ガラス小玉

468は緑色をしたガラス製小玉で、直径0.4cm、厚さ0.3cmで、街路から流れ込んだ状態で検出された。第78～80図は出土した瓦である。瓦は多量に出土したが、小片が多いため、法量を知ることができるものや、特徴的な部位、成作痕が明確なものを選別して報告する。469～478は丸瓦で、469～471は軒

丸瓦

三巴文

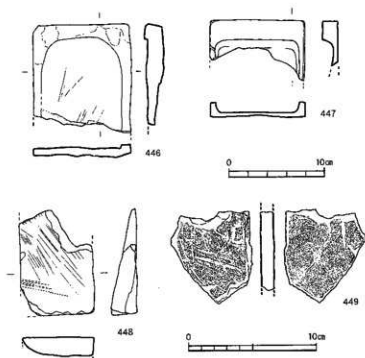
瓦である。いずれも中央に三巴文が位置し、長く伸びた尾が圏線の役割を果たしており、その外側に珠文が施文されている。瓦頭の直径は469が15.6cm、470と471は12.3cmで同じである。

472～475は丸瓦の玉縁部分を含む資料である。

472の玉縁部分の長さは4.0cmで、中央部に直径0.8cmの釘穴が内側に向けて開けられている。全体の長さは不明であるが、幅は13.0cmである。表面は縄目叩きの後ナデ仕上げで、内面は布目やコビキ痕とともに、本州タイプの吊り紐

釘穴

コビキ痕

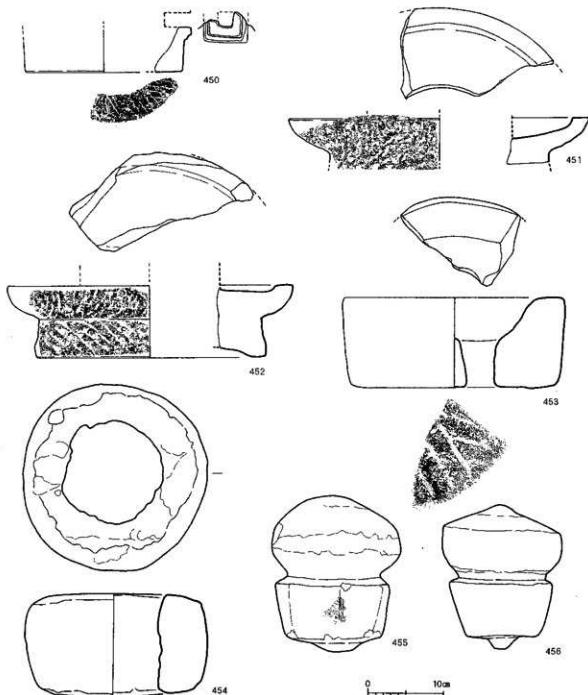
本州タイプ
吊り紐

第75図 SD044出土遺物②(1/3, 1/2)

綱目印き
コビキ痕
本州タイプ
吊紐

痕が観察できる。473は長さや幅は不明であるが、表面は綱目印きの後、その痕跡が残らないように丁寧なナデ仕上げをヘラ状の工具により行われている。内面には斜め方向のコビキ痕の後に布目痕や本州タイプの吊り紐痕が残る。そして最終的には両側縁をヘラ状工具で削り取るとともに、丸味を帯びる仕上げとなっている。また、先端も4.0cmの幅で下端に向けて斜目に削り削っている。

474と475は玉縁部分を欠くが、幅を知ることが出来る資料である。2点とも表面は綱目印きの後、それが見えなくなるくらい丁寧な縦方向のナデをヘラ状工具で行っている。内面は、コビキ痕の後に布目痕と本州タイプの吊り紐痕が残るが、最後に両側縁をヘラ状工具で削り取られるとともに、両端部



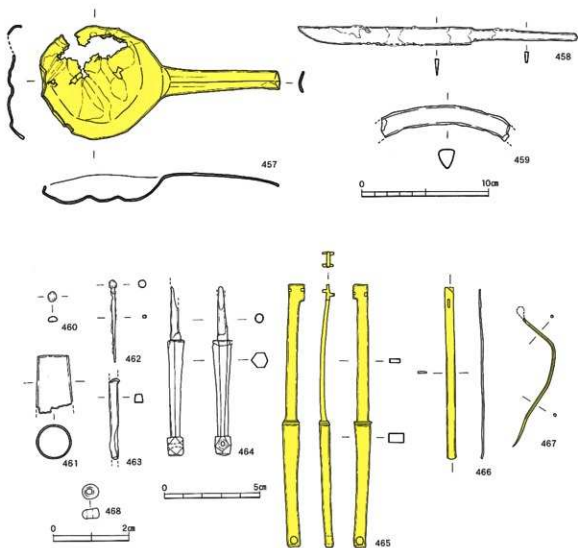
第76図 SD044出土遺物②(1/5)

コビキ痕 は丸味を帯びる仕上げとなっている。コビキ痕は474が側縁に直角に近く、475は斜めである。知ることが出来る瓦の法量は、474が厚さ2.5cm、幅14.2cmで、475は厚さ2.5cm、15.8cmである。

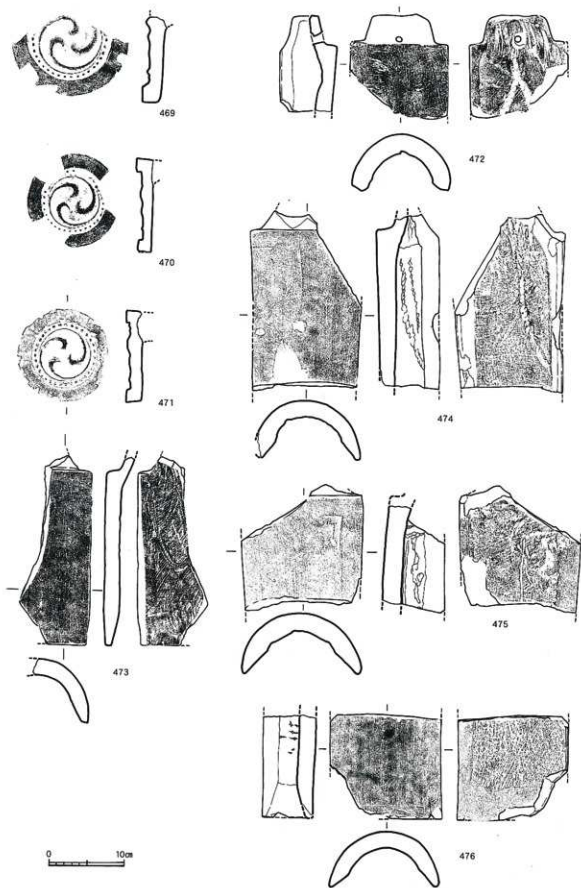
476と477は丸瓦の軒先に近い方である。476は幅が14.6cm、厚さ2.2cmである。表面は縄目工具で叩き絞めた後、ヘラ状工具で丁寧に縦方向のナデで仕上げている。内面は斜目方向のコビキ痕が付き、布目が認められるが、その両側縁はヘラ状工具で削りやナデで調整され、作成痕が消えている。さらに内面は先端から4.0cm内側から斜めに削り取られ成形されている。477の表面は磨滅しているためか、縄目叩きの調整痕は認められないが、内面は斜目方向のコビキ痕の後布目痕と本州タイプの吊り紐痕を認めることができる。さらに側縁をヘラ状工具で撫でるため、こうした調整痕が消えている。そして、内側下方は、約4.0cmの幅で下端に向けて斜めに仕上げている。

478は丸瓦の全体の形態を知ることができる資料である。規格は長さ27.4cmで、3.0cmが玉縁部分である。幅は13.0cmで、厚さは2.2cmである。整形方法は、表面が縄目叩きのあと痕跡が消えるほど丁寧にナデ仕上げをヘラ状工具で行っている。内面は斜目方向のコビキ痕の後、布目痕や本州タイプの吊り紐痕が付き、内叩きで仕上げている。さらに内側の両側縁はナデにより調整痕は消され、縁辺の断面は丸く整えられている。そして、下方は4.0cmの幅で斜目に削られている。

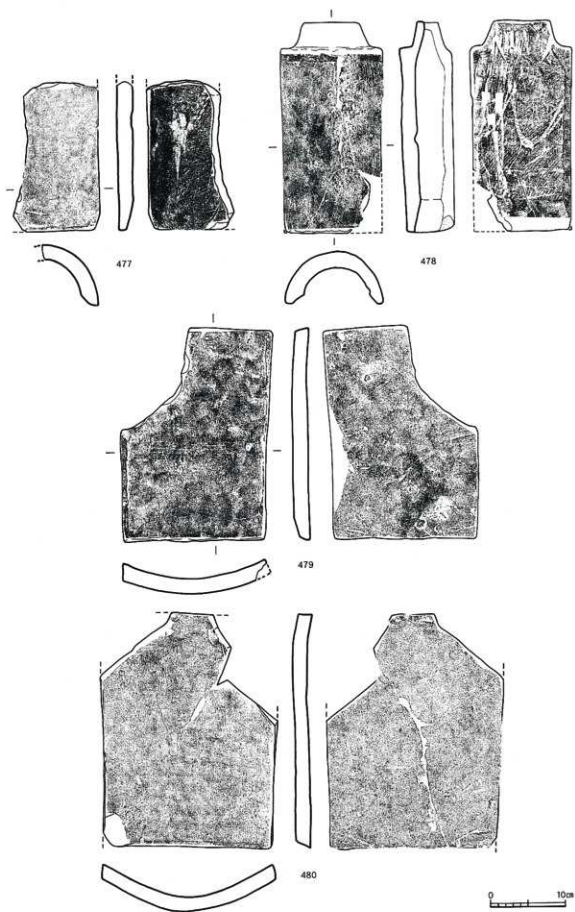
布目痕
本州タイプ
吊紐



第77図 SD044出土遺物①(1/3、1/2、1/1)



第78図 SD044出土遺物②(1/5)



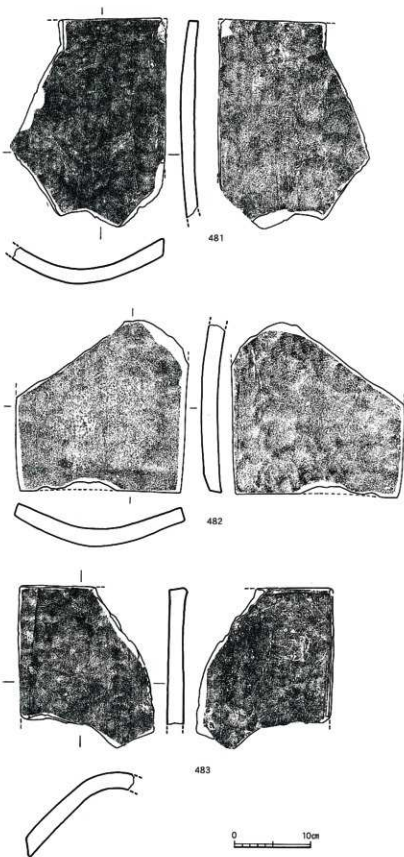
第79図 SD044出土遺物②(1/5)

コビキ痕

479～482は平瓦である。479は長さ27.6cmで、幅は下端が19.3cmであるが、上端はそれより幅広であるが不明である。厚さは2.1cmで、下端は2.0cmの幅で斜めに削られている。瓦面はコビキ痕もわずかに観察できるが、全面ナデで平滑に仕上げられている。

480は長さ31.1cmで、下端の幅は22.0cmで、上方に向かい幅広になるが不明である。厚さは2.0cmで側面は鋭く仕上げられている。瓦面は両面ともにナデで平滑に仕上げられている。

481は側面と下部を欠く資料であるが、厚さは2.0cmで、両面とも平滑にナデ仕上げされているが、表面の右上には縦方向のコビキ痕が残る。482は上部を欠くが、幅は下端で21.0cmである。厚さは2.1cmであるが、下方は2.0cmの幅で下端に向けて斜めに削られている。瓦面は平滑にナデ



第80図 SD044出土遺物⑧ (1/5)

で仕上げられている。

雁振瓦

483は瓦の横断面の角度から雁振瓦と考える。全体は不明であるが、中心ラインから急角度で折り曲げられ、側縁部の断面は鋭角的に仕上げている。厚さは2.2cmである。

銭貨

第81図は銭貨である。484は北宋の995年初鑄の「至道元寶」である。行書体で、直径2.4cmで、重さは3.7gである。裏面の孔の縁は磨滅のためか確認できない。485は北宋の1038年初鑄の篆書体による「皇宋通寶」で、直径2.5cmで重さは2.5gである。486は北宋の1086年初鑄の行書による「元祐通寶」である。直径は2.4cmで、重さは3.4gである。裏面の孔の方形の縁は狭い。

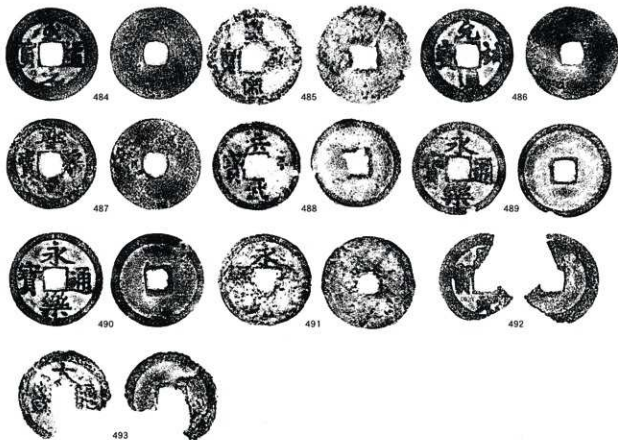
487は北宋の1101年に初鑄の行書体による「聖元元寶」である。直径は2.4cm、重さは2.6gで、方形の孔の裏面の縁は認められない。488は明の1368年初鑄の「洪武通寶」である。直径は2.3cmで、重さも2.3gである。489～491は明の1408年初鑄の「永楽通寶」である。489は直径が2.5cm、重さは2.3gで、490は直径が2.5cmで、重さは3.7gである。491は「永」の文字は明瞭に判読できるが、他の3文字を知ることは困難である。しかし、渡来銭で「永」で始まる銭貨名は「永楽通寶」のみなので、それと判断する。直径は2.4cm、重さは3.4gである。方形の孔の裏面の縁は弱く、不明瞭である。

渡来銭

492と493は一部を欠く銭貨である。492は欠けているため行書体で「〇元〇寶」しか判読でず、銭貨名は不明である。直径は2.5cmが復元できる。同じく493は「大〇通寶」としか判読できない。直径は2.5cmである。

以上が、SD044出土の主要遺物の報告であるが、中世大友府内町跡第11次調査で出土した遺物の大半がこの遺構からである。こうした、遺物や土層の堆積状況から、SD044の時期を考える。

まず、掘削時期であるが、最深部からは16世紀後半の京都系土師器が出土し、在地系土師器やロクロ目土師器がまわって出土することはなかった。また、SD044全体から見ても、出土量は極めて少ない。



第81図 SD044出土遺物⑧(1/1)

このため、掘削時期は16世紀第3四半期を遡らない頃と考える。

溝はそれ以後機能するが、土層断面図で見ると、上位に、焼土を多量に含む層が観察できる。この層は、天正14年(1586)に島津氏が府内に侵攻し、町屋を焼き払った際に生じた火災残留物を処理したものと理解されている。このため掘削後10~20年後には溝の埋立てが始まり、天正14年(1586)頃の溝はすでに、浅く細長い窪地状になっていたと想定する。

焼土層の上にはさらに土砂が堆積しており、さらに1587年以降には溝が完全に埋まっていたと考える。

SD048 (第83図)

SD048はK-6・7区でSD051の上位で検出された溝で、SD044に平行に南北に延びている。溝の形態は遺構と切合うため整然としていないが、幅約1.2m、深さ約0.6m、底幅は約0.3mで断面は緩いV字型に近い。

出土遺物は第83~86図に図示した。第83図494は、口径15.8cmで、口縁部が外反する龍泉窯系青磁碗である。495は底径7.2cmの龍泉窯系青磁の香炉で、作為の無い脚が3ヶ所に付く。496は高台径7.2cmの青花皿で、見込みに人物像、高台内側に宣徳年製の銘がある。

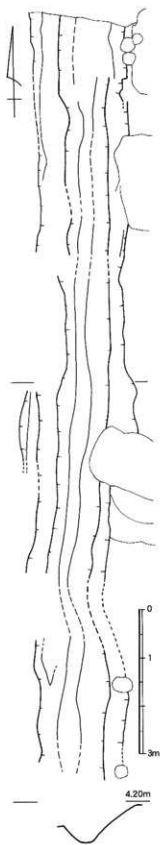
497は常滑焼の甕の口縁部である。498は常滑焼の甕の肩部で、外面には自然釉がかかっている。499は瀬戸美濃系のおろし皿で、糸切の底径は7.4cmである。500は玉縁の口縁部の備前焼の壺である。復元口径は59.8cmになる。501は口縁部が屈曲し、内外面に刷毛目調整が残る瓦質土器の土鍋である。502は厚い器壁の朝綱の小型壺で、胴部の上位に雷文が八段にわたり施文されている。503は刷毛目調整された内面に穿孔のある耳が付く鉢で、外面には2条の断面三角形の凸帯が廻る。口径は33.0cmである。504は口縁部を欠くが、胴部最大径の位置に鈎広の凸帯をめぐらせ、底部は平底である。器面は胴部下位をへら削りし、内面には刷毛目が観察される。底径は17.6cmで、頸部の径は18.8cmである。505は底径20.8cmの火鉢の底部と脚で、脚には本体の底から続く穿孔が確認できる。

第84図506は脚を持つ環で中央に穿孔があることから燗台と考える。

507は瓦質土器の播鉢で、口縁部は内側に肥厚している。口径30.4cm、底径13.2cm、器高12.0cmで、内面と内底部に7本を単位とする播り目が入れられている。

508~510は底部に糸切痕のある在地系土師質土器である。508と509は小型の環で、508は口径7.5cm、底径5.0cm、器高1.9cmで、509は口径8.0cm、底径5.6cm、器高2.0cmである。これに対し、510の環は口径13.2cm、底径9.8cm、器高3.6cmで口縁部は外反し、尖るように成形している。

511~524は口縁部内面に段や線のらせん状のロクロ目を残し、小さい底部から逆八次状に口縁部が開き、底部は糸切痕が残る形態の土師質土器で、ロクロ目土師器と呼んでいる。511~514は小型の環で、511は口径6.8cm、底径4.0cmで器高は1.8cmである。512は口径7.4cm、底径4.4cm、器高1.5cmで、513は口径7.5cm、底径4.4cm、器高1.8cmで、2点とも口縁部にスガが付き、灯明皿として使用されている。514は口径9.6cm、底径5.4cm、器高2.2cmである。



第82図 SD048実測図

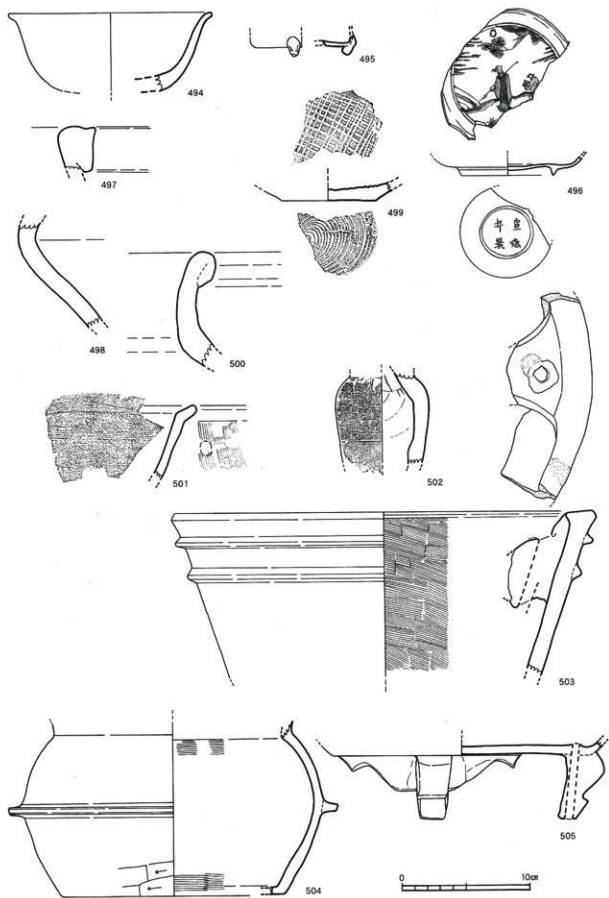
天正14年
火災残留物

龍泉窯系
青磁碗
香炉
人物像
常滑焼

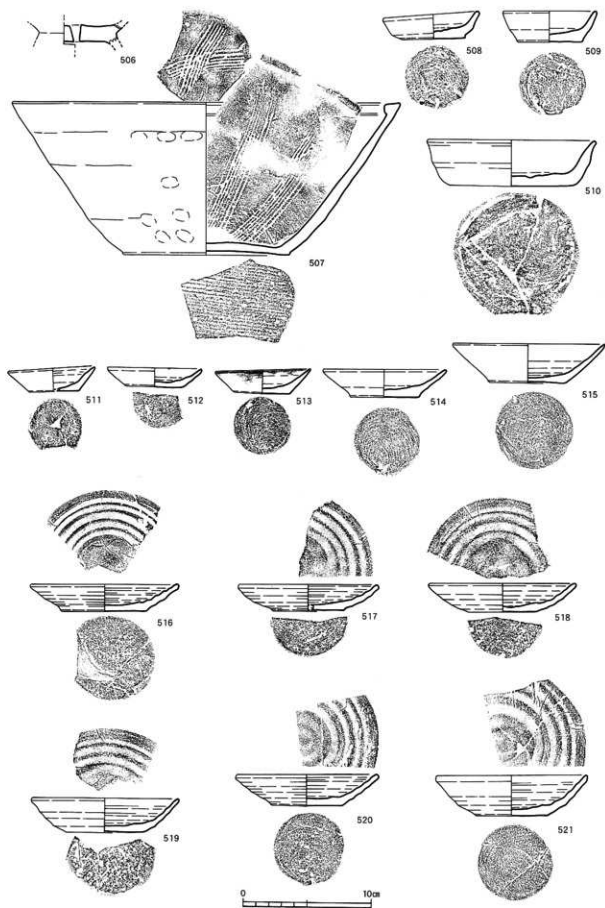
備前焼
土鍋

燗台
瓦質土器
播鉢

灯火明皿



第83図 SD048出土遺物①(1/3)



第84図 SD048出土遺物②(1/3)

515は口径12.0cm、底径6.0cm、器高3.1cmで、器面のロクロ目は顕著でない。

516～524は内面に段や凹線状のロクロ目を残す坏である。器形は胴部がやや膨らむ傾向が見える。質量は、516が口径11.6cm、底径6.8cm、器高2.1cmで、517は口径10.8cm、底径5.8cm、器高2.1cmである。518は口径11.4cm、底径5.4cm、器高2.3cmで、519は口径11.6cm、底径6.2cm、器高2.7cmである。520は口径11.0cm、底径5.5cm、器高2.5cmで、521は口径11.8cm、底径5.8cm、器高3.2cmである。522は口径11.6cm、底径7.0cm、器高2.7cmで、523は口径11.2cm、底径6.2cm、器高3.0cmである。そして524は口径12.8cm、底径6.2cm、器高3.2cmである。

銅製の釘
弁

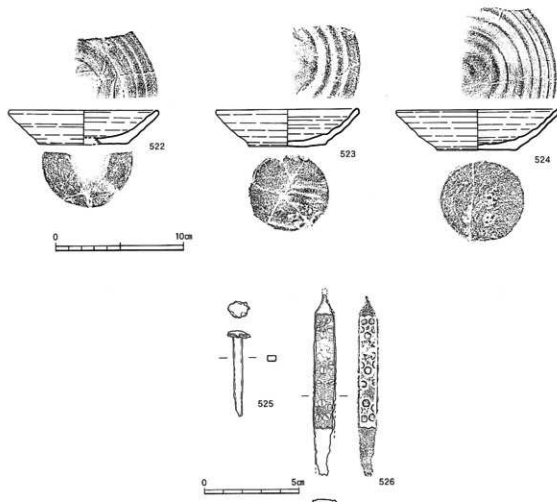
第85図は金属製品である。525は銅製の釘で、打面は直径1.0cmの円形であるが、下部の断面は0.3cm×0.4cmの長方形である。526は銅製の弁で、両端を欠く。残されている部分は長さ9.5cmで、幅1.2cm、厚さ0.2cmで、中央部の長さ6.0cmの範囲に敲打による円形の文様が入れられている。

平瓦

第86図は瓦と石造品である。527は平瓦で、下端の幅は22.4cmで、図上方ほど狭くなり、緩い台形をしている。厚さは1.8cmで、表面はへら状の工具で縦方向にナデ、平滑に仕上げている。内面も同様で、側面はへらで成形されている。528は軒平瓦である。瓦当の文様は、中央の菱形花文を中心に唐草文が左右に延びる。瓦の規格は長さ34.3cmで、瓦当部分の幅が26.5cm、欠損する図上方の幅は24.5cmが想定され、厚さは1.8cmで、中央部に直径1.1cmの釘穴がある。瓦当の幅は4.8cmで、文様の板木の幅は3.5cm、長さは26.0cmである。

五輪塔
梵字

529の石造品は五輪塔の空輪・風輪である。空輪は宝珠形に仕上げられ、最大径は15.6cmである。風輪は上位径が16.0cm、下位径が13.0cmで、側面に3カ所、東面「カ」、南面「カー」、北面「カク」の梵字が墨書されて



第85図 SD048出土遺物③(1/3、1/2)

阿蘇凝灰岩 いる。阿蘇凝灰岩製である。

以降の時期は、主体をロクロ目土器が占めることから、SD044より古く15世紀末から16世紀初頭と考える。

SD051 (第52図)

SD051はK6・7のSD048の下位で確認され、SD044にも西側を削られた状況で検出された溝である。SD044・SD048・SD051はいずれも同じ方向性を持ち、SD051→SD048→SD044の順で新しい。確認できる遺構の規模は、幅3.8m、深さ1.2mで底面の幅は約1.0あり、断面形態は逆台形である。

龍泉窯系
青磁香炉

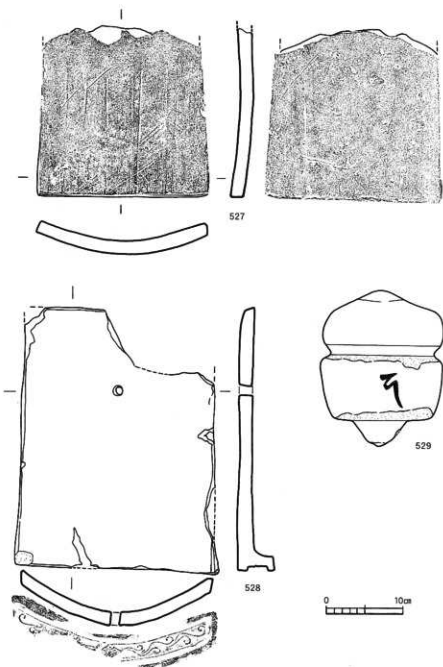
出土遺物は第87・88図に図示した。第87図530は龍泉窯系の青磁器台の一部である。

土鍋
瓦質土器

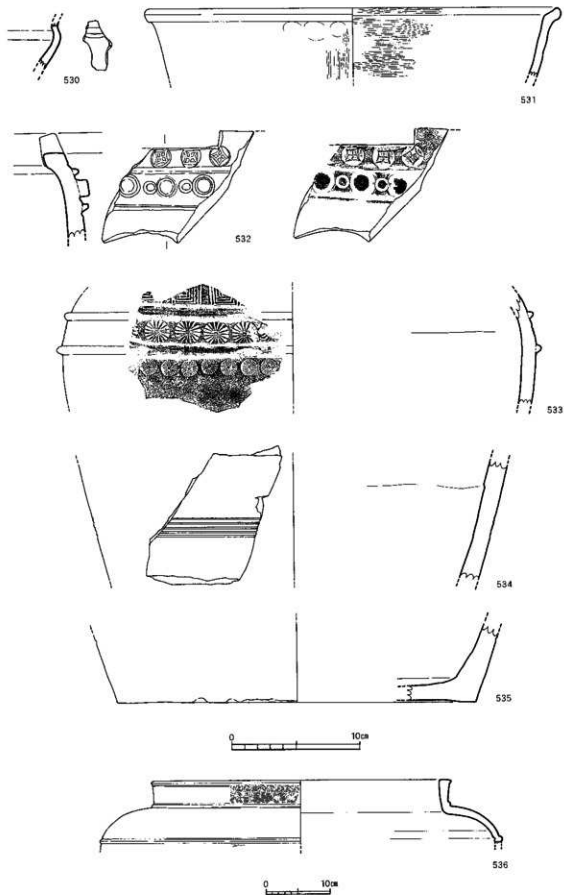
531は口縁部が屈曲する口径32.0cmの土鍋で、内面は横、外面は縦の刷毛目で器面調整している。532は瓦質土器の口縁部であるが、口唇部の突起があり、外面には二本の凸帯の間に円形の突起文や口唇部との間に菱形にした「田」の字状のスタンプが連続して押されている。

533は瓦質の壺で二条の凸帯を挟み、上から雷文・大振りの菊花文・小さい菊花文を連続して押している。

菊花文



第86図 SD048出土遺物④(1/5)

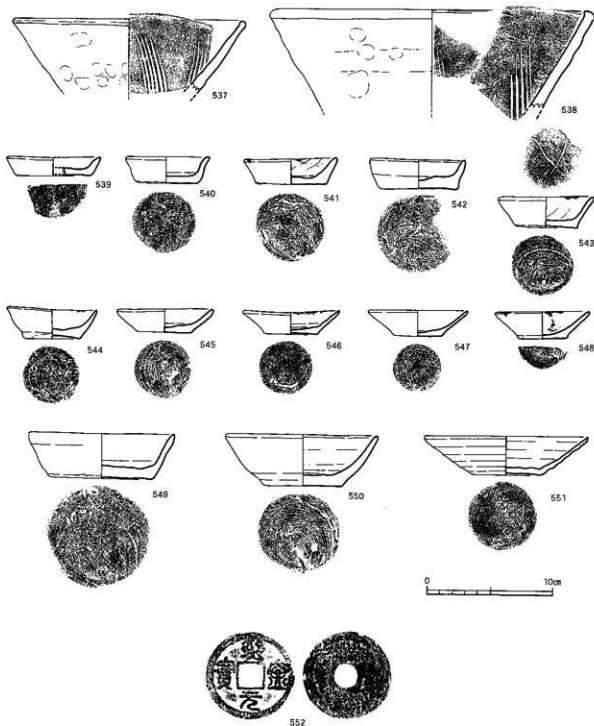


第87図 SD051出土遺物①(1/3, 1/6)

534は胴部に五葉の沈線が廻り、535の底部の径は28.1cmである。小片のため、径が不正確であり、533～535は同一個体の可能性もある。536は直立する口縁部外面に三段の雷文を施文する瓦質の風炉で、口径は44.0cmである。

瓦質土器 537・538は瓦質土器の摺鉢である。537は口径18.1cmで、6本の摺り目が入られている。538は、口径25.0cmで摺り目は5本である。

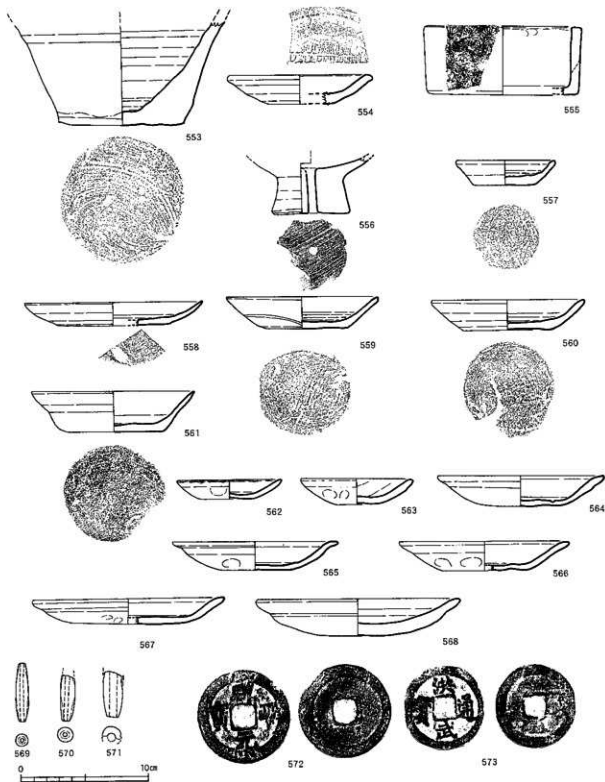
539～550は在地系土師質土器で、539～544は口径と底径の差が小さいタイプでの小坏である。



第88図 SD051出土遺物②(1/3, 1/1)

灯明皿

539は口径7.4cm、底径5.9cmで、器高は低く1.5cmである。540は口径6.5cm、底径4.9cmで、器高は2.1cmで、541は口径7.3cm、底径5.7cm、器高は2.0cmで口縁部にススが附着し、灯明皿として使用されている。542は口径7.4cm、底径6.2cm、器高2.2cmである。543と544は灯明皿として使用されており、543は口径7.4



第89図 SD053出土遺物(1/3, 1/1)

cm、底径4.9cm、器高2.4cmで、544はいびつで、口径は6.1~7.3cmで、底径は4.5cm、器高2.3cmである。この2点は次に報告する、545~548の口縁径と底径の差が大きく、逆ハの字状に口縁部が広がるタイプに近い。

灯明皿

545は口径7.5cm、底径4.3cm、器高1.8cmで、546は口径7.6cm、底径4.2cm、器高1.7cmで、口縁部にススが付き、灯明皿として使用されている。547は口径7.9cm、底径3.8cm、器高2.0cmで、548は口径7.3cm、底径3.9cm、器高2.1cmで、口縁部にススが付き、灯明皿として使用されている。

549は539~544の小皿に伴う坏で、口径11.6cm、底径8.2cm、器高3.5cmである。また、550は545~548と同形態の坏で、口径11.9cm、底径6.3cm、器高4.1cmである。551は口径13.0cm、底径5.6cm、器高3.1cmで、器面にクロク目が残る白色系土師器である。

552は北宋の1068年初鋳の篆書体の「熙寧元寶」で、直径2.3cm、重さ2.4gで、中央の孔は表が方形であるが、裏面は円形になっている。SD051の時期は、近接するSD044やSD048との切合い関係や土師質土器の形態、白色系土師質七器を含むことから、15世紀中葉と想定する。

白色系土師
質七器

SD053 (第49図)

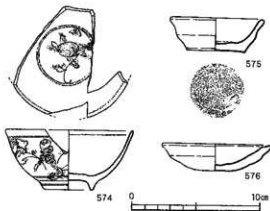
SD053はK-6・7区の東部で検出された南北方向の溝である。その規模は、長さは調査区幅である16.2m、幅1.0m、底幅0.5cmで、深さは約0.5mで断面は逆台形をしている。

出土遺物は第89図に図示した。553は内外面に緑灰釉がかかる壺の底部で、糸切底の底部径は9.8cmで貿易陶磁器である。554は口径10.6cm、底径5.0cm、器高2.3cmの瀬戸美濃系の陶製おろし皿で、見込みに格子状にヘラ切で摺り目加えられている。

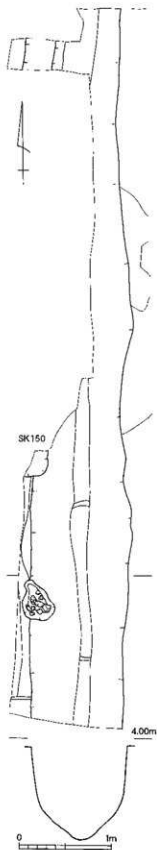
瀬戸美濃系
おろし皿

555は瓦質土器で、口径12.4cm、底径12.0cmとほぼ同じで、器高は5.4cmである。全体的に表面は剥離しているが、口縁部周辺に菊花文のスタンプが連続して押されている。556の上面径は不明であるが、底径は6.1cmで、器高は5cm以上が想定される。上面中央から底面にかけて直径0.7cmの孔が貫通している。上面が大きいが燗台と考える。

燗台



第91図 SD142出土遺物(1/3)



第90図 SD142実測図(1/40)

557～561は糸切底の在地系土師器である。557は口径7.8cmの小坏で、底径は5.0cm、器高は1.8cmである。558は精製粘土の皿である。口径は13.3cm、底径8.8cm、器高1.8cmである。559～560はロクロ目が残る土師器で、559は口径11.6cm、底径7.0cm、器高2.4cmで、560は口径11.9cm、底径7.0cm、器高2.4cmである。また、561は口縁部が屈曲して外傾する坏で、口径12.7cm、底径7.9cm、器高3.2cmである。

562～568は京都系土師器で、五法量のうち562と563が最小で、口径は562が8.3cm、563が8.4cmであり、562は灯明皿として使用されている。564～566は中位の法量で、口径は564と565が12.8cm、566は13.1cmである。また567～568は最大の法量のグループで、口径は567が15.0cm、568が15.2cmである。

569～571は紡錘形をした土罐である。569のみ完形品で、長さは4.6cm、幅1.0cmで、重さは3.3gである。他の2点の一部を欠くが、570は幅1.2cmで、581は幅1.5cmで大型である。

572～573の銭貨である。572は北宋の998年初鑄の「咸平元寶」である。直径2.4cmで、重さは2.4gである。573は明の1368年初鑄の「洪武通寶」で、直径2.1cm、重さ2.9gである。

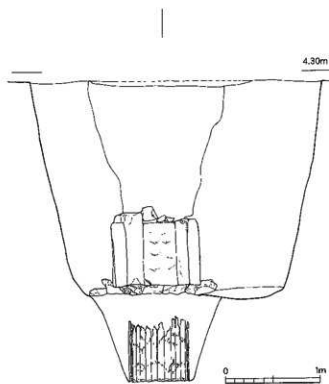
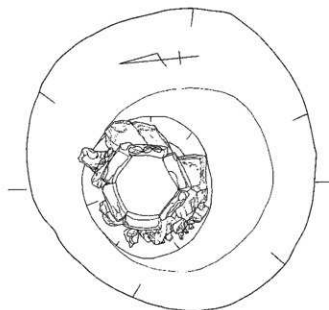
遺構の時期は、京都系土師器の形態から16世紀後半と考える。

SD142 (第90図)

SD142は6・7区の東端で検出された第2南北街路の西側沿いの溝で、唐人町との境となり、南北は隣接する80次調査区や88次調査区へ続いている。第8図Bの土層断面図に図示しているようにこの溝は第2南北街路初期の整備土層を切り込んで掘削し、その後上面は街路を版築状に整地する土砂が覆う。確認された規模は上面幅約2.0m、下面幅約0.4m、深さ0.8mで、断面形は上辺の短い逆台形状になる。

SD142からの出土遺物は少なく、図示できたものは第91図の3点である。574は口径10.0cm、高台径5.8cm、器高4.7cmで外面と見込みに青花の文様が描かれている。小野編年の染付碗E群にあたる。575は口径7.4cm、底径4.7cm、器高2.6cmの在地系土師質土器の小坏である。576は口径8.6cm、器高2.1cmの京都系土師器である。

青花
在 地 系 土 師
京 都 系 土 師
染 付 碗 E 群



第92図 SE011実測図(1/40)

E群が出土することや、遺構の切合いから16世紀中葉と考える。

(3) 井戸

SD011 (第92図)

SE011は南東部のL-7区で検出された井戸である。構造は、上面径約3.0mの円形の穴を掘り、水源を確認後、直径60cmの桶をかぶせて水溜りとし、桶の上面に花弁状に扁平な凝灰岩を並べる。その上に、凝灰岩の方形な切石を平面形が六角形になるように立て、井筒としている。その石材の大きさは、長さ70cm～90cm、幅35～40cm、厚さ10cmで、組み立てた時に内面が円形になるように、内面がカーブしている。

この井戸は、使用廃止後、井筒の石材が抜き取られ、最下段のみ残っていた。さらに抜き取り後の埋立ての際には川原石等を廃棄する場所として使われている。

龍泉窯系青磁

出土遺物は第94図に図示した。577は高台径5.2cmの龍泉窯系青磁碗である。578は注口部のある陶器で、明灰緑色をした釉が外面にかけられている。579は口径5.0cmで外面に黒褐色の釉がかかる薄手の壺で、肩衝形の茶入れと考えられる。

茶入れ

備前焼播鉢

580～583は備前焼である。580は口径26.8cmの口縁部断面が三角形になる播鉢である。内面は6条の櫛歯による掘り目が内底部に向けて放射状に入れられている。581～583は大型の甕の口縁部とその周辺である。581・582の口縁部は玉縁が発達し、幅広になり、外面に凹線がある。583の肩部には「式」の文字と考えるヘラ掘きがあり、「式石入」甕の可能性が高い。

「式石入」

六角形花瓶

584・585は瓦質土器で、胴部が六角形をした花瓶と考える。胴部には中心に十字をいれた魚甲文を組み合わせた文様が押捺されている。

三つ巴文
珠文

586～588は瓦類である。586は軒丸瓦で、瓦当は直径14.0cmで、文様は三つ巴文と珠文で構成されている。587・588は井戸の上位の廃棄遺物の中から検出された鬼瓦である。中央に鬼面を配し、両側に直径2.5cmの竹管状の円形刺突で固んでいる。大きさは上位で横28cmである。鬼の両眼の部分には金箔が貼られた痕跡が認められる(巻頭カラー参照)。588も鬼瓦の一部と考える。

鬼の両眼に
金箔貼り

遺構の時期は備前焼の大甕の形態から、廃絶時期は16世紀後葉～末と考える。

SE071 (第95図)

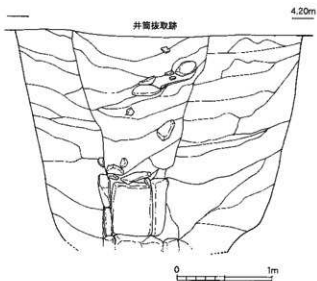
SE071・SE086・SE133はL-K-7区で検出された井戸で、ほぼ同じ場所にくりかえし構築されている。

SE071はSE086・SE133から掘削を受けているため、井筒部分は不明である。しかし、掘り返されたためか、掘り込みは直径5.0m以上ある。しかも播鉢状になっており、検出面からの深さは2.1mである。旧状を残すのは下部のみであるが、掘り込み径は最深部で、直径2.0mであるが、井筒などの構造は不明である。

SE071から出土した遺物は第97図に図示した。589は口縁部に白色粘土を象嵌した高台青磁の碗である。590・591は龍泉窯系青磁碗である。590は高台径5.6cmで、見込みと高台内側が露胎になっている。591は見込みに花の

高台青磁

龍泉窯系青磁



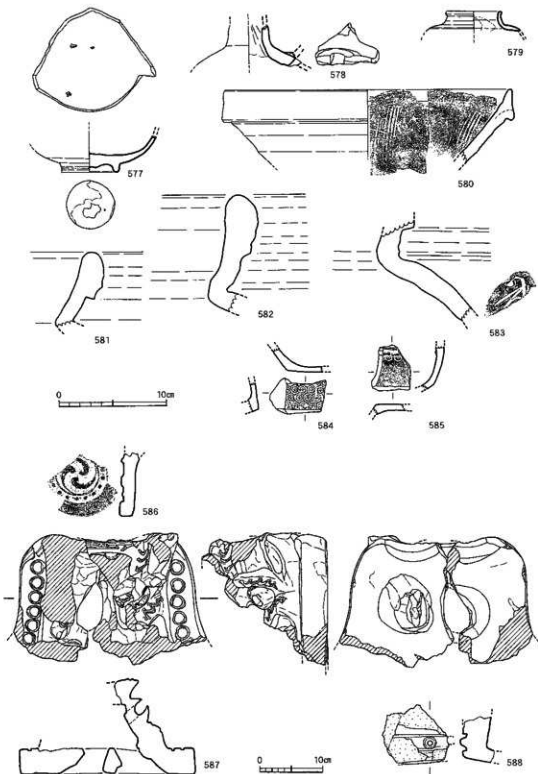
第93図 SE011土層断面実測図(1/40)

印文がスタンプされている。高台径5.2cmで、内側は露胎である。

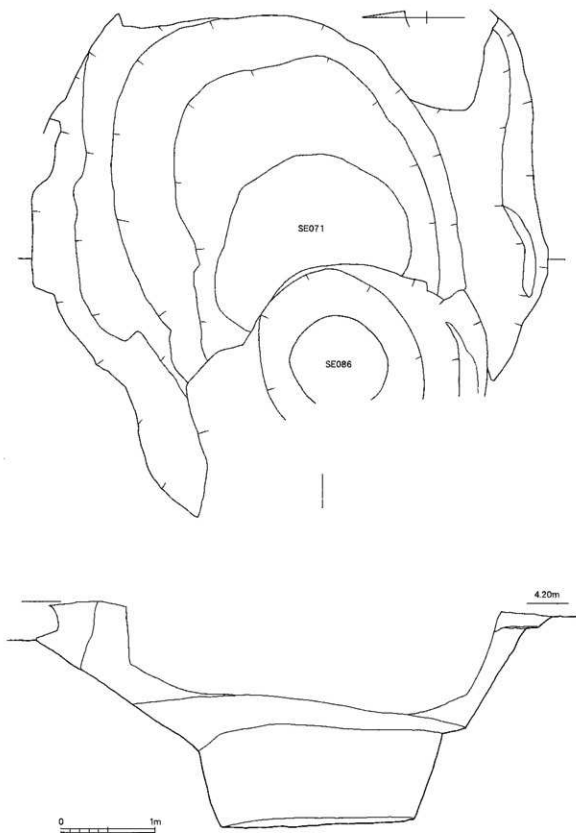
備前焼
菊花文
雷文

592は口縁端部を外側に折り返し、玉縁を形成している。備前焼の甕である。

593～598は瓦質土器で、593は直立する口縁部の外側に菊花文のスタンプが連続して施文されている。594は口縁部が直立する鉢で、口縁外端部が外に突出し、その下位に雷文が途切れることなく押



第94図 SE011出土遺物(1/3, 1/6)

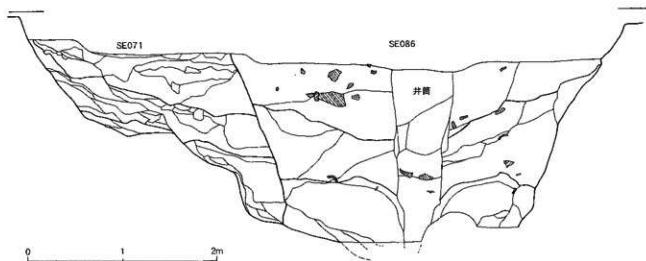


第95図 SE071実測図(1/40)

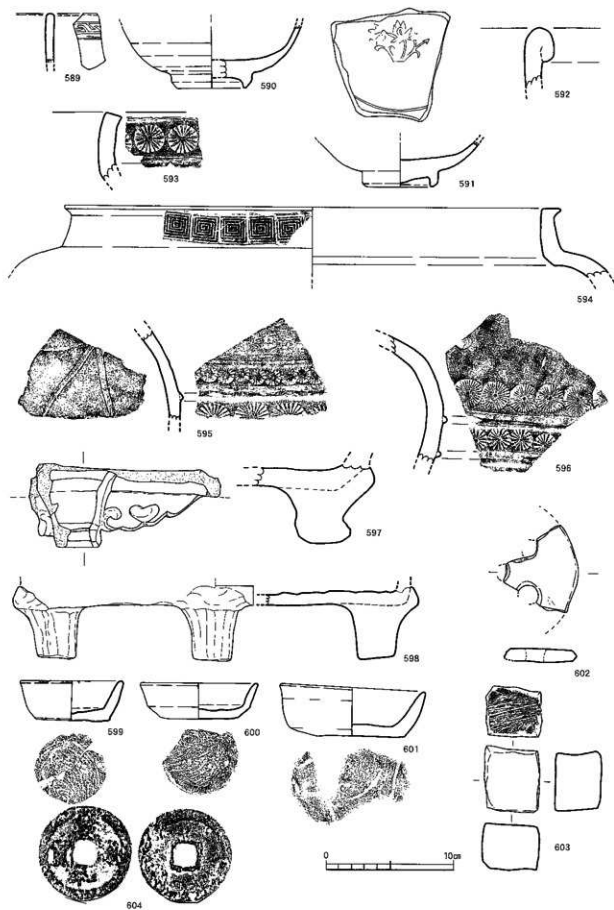
- 菊花纹
 獣蹄
 捺されている。595と596は同一個体の可能性がある資料で、胴部に凸帯が数条めぐり、それを文様区分帯として、大・小の菊花纹を連続して横方向に押捺している。597は鉢の底部と脚で、獣蹄を簡略化している。さらに598は、接地面が直径3.0cmの棒状の脚が付く鉢である。3ヵ所と想定する。
- 灯明皿
 599～601は在地系土師質土器の坏である。599は口径8.0cmで、底径5.6cm、器高3.1cmで、口縁部周辺にススが付着し、灯明皿としても使用されている。600は口径9.6cm、底径6.3cm、器高2.8cmで、口縁部は緩く外反する。601は口径11.5cm、底径9.0cm、器高3.6cmで、口縁部は底部近くの器壁が厚く、端部に向けて尖るように成形されている。
- 天草石 砥石
 602は土製品で、厚さ1.0cm、直径約12.0cmの円盤の中心に直径1.8cmの孔を開け、さらにその周辺に直径1.5cmの孔を6ヵ所開けている。
- 銭貨
 603は長さ5.2cm、幅4.3cm、厚さ3.6cmの天草石の砥石である。擦痕のある面以外は割れた面であり、砥石の破片である。
- 604の銭貨は北宋の1111年初鋳の真書体による「政和通寶」である。直径は2.5cmで、重さは2.2gである。
- 遺構の時期は、599～601の在地系土師質土器の形態から、14世紀末から15世紀前半と考える。

SE086 (第98図)

- SE086はSE071の西側半分に切りこんだ井戸である。上面は直径約4.0mで堀堀め、深さ2.3mで直径2.3の大ききになり、その面の中心部に直径1.3m、深さ0.8m、底面径0.7mの穴を掘り、そこで水源を得たようで、そこに直径0.6mの底板を抜いた結桶を逆さにたてて、水溜りとしている。さらに、この井戸は、周辺を土砂で固めながら結桶を重ね、五段以上積み上げながら、井筒としている。土層断面には掘り返しの痕跡はなく、廃絶後、井筒が1.3m埋まった後に川原石などの廃棄場所とし、遺物も多く出土している。なお、井戸廃棄に関連すると考えられる祭祀行為は確認できなかった。
- 出土遺物は第99～102図に図示した。第99図605は内面に花文、外面は口縁部に雷文、その下位に連弁文のある碗で、龍泉窯系青磁である。606は高台径4.5cmで、高台から内側は露胎となった龍泉窯系青磁碗である。607は高台径5.4cmで、見込みに印花文がある。608は口径6.4cmの青磁で、香炉の可能性が強い。609は底径2.6cmの八角坏で、高台の内側に青花による文様がある。610と611は天目茶碗で、610の口縁部は端部のそりが顕著ではなく、611の底径は3.6cmで、内ぞり高台となっている。2点とも



第96図 SE071・086土層断面図(1/40)

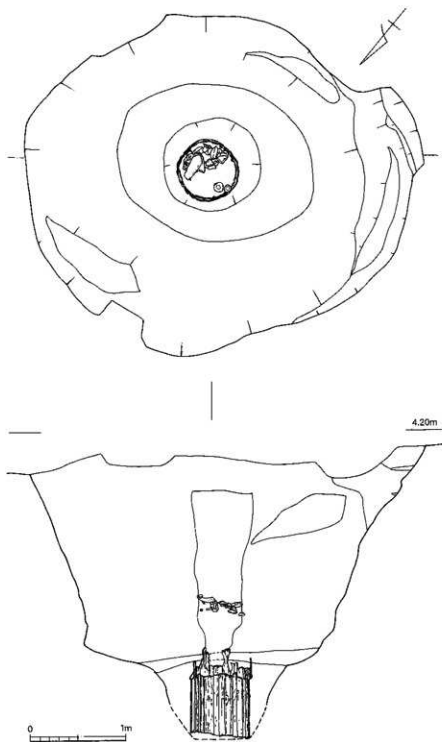


第97図 SE071出土遺物(1/3)

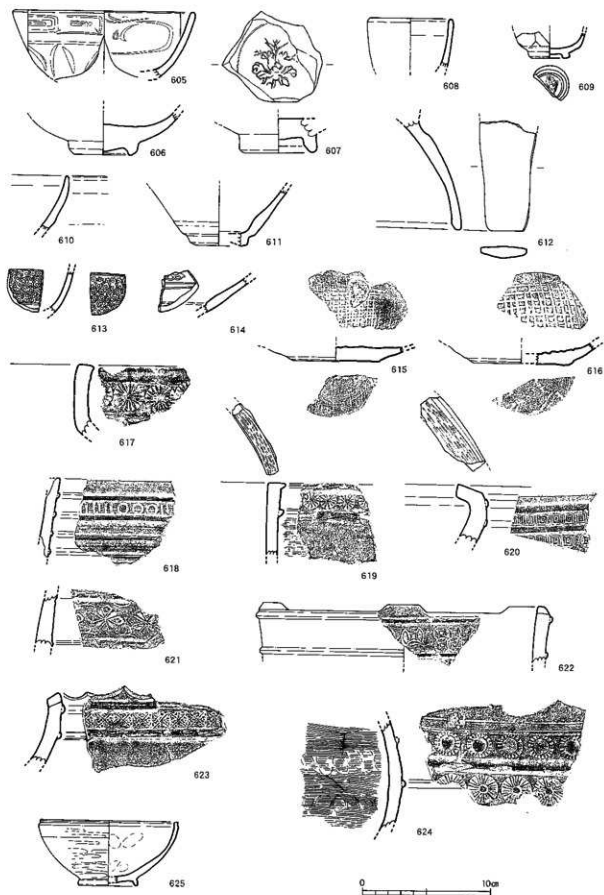
印文
 朝鮮王朝
 おろし皿
 瀬戸美濃系

中国陶磁である。612は上部幅が4.0cmで下位幅が3.5cm、厚さは紡錘形の断面の最大部で1.0cmの貿易陶磁器資料である。脚であろうか。613・614は印文や線彫りされた中に白色粘土を充填した象嵌青磁で、朝鮮王朝製である。

615・616はおろし皿で、見込みに部分にヘラで、格子状に掘り目を刻んでいる。糸切底で仕上げている底径は615が6.6cm、616が7.6cmで、瀬戸美濃系である。



第98図 SE086実測図(1/40)



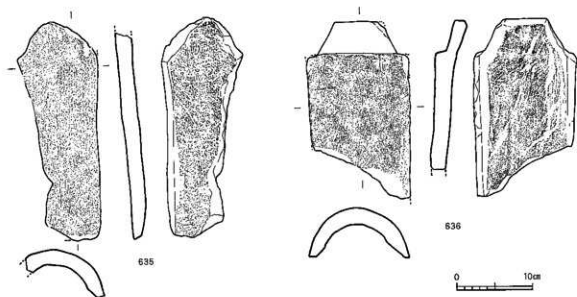
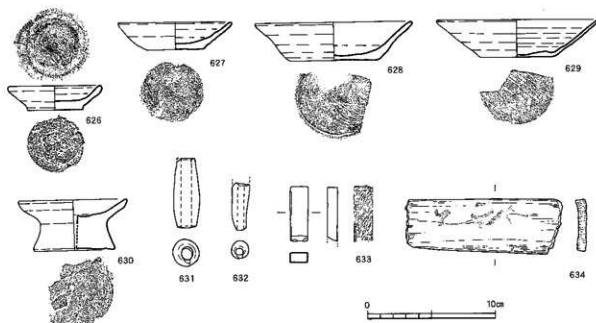
第99図 SE086出土遺物①(1/3)

菊花文 617～625は瓦質土器である。617は口縁部が直立する器形で、外面にスタンプによる菊花文が連続して施文されている。618は口縁部の内端部を欠く資料である。直口する口縁部外側に平行に凸帯が四条貼り付けられ、一番上位の凸帯間に竹管刺突文や短線文を入れている。619は直口する口縁部の外端部を突出させ、その下に凸帯を一条廻らせて文様帯を確保し、スタンプによる菊花文で埋めている。618・619は火鉢の可能性はある。

火鉢

雷文

620は口縁部が内湾する器形である。文様は、内湾する屈曲部外面に二条の扁平な平行凸帯文を廻らせ、その間や周辺に雷文を途切れることなく、連続的に押捺している。621は胴部の資料であるが、二条の平行沈線の間を菱形基調の花びら文のスタンプが押されている。622は、直口する口縁部の口径は23.0cmで、L唇部に突起が付く。外面には二条の凸帯が廻り、その間を文様で埋めて



第100図 SE086出土遺物②(1/3, 1/5)

輪花状 いる。623は緩く内湾する口縁部で、口唇部は輪花状に突起する。文様は口縁部外面に二条の凸帯
 四方禪文 が廻り、その間を四方禪文に類似したスタンプが押捺されている。624は胴部の資料で、内面には横
 菊花文 方向の刷毛目があるが、外面は平行する二条の凸帯が廻り、その間や周辺に菊花文や類似する花文
 が押捺されている。

瓦質土器 625は瓦質土器の碗である。口径10.4cm、高台径4.4cm、器高5.1cmで、器面は内面ナデであるが、
 外面は横方向のヘラ磨きである。

第100図626～628は在地系土質土器である。626は小杯で、口径7.2cm、底径4.4cm、器高1.7cm
 で、底部の器壁は厚い。627は口径8.8cm、底径4.5cm、器高2.1cmで、胴部の底部近くは丸みを帯び
 ている。628は口径12.3cm、底径7.0cm、器高3.0cmで、口縁部は緩く屈曲し外反する。

629は口径12.7cm、底径5.8cm、器高2.9cmで、底部は糸切の後、板目状圧痕がついている。器壁は
 薄く、白色系土器である。

630の上面は皿状に周辺部が立ち上がり、径は8.3cmで、底面径6.2cm、器高4.0cmである。上面の
 中央部から底面にかけて芯棒を立てたと想定する0.7cmの孔が貫通している。燭台と考える。

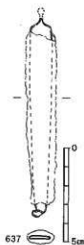
631～632は紡錘形形の土鏝である。631は長さ5.5cm、幅2.1cm、重さ23.3gであり、632は一部を
 欠くが、幅は1.4cmである。

赤間石 633は赤間石の砥石である。一部を欠くが長さは4.3cmで、断面形は1.4cm
 ×0.8cmの長方形で、全面に使用痕が付く。

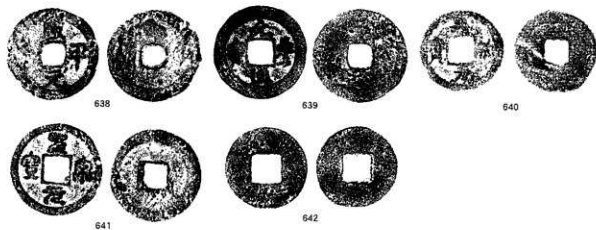
634は一部を欠く板材で、残された大きさは、幅4.2cm、長さ12.3cm、厚
 さ0.6cmである。表面には判読不明であるが、墨書文字のようなものが残さ
 れている。

637は青銅製の筭である。上端部を欠き、下端部は折れ曲がっている。
 全体に細かい砂が付着しているため、表面の状態は不明である。残された
 部分は、長さは10.4cmで、幅は1.2cm、厚さ0.1cmである。

635・636は丸瓦である。635は、表面が縄目叩きで、ナデは少なく縄目
 が残る。内面は布目が残る。側縁はヘラ撫でて調整されている。636は長
 さ3.8cmの玉縁を含む資料である。幅は13.4cmで、厚さは2.7cmである。表
 面は縄目叩きの後に縦方向のヘラ撫で、内面は斜目方向のコビキ痕が残り、
 さらに布目が付くき、側縁はヘラ撫でて仕上げられている。



第101図
 SE086出土遺物③(1/2)



第102図 SE086出土遺物④(1/1)

銭貨

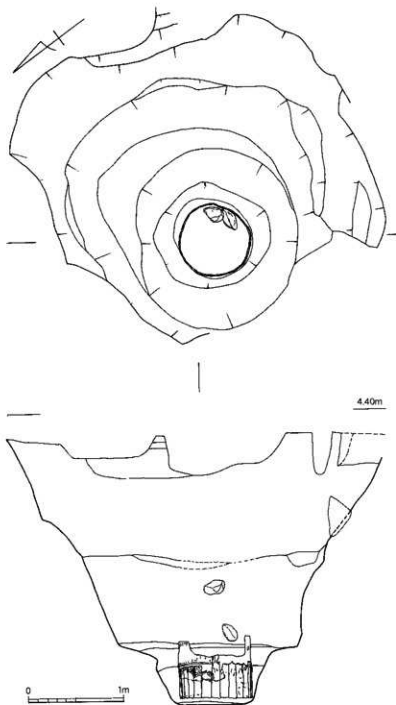
638～642は銭貨である。638は北宋の998年初鑄の「咸平元寶」で、直径2.4cm、重さ2.7gである。639は北宋の1078年初鑄の行書体の「元豐通寶」で、直径2.5cm、重さ3.2gである。640は北宋の1054年初鑄の真書体の「嘉祐元寶」で、直径2.2cm、重さ2.2gである。641は北宋の1101年初鑄の篆書体の「聖元元寶」で、直径2.4cm、重さ2.8gである。642は本邦製の無文銭で、直径2.2cm、重さ2.2gで、中央の孔は一辺0.8cmの方形である。

遺構の時期は、在地系上飾器や白色系上飾器の存在で、15世紀中葉と考える。

SE133 (第103図)

SE133はSE071の東端に掘り込まれた井戸で、上面は径4.0mで掘り下げ、法面は斜めになり、深さ2.3mの位置で、直径約2.0mの平坦部をつくる。さらに中央部を直径1.2m、深さ0.6m、底面径0.8m掘り下げ、水源を確保し、直径70cmの結桶を底を抜いて被せて水溜りとしている。その後、結桶を積み重ねながら周りを土砂で埋め、井筒を構築している。断面を見ると、深さ1.3mの位置まで大きく乱れており、結桶の抜き取りが行われた可能性が強い。

出土遺物は小片が多く、2点を第104図に図示した。643は備前焼の大甕の底部で、底径は44cmで、底部から上方に向けてヘラで削り調整をしている。また底面は粗い条痕で平滑に仕上げている。644は瓦質土器の底部で、内面は横方向と斜め方向の刷毛目付き、外面はヘラ磨きされて



第103図 SE133実測図(1/40)

備前焼大甕

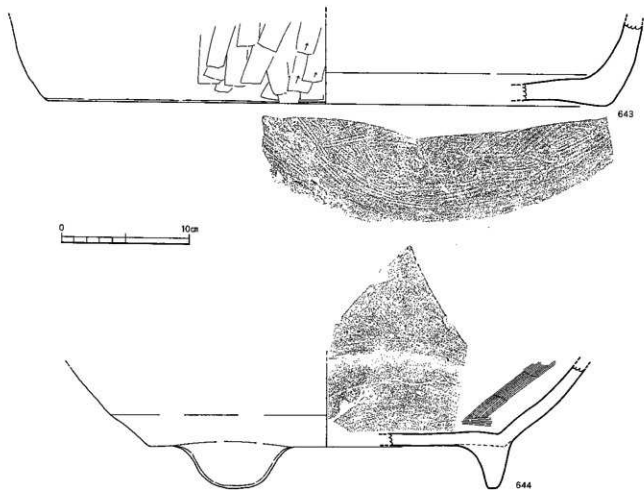
瓦質土器

いる。脚は3カ所付き、底径は28.0cmである。

備前焼大甕 遺構の時期は、小片であるが京都系上師器が出土していることや、643の備前焼大甕の存在から16世紀後半と考える。

SE152

SE152は調査区の西北端で検出された井戸で、街路を形成する版築状の土砂を除去した後に、検出された。検出された遺構の直径は約4.0mあるが、半分は北側の調査範囲外になり、掘り込みが深いことから十分な調査ができなかった。



第104図 SE133出土遺物(1/3)

(4) 街路・側溝

SF140 (第105・106・109・110・112・113・115~119図)

版築状

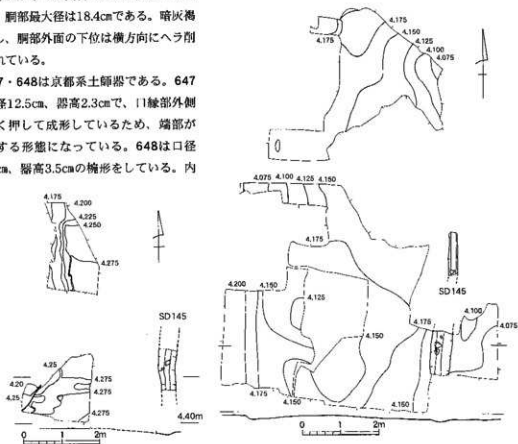
11面の硬化
面側溝朝鮮王朝
備前焼

輪形

調査区西端で検出された第2南北街路の上面は、攪乱されている部分も多いが、幅約7.0mの範囲に砂層が広がり、南北に隣接する両調査区へと続いていることが確認された。また、攪乱部分の土層断面を確認すると、版築状になっており、路面と想定できる硬化面が形成されていることが判明した。そこで、上面から路面と想定される硬化面を探りながら掘り下げを行った。その結果、第8図Bに図示したように11面の硬化面とそれに伴う側溝を確認した。しかし、いずれの面も街路面全体に広がるものではなく、しかも攪乱部分が多いため、部分的なものが多い。

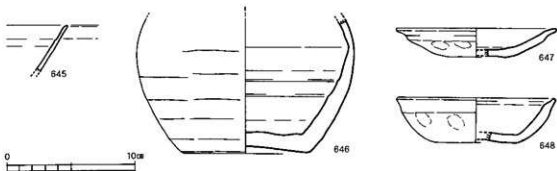
第107図に図示した遺物は、第2南北街路であるSF140を検出する作業中に上面から出土したものである。645は透明釉のかかった陶器の碗で、朝鮮王朝陶磁である。646は備前焼の壺で、底部から胴部にかけての資料である。底径は10.0cmで、胴部最大径は18.4cmである。暗灰褐色をし、胴部外面の下部は横方向にヘラ削りされている。

647・648は京都系土師器である。647は口径12.5cm、器高2.3cmで、口縁部外側を強く押して成形しているため、端部が外反する形態になっている。648は口径12.4cm、器高3.5cmの輪形をしている。内



第105図 SF140 1面実測図(1/100)

第106図 SF140 2面実測図(1/100)



第107図 SF140上面出土遺物(1/3)

面の底部と胴部の境を強く押して成形するため、凹線が廻る。また、口縁部内側も強く押しているため、口唇部内側断面は窪む。

SF140 第1面 (第105図)

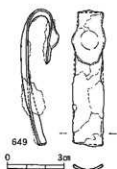
第1面は南端の狭い範囲で検出された面で、幅40cm、深さが10cmの側溝SD134・145を攪乱層に挟まれた状態で1.0m確認した。

SF140 第2面 (第106図)

第1面で確認された側溝はこの面でも確認され、さらに北に1.2m離れた位置で、延長と思われる焼土を多く含む側溝SD134・145を1.2m検出した。

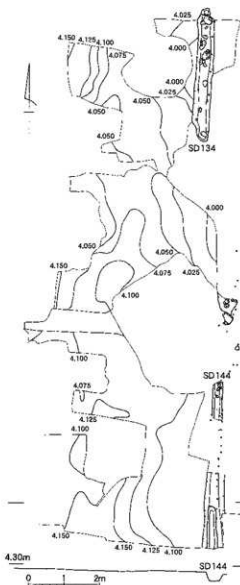
SF140 第3面 (第109図)

街路部分のほぼ全面で確認された。北端でも3.3m検出した溝も第1面で観察されたSD134の延長と考える。

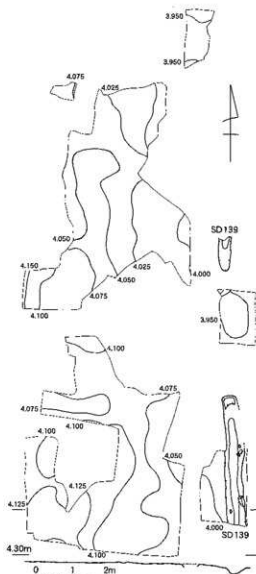


第108図 SF145出土遺物(1/2)

側溝



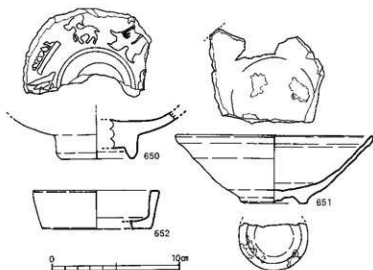
第109図 SF140 3面実測図(1/100)



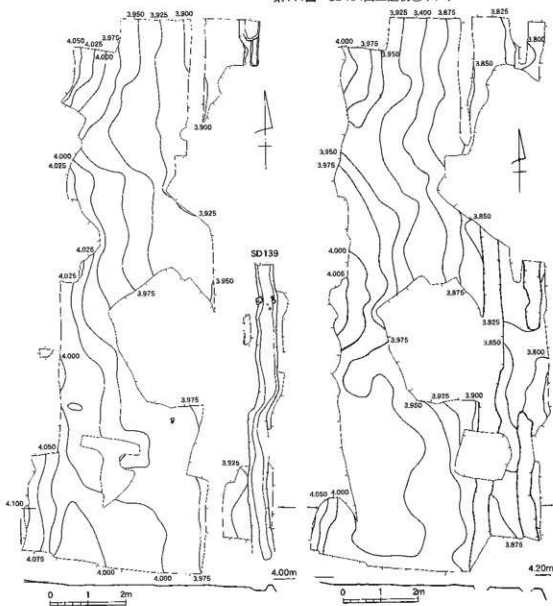
第110図 SF140 4面実測図(1/100)

街路に伴う側溝は、ほぼ同じ場所で掘削された二条を検出し、上部をSD145、下部をSD134とした。いずれも焼土や炭化物を多く含み、街路最終段階の側溝と考え、島津氏侵攻時の火災に起因すると考える。

第108図649は第1面で検出したSD145からの出土である。断面が浅いU字状になる曲げられ、幅1.0cm、厚さ0.1cmで、伸ばした長さは



第110図 SD134出土遺物①(1/3)



第112図 SF140 5面実測図(1/100)

第113図 SF140 6面実測図(1/100)

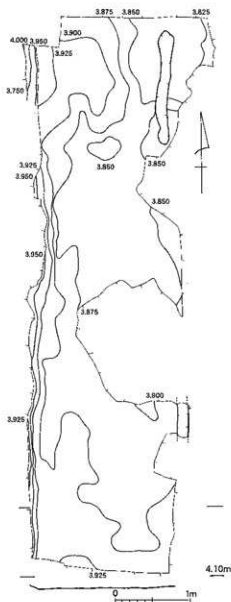
青銅製品 約10cmを想定する。曲がった短い方先端がふくらみ、スプーン状になる。青銅製品である。

SD134は第2面から第3面まで確認された街路側溝である。出土遺物は第111・120図に図示した。

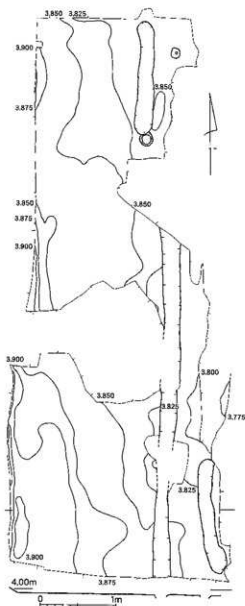
龍泉窯系 第111図650は高台径6.4cmで、見込みには動物や人物の印刻がありその上に青磁釉がかかる龍泉窯系の人形手である。651は口径15.8cm、高台径5.4cm、器高5.3cmで、色調は軸が灰白色、胎土が橙褐色をしている。朝鮮王朝陶磁で高台の内側は兜巾を形成している。目跡は、見込みと奥付に4カ所が



第114図 SD134出土遺物(1/3, 1/1)



第115図 SF140 7面実測図(1/100)



第116図 SF140 8面実測図(1/100)

想定できる。652は、口径10.0cm、底径8.6cm、器高3.0cmの小型の瓦質土器の鉢である。

雁振瓦

第120図686は玉縁を持つ雁振瓦で、玉縁部4.0cmを含む長さは32.0cm、幅24.9cm、厚さは2.3cmである。ナデで平滑に仕上げられているが、玉縁には布目が残る。

SF140 第4面 (第110図)

第4面も街路部分のほぼ全面で検出されたが、1～3面で認められた側溝は無く、その位置より東に約1.0m離れた位置で、焼土を含まない埋土の側溝SD139・144を約3.5m確認した。SD139とした。すなわち第4面から第3面に移る際に、街路幅が約1.0m狭くなったと考えられる。

SF140 第5面 (第112図)

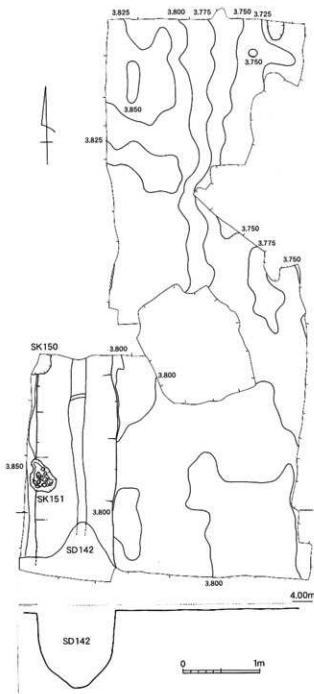
第5面になると、SD139はさらに明確になり、攪乱層の部分を除き、調査区の北端から南端まで確認できる。

SF140 第6・7・8・9面 (第113・115～117図)

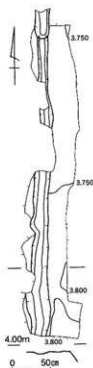
第6面においては、SD139は明瞭さを欠き、第7面では痕跡が確認できるが、第8面では不明瞭となる。そして最下面に近い第9面になると、街路西側ですでに報告したSD142の唐人町との境の南北溝が現れてくる。

SF140 第10・11面 (第118・119図)

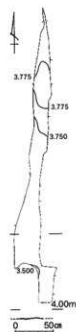
硬化面として確認した第10面は



第117図 SF140 9面実測図(1/100)



第118図
SF140 10面実測図
(1/100)



第119図
SF140 11面実測図
(1/100)

SD044の西沿いのわずかな範囲であったが、それでも幅40cm、深さ約5cmの街路側溝を検出した。さらに、その下位でも範囲を狭くしながら、硬化面を検出し、第11面とした。

SD139は第4面から第6面で観察された街路側溝出土遺物である。出土遺物は第114図に図示した。灯明皿 653は口径8.3cm、器高1.8cmで、口縁部にスガが付き、灯明皿として使用されている。654の銭貨は、北宋の1101年初鑄の篆書体による「聖宋元寶」で、直径2.5cm、重さ2.5cmである。

SF140出土遺物 (第121・122図)

図示した遺物は、版築状に構築された街路を掘り下げる途中で出土したもので、特に街路面ごとの取り上げは出来なかった。

青花文

唐草文

景德鎮系

染付皿E群

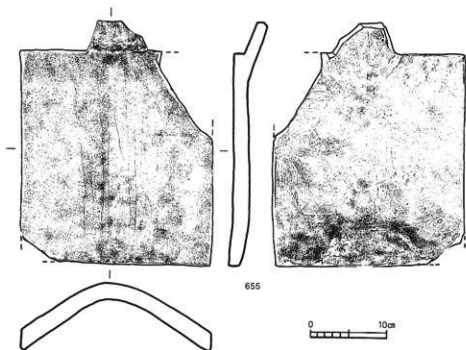
朝鮮王朝

第121図は、656～661は青花文様で装飾された磁器である。656～659は小杯である。656の口縁部は外反し、口径7.0cmである。外面には唐草文が描かれている。657は胴部が直立し、口縁部が外反する形態で、口径は5.4cmである。外面に唐草文が描かれている。658は口径5.8cmで、外面には雲文が描かれ、内面には口縁部と見込みに圓線を廻らしている。659は高台径2.8cmで、高台内側には「宣徳年造」の銘が記されている。以上4点は、景德鎮系である。

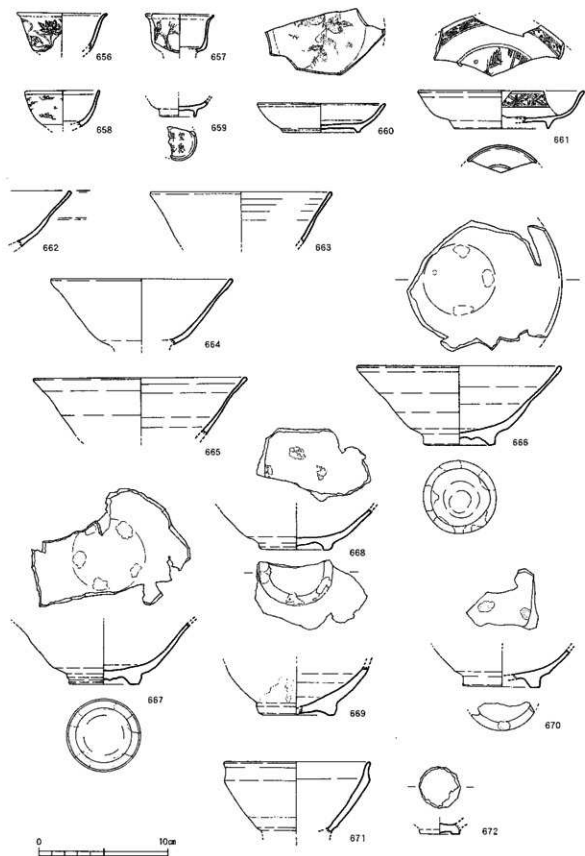
660は口径10.0cm、高台径6.0cm、器高2.3cmで外面の文様は不明であるが、見込みに唐草文が、背が描かれている。また、661は口径13.0cm、高台径7.4cm、器高3.0cmで、外面に文様がないが、内面口縁部に四方博文が、見込みにも文様が描かれている。小野編年の染付皿E群である。

662～670は朝鮮王朝陶磁の茶碗である。662・663は器壁が薄く、透明軸がかかり、灰白色をしている。663の口径は14.2cmである。664も口径14.2cmであるが、胴部は下位が膨らむように成形している。色調も透明軸がかかり、灰白色をしている。SD044出土資料と接合する。665の口縁部は直線的に開く。口径は16.2cmで、色調は透明軸がかかり、淡橙褐色をしている。

666は全形を知ることができる資料である。胴部は下位がふくらみ、口縁部は直線的に開く。色調は透明軸がかかり、淡橙褐色をしている。目跡は、見込みに4カ所、高台に5ヶ所確認できる。口



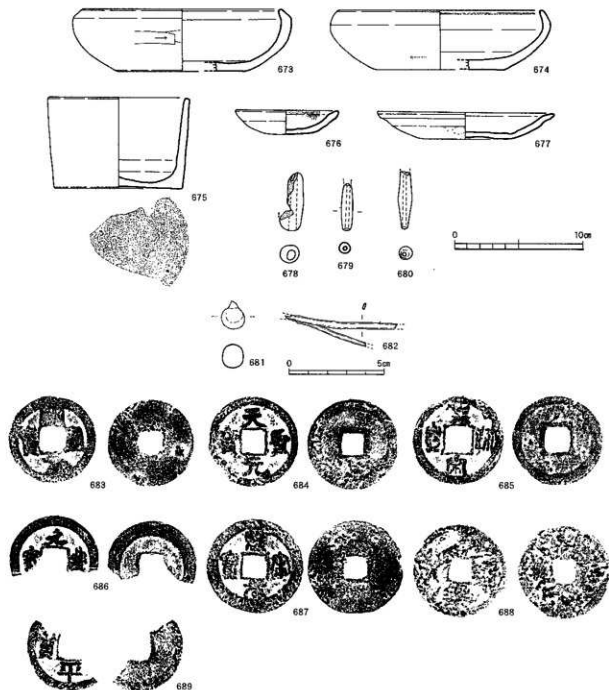
第120図 SD134出土遺物(1/5)



第121圖 SF140出土遺物①(1/3)

蕎麦茶碗 径は15.6cm、高台径は5.6cm、器高6.2cmである。蕎麦茶碗の系統と考える。

667～670は底部から胴部にかけての資料である。667は断面が逆台形になる高台が付き、高台外端部の径は5.5cmである。高台内側は兜巾を形成し、胴部下位はふくらみ、口縁部は緩く外反する。色調は灰褐色で、目跡は見込みと高台に畳付にはば等間隔で5ヶ所付けられている。668の資料は底部が半分である。胴部は下位でふくらみ、色調は灰白色と黄橙色が見られる。高台径は5.3cmで兜巾を形成する。見込みと畳付に付く目跡は、残された部位から想定すると5ヶ所と考える。669は低い高台が付く碗で、高台径は6.0cmである。器面の釉は内外面とも剥離し、淡褐色をしている。目跡も観察されず、他の茶碗



第122図 SF140出土遺物②(1/3, 1/2, 1/1)

- 茶碗 と異なる。670は断面逆台形の高台が廻る茶碗で、径は6.0cmである。胴部下位はふくらみ、橙褐色をしている。目録は残された部分から、壺付と見込みで5~6カ所付くと考える。
- 瀬戸美濃系
天目 671は口径11.4cmの瀬戸美濃系の天目茶碗である。器面は底部周辺以外に暗褐色を発色する釉が厚かかっている。672の底部も瀬戸美濃窯系の天目茶碗で、内面の釉は黒褐色に発色する釉で、外面は露胎となっている。底径は3.2cmの輪高台で、周辺を打ち欠き、円盤状の製品として仕上げている。
- 輪高台
- 備前焼鉢 673・674は口縁部が大きく内湾する備前焼の鉢である。器面は全面をナデで仕上げているが、外面の中位から底部にかけてヘラ削りの痕跡がある。675は、口径15.4cm、底径10.0cm、器高4.9cmである。口縁部は肥厚し、外面を平坦にして端部が尖るように成形している。色調は暗赤茶色をしている。674は口径16.0cm、底径10.0cm、器高4.7cmで、口縁部の器壁は均一で、端部は丸く仕上げている。暗赤色をしている。
- 筒形備前鉢 675は筒形をした備前焼である。口径11.0cm、底径10.0cm、器高7.2cmで、器面はナデ仕上げであるが、底部周辺はヘラ削り痕が残る。また、底面中央にはヘラ記号がある。さらに器面の状態は、口縁部外面と底部内側には自然釉がかり。色調は暗紫色である。
- 灯明皿 676・677は京都系土師器である。676は口径8.1cm、器高1.9cmで、口縁部はやや肥厚する。また、内面にはスガが付着しており、灯明皿として使用されている。677は口径13.8cm、器高2.1cmで、口縁部は外面を強く押さえるため、端部が外反する。また、口縁部と底部の境も強い押さえがあり、凹線状の窪みが廻る。器壁が薄く、底部が平坦であり、側面観が逆台形になることから、京都系土師器の中でも比較的古式に属する。
- 土鉢 678~680は紡錘形をした土鉢である。いずれも一部を欠くものであるが、678は最大幅2.0cmが想定できるやや大型である。679は端部を欠くが、長さ3.6cm、幅0.9cm、重さ2.5gである。680も端部を欠くが、長さ4.4cm、幅1.2cm、重さ5.6gである。
- 鉛玉 681と682は金属製品である。681は直径1.2cmの鉛玉である。完全な球形ではなく、一部に突起も認められる。発射された鉄砲玉であろうか。682は幅0.3cm、厚さ0.1cmの棒状の銅製で、折れて長さ5.7cmと4.2cmに分かれている。
- 鉄砲玉
- 銭貨 683~689は街路出土の銭貨である。683は唐の621年初鑄の「開元通寶」で、直径2.3g、重さ2.5gである。第9面出土である。684は北宋の1024年初鑄の真書体の「天聖元寶」で、直径2.3cm、重さは2.8gである。第3面出土である。685は北宋の1038年初鑄の篆書体の「皇宋通寶」で、直径2.4cm、重さ2.6gである。第9面出土である。686は北宋の1078年初鑄の行書体の「元豐通寶」で、直径2.3cm、重さ2.5gである。第9面出土である。687は北宋の1101年初鑄の篆書体の「聖宋元寶」で、直径2.5cm、重さ2.4gである。
- 688は明の1408年初鑄の「永樂通寶」で、直径2.5cm、重さ3.0gである。第9面出土である。689は半分を欠くため、「〇平〇寶」のみ判読できる。北宋1064年初鑄の「治平通寶」であろうか。
- 以上が、街路とそれに関連する遺構から出土した遺物であるが、遺構の時期は、660や661の染付皿E群、653・676・677の京都系土師器の出土から、街路の構築時期は、16世紀後葉以降と考える。

(5) 土坑墓

SX083 (第123図)

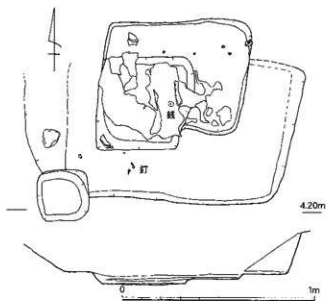
SX083は、L-7区で検出された墓である。形状は、東西145cm、南北75cmの方形の掘り込みの北辺に、東西75cm、南北55cmの方形の掘り込みを行い、さらにその掘り込みの南西部に東西50cm、南北50cmの正方形を掘り込んでいる。このため、掘り込みは三段になり、最深部は検出面から25cmである。内部は、最深部の正方形土坑を中心に木炭層が広がり、人骨と思われる歯や粉末状や細片となった骨片が確認された。

人骨

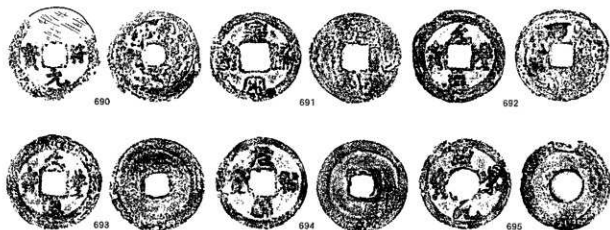
六道銭

第124図に図示した銭貨6枚は、木炭層の面から出土したもので、六道銭と考える。690は一部に付着物があるが、北宋の1009年初鑄の「祥符元寶」と思われる。直径2.5cmで、重さは2.7gである。691は北宋の1038年初鑄の篆書体による「皇宋通寶」で、直径2.4cmで、重さは2.8gである。692と693は北宋の1078年初鑄の行書体による「元豐通寶」で直径2.5cm、重さは3.5cmである。694は北宋の1086年初鑄の篆書体による「元祐通寶」で、直径2.5cm、重さは3.8gである。695は北宋の1101年初鑄の行書体「聖宋元寶」で、直径は2.4cm、重さは3.3gである。中央の方形の孔は、円形に変形している。

遺構の時期は、小片であるが京都系土師器が出土しており、16世紀後葉と考える。



第123図 SX083実測図(1/20)



第124図 SX083出土遺物(1/1)

(6) 柱穴状遺構

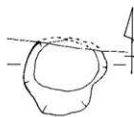
府内町跡第11次調査区からは多くの柱穴状の掘り込みが検出された。ここでは、その中でも主要な遺物が出土した遺構と、柱穴状遺構が互いに関連し櫛状になる柱穴を報告する。

SP028 (第125図)

SP028はL-6の北側で検出された遺構で、東西方向を長軸にし、48cm、南北35cm、深さ15cmの小規模なものである。

銭貨

出土遺物は第126図に図示した銭貨四枚である。696は北宋の1078年初鑄の行書体による「元豊通寶」で直径2.4cm、重さは2.6gである。697は北宋の1056年初鑄の篆書体による「至和元寶」で直径2.4cm、重さは3.0gである。698は北宋の1101年初鑄の篆書体の「聖宋元寶」で、直径は2.5cm、重さは3.4gである。699は北宋の1038年初鑄の真書体による「皇宋通寶」で、直径2.4cmで、重さは2.6gである。

第125図
SP028実測図

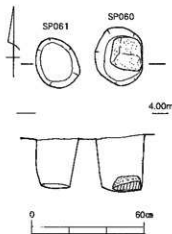
第126図 SP028出土遺物(1/1)

SP060 (第127図)

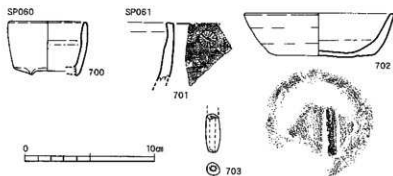
SP060とSP061はL-6区で東西に隣接して検出された柱穴状遺構である。SP060は直径25cmの円形で、深さは30cmである。

香炉

第128図700は出土遺物であるが、口径6.0cm、底径0.5cmで小さな脚が3カ所付く香炉である。器高は4.3cmで小さいが、龍泉窯系青磁である。



第127図 SP060・061実測図(1/20)



第128図 SP060・061出土遺物(1/3)

SP061(第127図)

河原石 SP061はSP 060の東に10cm離れて検出された柱穴状遺構である。規模は東西30cm、南北35cmで深さは32cmであるが、床面に30cm×30cm、厚さ10cmの河原石が据えられている。

瓦質土器 出土遺物は第128図の701~703である。701は口縁部が直口する瓦質土器の鉢で、口縁部外面にスタンプで菊花文が押捺されている。702は口径11.6cm、底径8.3cm、器高3.6cmの在地系土師質土器で、底面には糸切痕のあとに板状圧痕が付く。底部周辺の器壁が厚く口縁部にかけて尖るように伸びる。703は紡錘形の土罐で、端部を欠くが、最大径は1.1cmで、残されている長さは3.0cm、重さ3.2gである。

この遺構の時期は、702から14世紀後半と考えられ、内部の河原石の存在から建物に関連する可能性もある。

SP094

SP094はJ-6区の街路調査中に検出された直径35cm、深さ30cmの柱穴状遺構である。掘り込み面は不明であるが、第4面より古い。

瀬戸美濃系
天目

遺構から出土した第129図704は瀬戸美濃系の天目茶碗である。露胎となった内ぞり高台周辺以外は暗黄褐色の釉が厚くかかる。高台径は4.3cmである。

SP099(第128図)

SP099は、L-6区の北部で検出された東西50cm、南北35cmの長円形をした柱穴状遺構で、深さは約20cmである。

在地系土師

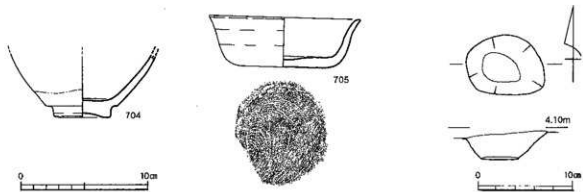
出土遺物は第129図705の在地系土師質土器で、口径12.0cm、底径9.3cm、器高3.9cmで、口縁部が伸び端部で外反する。14世紀末から15世紀前半の土器と考える。

柱穴列(欄)(第131図)

8本柱穴

府内町跡第11次調査区は西半分はSF140の街路とSD044・SD051の溝が構築されているため、柱状遺構は不明である。しかし、SD053を境に東側になるL-6・7区には多数の柱穴状遺構が検出される。そうした中、L-6・7区の東寄りでは、ほぼ等間隔に南北に並ぶ8本の柱穴状遺構が確認でき、さらに南北に隣接する調査区に続いている。

柱穴列の方向性はN-5°-Eで、柱穴の掘り込みの形状は異なるが、深さはほぼ一定している。掘別の柱穴状遺構を北からA・B・C・D・E・F・G・Hとして報告すると、Aは長軸25cm、短軸20cmで深さは約30cmで、北側の壁は若干挟れている。Bは東側の壁に段が付く柱穴状遺構で、直径約25cmで、深さは20cmである。Cは上部をSK021と切り合うため、検出された面では長軸20cm、短軸15cmで、深さは約5cmであるが、SK021の検出面からは深さ約30cmとなる。Dは長軸50cm、短軸30cmで、深さは約25cmである。E



第129図 SP094・099出土遺物(1/3)

第130図 SP099実測図(1/20)

深さは約25cmである。Eは東西に細長く、長軸40cm、短軸25cmで、深さは約40cmである。F西側で他の遺構と切り合うが、ほぼ円形で、直径40cm、深さ約35cmである。Gは他の遺構と切り合うが、直径約30cmで深さは20cmである。そして一番南のHはほぼ円形で直径約40cm、深さ45cmである。

柱穴遺構の中心間の間隔は、A-B間が185cm、B-C間が190cm、C-D間が185cm、D-E間が170cm、E-F間が193cm、F-G間が190cm、G-H間が180cmで、概ね185cm前後に納まり、6尺間隔とも言える。築地塼の中央柱の可能性を考える。

築地塼

遺構の時期は、柱穴遺構から遺物の出土は少なく、そのみで、決めることができない。また、AはSP106、BはSK020、CはSK021、DはSK008、FはSK118、GはSK089とSK038、HはSK038と切合い関係にある。しかし、互いに時期を決定できる良好な資料はなく、時期は不明であるが、京都系土師器を含まないことから、16世紀以前と考える。

(7) 各地区出土遺物 (第132・133図)

第132・133図の資料は、表土掘削中または包含層調査中に出土した主要遺物で、SD044出土の725以外は遺構からの出土ではない。

白磁皿

第132図706は高台径11.0cmの白磁皿である。見込みには毛彫りで文様が描かれており、その上から白磁釉がかかっている。707は口径5.6cmの褐釉陶器の坏である。708は口縁端部がやや肥厚した黒釉陶器の壺である。内面は灰褐色をしており、口径は9.0cmである。709・710は胎土や内面の調整、釉の発色から同一個体と考える。器形は不明であるが、外面に褐色釉がかかる。711は口縁部が外反する碗で、口径は16.8cmである。残された部分の全面に青磁釉がかかり、龍泉窯系の青磁碗である。

褐釉陶器

黒釉陶器

龍泉窯系青磁

備前焼

712は口縁部が帯状に肥厚し、その部分に凹線を加えた備前焼の大甕の資料である。713は高台径5.4cmの碗であるが、胎土や茶褐色の釉が厚くかかることから、瀬戸美濃系と考える。

瀬戸美濃系

瓦質土器

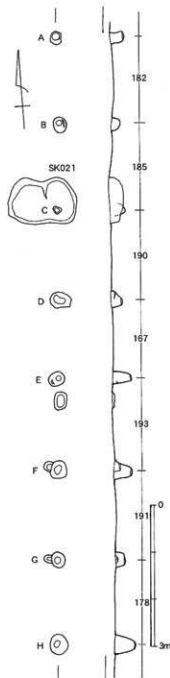
714~716は瓦質土器である。714はSE071出土の594の口縁部形態と類似するが、直立する口縁外部が突出した下位にある文様が短沈線文、肩部の文様も連続した菱形文様で、文様が異なる。715は底部外面に細い凸帯が廻り、脚を付けた火鉢である。716・717は文様や胎土、器形から同一個体と考える。低い凸帯とそれに沿った沈線を二条廻らせ、その間に文様帯を形成し、スタンプで菊花文や五弁の花文を充填している。器形は六角形または八角形で、花瓶と考える。

菊花文

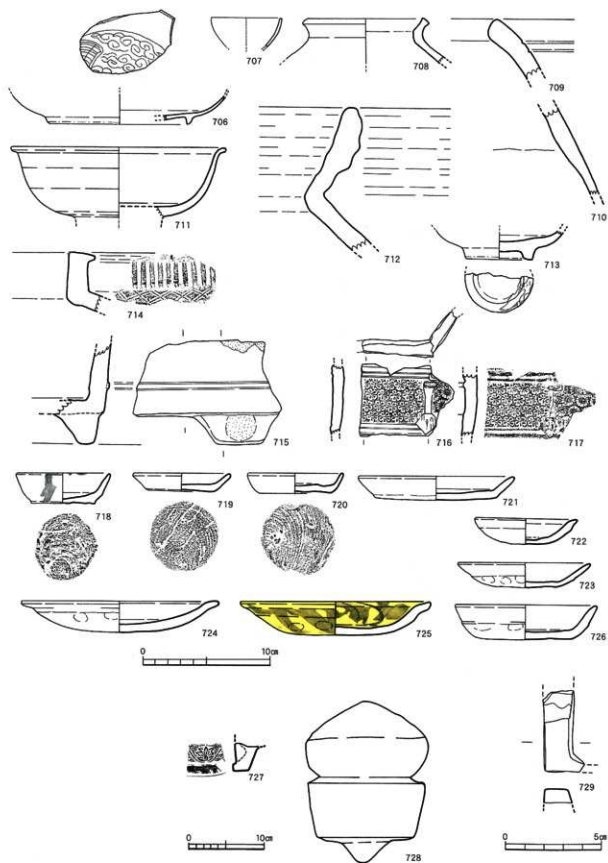
花瓶

718~720は在地系土師質土器である。718は口径7.4cm、底径5.0cm、器高2.4cmで、口縁部にスガが付着しており、灯明皿としても使用されている。底部は糸切底で、板状圧痕が付く。719は口径7.8cm、底径5.2cm、器高1.4cmの皿で、底部は糸切痕の後に板目状圧痕が付く。720は口径7.6cm、底径5.6cm、器高1.6cmで、底部には粗い糸切痕が付く。

721は口縁成形された皿であるが、底部の糸切痕はナデ消



第131図 柱穴列実測図(1/80)
(数字はセンチメートル)



第132図 地区出土遺物①(1/3, 1/2, 1/5)

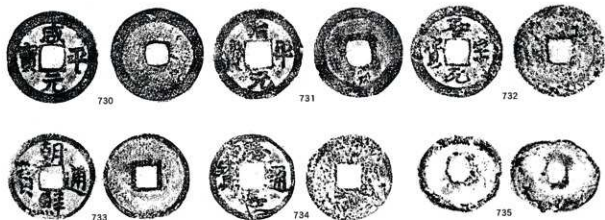
されている。京都系土師器を意識した在地系土師質土器であろうか。口径12.8cm、底径9.8cm、器高1.9cmである。

722～726は京都系土師器である。722は口径8.2cm、器高2.0cmで、全体的にススが付着し、見込み部分はタール状になっており、灯明皿として使用されている。723は口径10.4cm、器高2.0cmで胴部には指圧痕が残る。724は口径15.5cmで、器高2.5cmの浅い皿である。725はSD044出土の金箔を貼られた京都系土師器である。726は口径12.4cm、器高3.5cmの碗形をしている。口径部内側と胴部と底部の接合部は強く押さえており、凹線状になっている。727は軒平瓦の瓦当の中心飾りである。

728は五輪塔の空輪・風輪である。宝珠形の空輪の最大径は16.2cmで、風輪の上部最大径は15.6cm、下部最小径は12.8cmで、全体の長さは21.6cmである。阿蘇溶結凝灰岩製である。

729は赤間石の硯である。墨池の破片で、角は隅丸に仕上げている。

第133図は銭貨である。730は、北宋の998年初鑄の「咸平元寶」で、直径2.4cm、重さ2.6gである。731は北宋の1064年初鑄の真書体による「治平元寶」で、直径2.4cm、重さ2.5gである。732は北宋の1101年初鑄の行書体による「聖宋元寶」で、直径2.4cm、重さ2.2gである。733は李氏朝鮮の1423年初鑄の行書体による「朝鮮通寶」で、直径2.3cm、重さ2.1gである。734は慶長年間(1596～)に鑄造された「慶長通寶」である。直径2.2cm、重さ2.1gである。735はキセルを潰した近世の厘首銭で、直径2.3cm、重さ2.2gである。



第133図 各地区出土遺物(1/1)

3. 第76次調査の遺構と遺物

(1) 調査の概要

目に金箔
鬼瓦

平成13年に、第11次調査を実施したが、土地収用の関係で、調査区の東隅の発掘調査ができなかった。また、第11次調査の際、調査区の東端で検出された井戸(SE011)から、目に金箔を施した鬼瓦が出土し、その関連遺物に対する期待もあった。そこで、この場所については、発掘調査が可能になった時点で実施することとした。そして、迎えた平成18年、発掘調査が可能となり、実施することとなった。

金箔鬼瓦

発掘調査は、約72㎡と狭いものであったが、調査区の北端で多量の瓦を埋め込んだ土坑が検出された他、隅丸方形や円形の土坑、溝状遺構などが、多数の柱穴状遺構も検出された。また、南北方向に延びる短い溝も確認された。さらに期待された金箔鬼瓦に関連する遺構や遺物は検出されなかった。すなわち、第11次調査区の東隅の状況が続いていると言うことであった。

なお、第76次調査で出土した主要遺物は、第140図にまとめて図示した。

(2) 土坑

SK001 (第134図)

多量の瓦
廃棄処理

SK001は調査区の北隅で検出した遺構で、大規模な掘り込みの南西隅を調査したにすぎない。確認できた遺構の規模は、約5mの長さで、弧を描くように掘り込みラインが検出され、深さは約1.0mで平坦な床面に達する。遺構内からは多量の瓦の破片が検出され、廃棄処理された状況であり、西側に隣接する第11次調査SK001の円形土坑と類似した状況をしている。

灯明皿

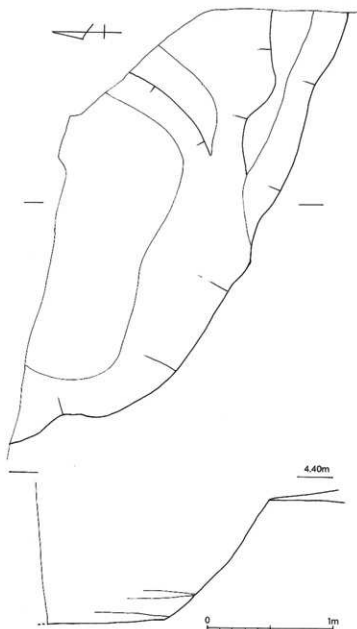
出土遺物は第140図1~5に図示した。SK001から出土した遺物である。1・2は京都系土師器で、1は口径9.2cm、器高1.8cmで、口縁部にススが付着しており、灯明皿として使用されている。2は口径13.0cmで、器高は約2.6cmである。2点ともてづくねで、器面にナデや指圧痕が残る。

土鏝

3は紡錘形の土鏝で、長さ4.2cm、最大径1.2cm、重さ4.5gの完形品である。

瓦片

4・5は多量に出土した瓦片の接合作業を行った結果、縁



第134図 SK001実測図(1/30)

辺が観察できた資料である。2点とも厚さが2.1cmで、下端と側面が観察できる。側面は上部端が尖るよう
に成形されており、下端は斜めに削られ整えられている。

遺構の時期は、京都系土師器が出土することから、16世紀後葉から末葉と考える。

SK002 (第135図)

SK002は調査区の北部で検出された隅丸方形土坑である。遺構の規模は、東西2.2m、南北約1.6mで、
深さは、東側が深く40cmであるが、西側の壁周辺は浅く、検出面から床面までならぬからである。平面形
は、南側の壁のラインが乱れるため、隅丸方形の端正さを欠く。

瓦質土器

出土遺物は第140図6・7の2点を図示した。6は口径11.7cm、底径6.0cm、器高2.6cmで、口縁上部は尖
るように仕上げている。底部は糸切底と思われるが、磨滅している。7は瓦質土器の香炉で、口径12.0cm、
底径9.5cm、器高5.3cmの体部に3カ所脚が付き、全体で、器高6.5cmの大きさになる。直口する口縁部外面
に沈線を廻らせ、その上位に円形のスタンプ文が連続的に押捺されている。

遺構の時期は、6の時期とすれば、15世紀末から16世紀前葉と考えられる。

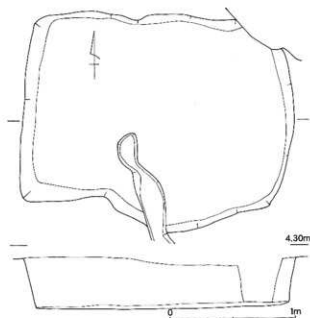
SK005 (第136図)

SK005は調査区の中央南寄りて検出された土坑である。遺構の規模は、南北に長い小判形をしてお
り、長軸は1.5m、東西の短軸は1.1mで、深さは15cmである。遺構内からは、角礫や瓦片に混じり遺物
が出土している。

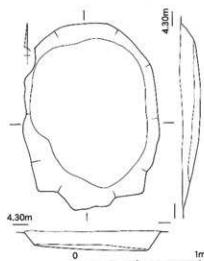
出土遺物は第140図8・9を図示した。8は瓦質土器で、口縁部は内湾し、内面には指圧痕がこのる。ま
た外面は削り出した、断面台形の凸帯が廻り、その下位に菱形を基調としたスタンプ文が連続して押
捺されている。9は口径11.2cm、底径6.3cm、器高2.5cmで、内面にはロクロ成形時の回転による凹線が残
る。底部は糸切底である。

土師質土器

遺構の時期は、9の土師質土器の坏の形態から15世紀末から16世紀前葉と考える。



第135図 SK002実測図(1/30)



第136図 SK005実測図(1/30)

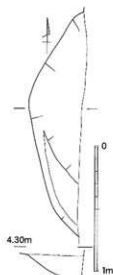
SK007 (第137図)

SK007は調査区中央の東壁沿いで検出された土坑で、遺構の西側の一部を発掘したのみで、大半は東側の調査区外となっている。遺構内からは、角礫や円礫が充填された状態で検出された。

銭貨

遺構の一部のみの調査であったため、遺物の出土は少ないが、第140図10の銅銭が出土した。この銭貨は北宋の1068年初鑄の篆書体による「熙寧元寶」で、直径2.4cm、重さ1.9gである。

遺構の時期は、検出された位置などから16世紀後葉と考える。

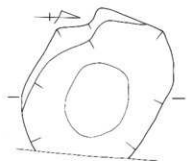


第137図 SK007実測図(1/30)

SK010 (第138図)

SK010は、調査区の南東隅で検出された土坑で、一部は東壁にかかり、調査区外になっている。遺構の規模は、主軸を北西方向にとり、長さ1.4mが想定され、幅は1.0mの楕円形で、立ち上がりの壁は緩く、皿状に窪み、深さは20cmである。遺構内からは、角礫や円礫が出土したが、土器や陶磁器は良好な状態で出土しなかった。

遺構の時期は、検出された位置から16世紀後葉と考える。



第138図 SK010実測図(1/30)

SK052 (第139図)

SK052はSK002の下面で検出された土坑である。遺構の平面形は直径約90cmの円形をしており、検出面から約30cmで、直径約70cmの平坦な床面に達する。遺構内からは在地系土師質土器の坏の小片や瓦質土器の胴部の破片が出土した。

在地系土師器

遺構の時期は、15世紀末から16世紀前葉と考えられるSK002の下部で検出されたことや、在地系土師質土器が出土していることから、14世紀から15世紀前半と考える。

(3) 表土・包含層出土物 (第140図)

11~19は表土や包含層からの出土遺物である。

11はL-6区1層出土の在地系土師質土器の小皿である。口径7.2cm、底径5.5cm、器高1.3cmで底部は糸切底である。内面は磨滅している。

土錘

12~17は紡錘形の土錘である。12は、M-6区1層出土の完形品で、長さ3.1cm、最大径1.1cm、重さ4.0gである。13・14・16は表土層出土である。13は長さ3.9cm、最大径1.3cm、重さ6.3g、14は長さ3.5cm、最大径1.3cm、重さ5.6gである。16は約3分の1を欠くが、最大径は1.0cmで、長さは2.9cm以上、重さは2.2g以上である。15は、L-7区2層出土である。長さ4.9cm、最大径1.4cm、重さ8.4gである。17は、約半分を欠く資料である。最大径は1.6cm、長さ5.2cm、重さ12.4g以上である。

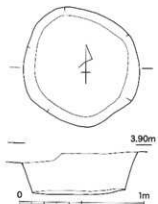
白磁型押入形

18は包含層の上部出土の白磁の型押しの衣を着た人物像である。観音像が想像できる。

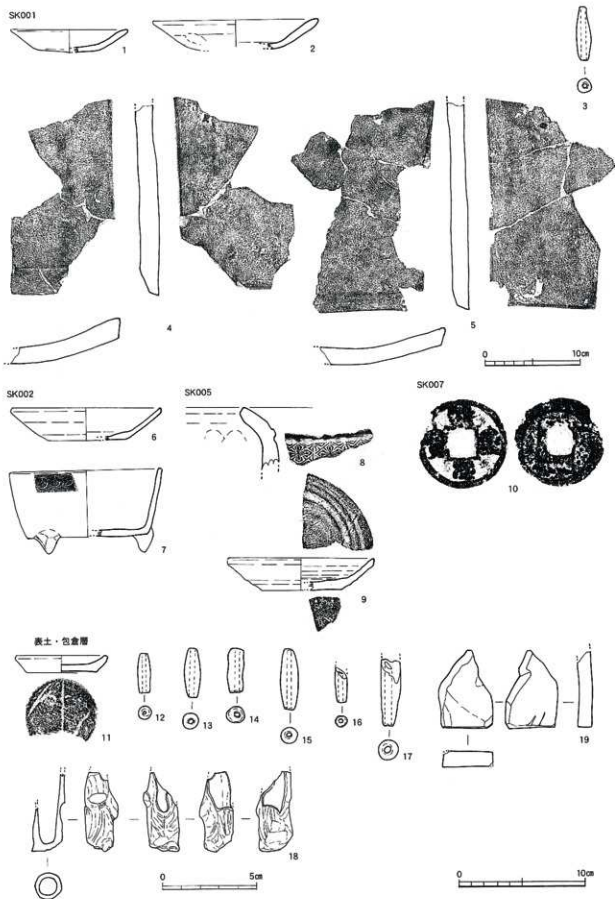
滑石製石鍋

19は厚さ約1.0cmの滑石製品で、下面を直線的に切断している。石鍋の破片と考えられ、温石として再利用されている。

温石



第139図 SK052実測図(1/30)



第140図 第76次調査区出土遺物(1/3, 1/4, 1/2, 1/1)

第3節 小結

本章では西を第2南北街路、南を名ヶ小路、北を横小路の南側沿いの町屋、東を横小路と名ヶ小路に囲まれた、豊後府内内で2番目に大きな境内を持つ称名寺跡の南西部の発掘調査の成果を報告するものであるが、冒頭で述べたように中世大友府内町跡第11次調査は、この広大な寺院跡の最初であった。このため、調査時点では、地下の遺構の状況は全く想像できなかった。しかし、発掘調査の結果、3つの大きな遺構に関する成果を上げることができた。

第1は豊後府内を南北に貫く第2南北街路の規模や構造、変遷を確認することができた。街路遺構は、表土下に形成された遺物包含層を除去すると、最初に検出される遺構であり、「府内古図」どおり調査区西部で南北方向に展開する状態であった。

SF140として報告した第2南北街路は、下部に14世紀末から15世紀初頭の遺構があり、その上面に版築状の土層断面を見せながら約50cm積み上げられている。しかし、この路面を構成する堆積土の中からは、16世紀後半の遺物しか出土せず、しかも最上面には島津氏の豊後府内侵攻に起因すると想定している焼土を多く含む側溝が検出された。このことから、第2南北街路は16世紀後半に整備された街路であると判った。

街路の構築状況を見ると、11面の硬化面が確認できる。しかし全面で検出されるわけではなく、部分的な補修を繰り返しながら整備したものと想定する。また、街路側溝は、先に述べた焼土を含む溝以前にもSD139・144の溝があり、街路幅を狭めながら使われている状況が判る。

第2は称名寺等の施設を区画する大規模な溝の存在を確認することができた。称名寺を区画する溝は、16世紀後葉のSD044があるが、それ以前にも内側にSD051とした15世紀代の区画性の強い溝がある。土層断面から見ると、先行するSD051は2度、ほぼ同じ位置で掘り返しが行われており、その後外側に寺域を拡張したと考えられSD044が掘削されている。SD044も少なくとも3度以上は同じ場所で掘り返しが行われており、最終段階の掘削で第2南北街路（SF140）を削っている。

この15世紀代のSD051と、16世紀後半のSD044の二つの溝の間には、寺域の拡張と溝の大規模化の変化を見ることができる。この間に称名寺地域の豊後府内における位置付け、または機能の変化があった可能性も考えられる。

そして第3は称名寺の内部の状況やその周辺の変遷を確認することができた。称名寺域の西側を画するSD044は半分程度埋まった状態の時期に焼土を含む厚い土層が形成されていることが観察される。この層は、島津氏の侵攻を受けた際に生じた火災を、処理するために埋め立てられたものと考えられ、同様な焼土層は萬寿寺跡など、各地区の発掘調査でも確認されている。この溝は最終的には完全に埋め立てられ、平地となり裏手に井戸を有する町屋と化しており、称名寺と第2南北街路を挟んで西側にある唐人町が両側町になった可能性を示している。

こうした、上面幅が約5mに達する大規模な溝以外にも、第2南北街路と西側に位置する唐人町との間にも初期の街路硬化面を切って、一時期区画性の強い溝が掘られているがすぐに埋め立てられている。

以上の他に注目される遺構として、第8図Dに図示した版築状の土砂堆積がある。これは、15世紀代の溝であるSD051が埋め立てられた上部に築かれ、16世紀後半の遺構であるSD044とSD048に削られた状態である。街路遺構のような硬化面は観察されないため、築地塀の可能性を考える。称名寺の西境が溝のSD051からSD044に変遷する間に、埋め立てられたSD051の上に築地塀が甞る時期があったことも推測される。しかし、現時点で、この遺構が確認されているのは中世大友府内町跡第11次調査だけであり、今後の調査の進展を待ちたい。

府内町跡第11次調査の成果は、その後の隣接する広面積の調査のさきがけとなるものであった。以上の小結は、そうした調査成果を視野に入れ、述べたものである。